

---

# 原子番号173

克己 残心

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

原子番号173

### 【Nコード】

N9326W

### 【作者名】

克己 残心

### 【あらすじ】

とある湾岸都市、久宇慈市。その街の機動隊に務める、剣道が取り柄の青年の名は今村大希。タイムトラベルだとか、巨大ロボットだとか、子供じみた夢のある話がある話がある。とある深夜にタイムトラベルについて組まれた特番を見る。結局その出来栄は大希を落胆させたが、その夜から世界は動き始めていた……

剣に生きる、正義感に溢れた青年の名は今村大希。優しく、気遣いもできるがどこかに影を持った青年の名は来栖未成。この二人の

周りで流れていく、不思議な2012年。

Beyond all Space and Time · 全ての  
時空を越え、繋がっていく。

## Prologue

人は進化を渴望する。その根源的な欲望はどんな存在よりも強い。地球の四十億の歴史の中、たった数百万年という間に人間は凄まじい変遷を遂げてきた。手に武器を持ち、火を手に入れ、言葉を生み出し、ついに人は爆発的な成長を遂げ始めた。農業革命、都市革命、そして産業革命。人は進化を、成長を続けた。それを経てもなお、人はその欲望を収めるところを知らなかった。それが結果的に原子爆弾の悲劇を生み出そうとも、人はそれでもその進化の欲望に従って、この世の理を求め続けたのだ。

もし、人が少しでも進化の欲望を抑え、知性の成長を待とうと努めたならば、こんな出来事は起きなかつたのかも知れない。

## 1st Period 深夜

時計の針が、暗闇の中で一時を指していた。狭苦しい六畳間の中、一人の青年がテレビをじつと見つめていた。鷹のように、丸い中にも鋭さのある目が、青や赤、緑と様々な光を反射している。隣の寝室では相部屋の友人がいびきをかいているというのに、よくもまあ集中を切らさず見つめ続けられるものだ。おそらく、青年が一つの憧れを持ってこの番組を見つめていたからなのだろう。

青年の前のテレビの中では、暖色が目立つポップでちやちなデザインのスタジオのもと、科学者達の舌戦が繰り広げられていた。片や白い髭を生やし、白衣を身にまとったいかにも科学者という外見をした三人。しかし、人は外見では判断できないものだ。白衣を着ている事が、素晴らしい科学者であることこの理由にはならないのだ。眉にしわを寄せた青年は、その事をはつきりと理解させられているところだった。黒いスーツを身にまとい、画一的に髪を整えた三人、科学者というよりは、むしろ銀行マンに見えるその三人が、形から入っている博士達を次々に論破していったのだ。

『時空間が歪んだワームホールを通る事により、未来にも瞬時に飛ぶことが出来れば、過去にだって遡ることが出来るのです。そして、負のエネルギーを持つ物質が存在すると同時に、またワームホールの存在も実証されているのです』

瓶底メガネまでかけた、一昔前のアニメにいそなイメージをこれでもかと体現した白衣の男性がそう口にする。隣のボサボサ白髪頭の老人も強く頷いてみせた。このボサボサ頭の老人は、既に『宇宙ひも』と呼ばれる存在を利用したタイムマシンの存在を否定されていたのだ。『宇宙の端など行けるか』と。まさしく、ワームホール論はこのオールドタイプ三人衆が抱く最後の希望だったのだ。しかしこれもまた、スーツを着て、テレビ越しにもわかるほど髪をワックスで塗り固めた男に、いとも簡単に打ち砕かれてしまうのだっ

た。

『あなたが仰りたい負のエネルギーとは、反物質のことでしょうね。確かに、1995年に反水素が生み出され、その存在は実証されました。しかし、現在もなお反水素は、ようやく0.2秒その姿を保つたに過ぎません。そんな不安定な物質を、一体あなた達はどれほど用いるつもりでいるのですか』

白衣の老人たちはうなだれ、黙りこんでしまった。コストパフォーマンスを話題にするなだとか、まだ戦おうと思えば戦えたのだろ  
うが、それはしよせん裸の王将がちょこまか逃げ回るようなものだ。これ以上自分達が傷つくのを恐れた三人は、ついに無抵抗を決め込んだのだった。

そうして出来上がった空虚な時間を突き、髭を真つ直ぐ切りそろえたスーツの男が立ち上がる。いきなりスタジオの真ん中に躍り出ると、手を叩いて乾いた音をさせながら、男は歯を見せて愛想よく笑う。『過去に遡る』という、数多の創作に反映されてきた人類の夢をこれでもかと否定したのだ。多少イメージを気にしているのだろう。テレビを見つめている青年は思った。

『皆さん。確かに、過去への時間旅行は人類の果てなき夢かもしれませんが、ですが、まあよく考えてもみて下さい。未来から来たという人間が、一人も見つかっていないというのは甚だおかしな話ではありませんか。それこそ、時間旅行が出来ないということの証拠なのです。ですが、これからも人はおそらく過去の世界へ飛ぶことを渴望するでしょう。それがいつか過去への旅を実現しないとは……  
言い切れません』

研究者が言い終わらぬうちに、青年は口をとがらせ、いかにも不満そうな様子でテレビを消してしまった。リモコンをちゃぶ台の上に放り上げ、部屋中に染み渡るため息をつきもした。蓋を開けてみるまで、この青年、今村大希いまむら たいしきはこの番組をずっと心待ちにしていたのだ。二十三にもなる大希だったが、心は少年、『タイムトラベル』だとか、『巨大ロボット』だとか、そういうものにずっと憧れを抱

いていた。

ところがどうだ。蓋を開けてみれば、甲斐もなくこてんぱんに言い込められる情けない研究者しか出演していなかったのだ。夢物語であるにせよ、もう少しまともな理論を背負って戦ってくれと思うっていたのに、某ネット大辞典で出てくるような知識しか、あのパソコン研究者は提示できなかったのだ。失望した大希は一気に夜更かした疲れに襲われて、再び暗闇の中でため息をついた。

「ふざけんな、あのポケ老人ども……あんなんじゃ柳田何とかにも完敗だつつうの」

機動隊勤務の身に夜更かしはあまり好ましくない。それでも楽しみに起きていたというのに、やはり深夜番組のクオリティでしかなかったのだ。テレビをもう一度だけ見て鼻で笑うと、大希は友人を起こさないよう、抜き足差し足で隣の寝室に身を滑り込ませる。大希の苦悶も知らず、友人の空井健そらい たけるは酒の匂いを漂わせながら楽しそうに眠りこけていた。大希はその寝顔を羨ましい目で見つめる。

「俺もあのテレビ見て、戦国時代にでも行った夢を見て寝たいとか思ってたのにさ……」

そう独り言を呟くと、今日は何の夢も見ないと決めて薄い布団に倒れこんだ。

時をほぼ同じくして、ここは久宇慈市くうじしのとある住宅街。もうすぐ草木も眠る丑三つ時という時に、一人の男があてどもなく街をさまよっていた。その目は虚ろで、着ている服はすり切れ、足も引きずるようにして、とにかくまともな生活を送っている人間のように見えなかった。そんな男がこんなところで何をしているのか、誰が見ても皆目窺い知ることができないだろう。ただ歩いているだけ、これぞ本物の『さまようこと』としか言いようがない。通りに人っ気はなく、大小様々な羽虫だけが、次の瞬間に起きる出来事に備えて街灯に集まっていた。

十分して、ついに丑三つ時がやってきた。草木が眠り、家の軒が

三寸下り、魑魅魍魎ちみもつりじょうが跋扈はくこする丑三つ時がやってきたのだ。それでもなお、男は時折止まったり、時折動き出したり、その不審な雰囲気を一ミリたりと変えようとしない。本当に、ただただ歩いているらしい。だがそこへ、魔が静かに忍び寄ってくる。ナイフを街灯のもとに光らせ、電柱の陰に隠れながら、その浮浪者を窺っている男が一人。この男が、どんな思いで浮浪者にそうするのはわかからない。だが、ナイフを持っているのだから、することは一つに決まっている。

浮浪者が立ち止まった瞬間、ついに男は走りだした。高らかに足音をさせながら、ナイフをしっかりと構える。しかし、浮浪者はまるで無頓着、この世で何が起きようが関係ないというように、振り向いたりする素振りは全く見せなかった。

「死ね」

悲鳴は上げなかった。ただその身をぶるつと震わせ、さして苦しむ様子もなく、浮浪者はすぐにぐったりと動かなくなった。手に伝わる浮浪者の全体重を感じると、男はすぐさま浮浪者からナイフを抜き去った。そして、自分が殺した相手をこれ以上一瞥することもなく、血だまりを飛び越え男はその場を走り去っていった。

白く照らされた寂しい夜道の中で起きた、たった一分の出来事。それを見ていたのは物言わぬ羽虫だけ。血に塗れた無残な死体が見つかるとは、明日の五時まで待つこととなるのだった。



大希は込み上げてきた諦めにも似た思いを排する。それから竹刀を握り直し、大希は再び柳剣人やなぎけんと向かい合った。

高校時代は共にしのぎを削り合い、そして共に玉竜旗を目指した間柄の二人。本来なら剣質の違いこそあれど、そこに実力の違いは無いはずであった。ところが今日はどうしたのか。先程も剣人の攻めに小手を引き出され、剣先が中途半端に上がった間抜けなところに重たい面打ちを叩き込まれてしまったのだ。親友に子供扱いされつつある自分が悔しかったが、まぶたが重たいこの状態では勝ちようがなかった。

それでも、やるからにはやらなければ剣人に呆れられてしまう。それだけは大希のプライドが許さなかった。じりじりと数センチ刻みですり寄り、そこから気合いとともに面に飛ぶ。しかし剣人は動じない。すげなくその剣先を払って、そのまま逆に面を放った。大希は首を捻って何とかかわす。剣人の体当たりを食らってよろめいたところを、彼はさらに間合いを詰めてくる。とつさに竹刀を頭上に掲げて剣人の一撃を防ぎ、そのまま突っ込んできた彼とぶつかり合った。そのままつばぜり合いに持ち込み、大希は腰に力を入れて剣人に圧力をかける。つばぜり合いには強い自信があったから、簡単には分かれられないよう必死に食い下がった。剣人の方はさつさと分かれてしまったかったのだが、適当に逃げては大希の引き面の餌食になるから、やはり中々分かれることができない。

だが、徐々に空気の流れが変わり始める。大希が軽質で高めの気合を上げると、剣人が応えて重みのある気合を発した。どちらの油断もないことを確認した二人は、ようやくじつくりと間合いを置き始めた。示し合わせ、二人は同時に足を背後にすらせていく。その間にも、出し抜かれぬように油断は怠らない。お互い血眼で睨み合いながら、剣先が触れるか触れないかの間合いまで離れた。

その刹那、大希はいきなりその場で腰を入れながら踏み込む。剣人は思わず身構えてしまった。それを見逃さなかった大希は、そのままさらに剣人の間合いへとわずかに踏み込んだ。感度が高くなりすぎていた剣人は、思わず面を引き出されてしまった。そこを見逃さなかった大希は、機先を制して飛び出す。

「小手エ！」

キレのある出小手が、剣人の右小手を確かに捉えた。大希の鋭い気合いと竹刀の鋭い打突の音が、格技室の一带に凜と響く。残心も備わった、文句なしの一本だった。この出小手こそ、大希が恐れられてきた理由なのだ。いくら眠かろうが、一心に磨いてきた最高の一撃だけは鈍るはずもない。剣人は悔しそうに顔をしかめていた。直後に地稽古の終わりを告げる太鼓が鳴り響く。大希は安堵し、そして本日の不甲斐なさを思ってたため息をついた。

「今日はダメダメだ。ぜんぜん齒ごたえがなかったな。どうしたんだよ」

練習も終わって解放されるやいなや、剣人が手拭いで汗を拭きつつ大希のところまでやってきた。その鋭い目はいかにもつまらなそうに細められていて、先ほどの稽古に不満を持っているのがあるやうに見て取れた。あれだけ動けただけでも満足だ、と言いたいのをこらえて、大希は苦笑いしてみせる。

「いやあ、昨日夜更かししちゃってさ」

「夜更かしい？　なんだ。今でも健康優良児のお前にしたら珍しいな。彼女でもできたか？」

剣人のからかうような口調に、大希は顔をしかめた。一年前に昔の彼女と別れて以来、とんと浮名は流せていなかった。一方の剣人はもうすぐ結婚という所までこぎつけているのだから、明らかにならなくてこすりというほかになかった。

「彼女と眠れぬ一夜を過ごしたって？　そうだったら良かったよな。深夜の特番に期待して、バカを見たただけだよ」

「そんな面白い番組あったか？」

「すぐさま大希は首を振る。今日の深夜まではあると信じていたが、今はもう、あんな番組を楽しみにしていた自分が恥ずかしかった。

「いいや。無かったね」

剣人が大希の言い返しに首を傾げていると、二人の背後から健たけがやってきた。二人のやり取りをちやっかり聞いていた健は、その子供っぽさが残る顔にやたらとにやにやとした笑みを浮かべていて、忍び足で大希のそばに忍び寄り、出し抜けにその肩を叩いた。

「何言ってるんだよ。『ガチンコSF生討論会』を見るにあたって、お前は昨日の夜からタイムトラベルについて復習してたじゃないか」大希は気まずそうに顔をしかめる。剣人は呆れたように顔をしかめる。

「何だよその安っぽい番組。ハズレに決まってるだろ……お前がいまだに特撮とか大好きなの知ってるけど、それくらいの見境は付けるよ。だから彼女できないんだぞ」

「関係ないだろ！……その話もうやめだ！」

大希が腕ですっぱりと空を切り、他愛のない無駄話を封じ込めてしまった。まだまだつつきがある話題だったがだけに不満が残った剣人と健だったが、こうなってはもう口を裂いても言葉は引き出せない。二人は肩をすくめあい、せーので諦めた。すると話すこともなくなるので、自然に三人は着替えに赴く。その途中で、突然健が思い出したように口を開いた。

「あ。ゆうべといたら、通り魔が出たんだよなあ。朝から刑事部の奴らは大変だったよな」

健がうんざりしたような口調で呟くと、大希も眉にしわを寄せながら頷いた。自分がかくならない番組にいらいらしながら眠りにうつとしている影で、一人の浮浪者が殺されているのだ。世界というのはどこで何が起きているかわからない。剣人もため息をついて、指を折りながら人づての情報を数え上げ始める。

「死因は背後から心臓を一突きされたことによるショック死。死亡

推定時刻は午前二時から三時頃。目撃者はゼロ。聞いたのは大体これくらいだ」

袴の帯を解きながら健は唸った。体が資本を地で行くような奴だったが、それでも警察の端くれ、考えることは考えるのだ。

「目撃者がいないって、相当難しい事件になりそうだな。それに、わざわざ丑三つ時を選ぶなんて気味が悪いぜ。通り魔つつつても、かなり計画を練ってるんじゃないか」

袴の下から器用にトランクスを履き直しつつ、剣人は健の言葉に頷く。彼は将来刑事になる目標を持ってこの世界に飛び込んだから、犯罪に関しての知識は隣の二人よりも持っているつもりだった。

「そもそも通り魔自体が難しい事件だからな。現行犯逮捕ならともかく、こういう風に人目につかない時間を選ばれたりすると、下手をすれば完全犯罪だってあり得る。殺された奴の身元自体もわからないんじゃないか、余計に」

二人の言葉にももちろん耳は傾けていたが、大希は別のことを考えていた。考えてみると引つかかるのだ。簡単に骨格図を描いてみると、やはり一つの壁にぶつかった。大希は道着の紐を解きながら唸る。

「おかしくない？ 背後から心臓を一突きって、適当に刺したら背骨で逸れるだろ」

「あ。そういえばそうだな……」

剣人は大希の言葉に納得した。心臓を一突き、というのは存外に難しい。正面から刺しても、肋骨で逸れて上手く刺せないときが多いのだ。それが背後となれば大変だ。そもそもかなり刃渡りのある刃物を使わなければならないし、今しがた大希の言った通り、胸骨ならいざしらず、背骨を一刀のもとに貫く刃物はそうそうない。餅割り程度に日本刀を扱ったことのある三人は、その切れ味もおぼろげに覚えていたが、やはり正面きって心臓を突き破るのは至難に思えた。シャツの袖に腕を通し、健はその人差し指を立てた。

「合理的に考えようぜ。肋骨を避けて突き刺したって考えるのが普

通だろ」

「お前から合理的という言葉が聞ける日が来るとは思わなかった」  
剣人がやりとしながら言うと、むっとした健が剣人の肩を叩いた。

「なんだよ。俺だってバカじゃないんだよ」

「バカだろ。警察学校でも、いつも赤線をくぐり抜け続けてきたよ  
うな男のくせに、何言ってるんだ」

「それを言うな！」

健は歯噛みしたが、ため息混じりに大希はその二人の動きを制する。かたや熱血だけれど落ちこぼれ寸前、かたや冷静でもって秀才自然とぶつかり合う機会が多くなり、そして中庸の大希が潤滑油となる機会も多くなる。大希はいつも神経をすり減らす損な役回りだった。

「やめるよ面倒くさい。もっと建設的に話をしよう。肋骨を避けて突き刺したってことは、それなりに腕がある人間だってことでしょ」  
「あ、ああ。そうだな……」

健は唇を噛みながら頷いた。事実、それが分かれば犯人の絞り込みもしやすい。ナイフの手練など、久宇慈市という平和な街にそう  
そういるものではない。彼はあごをさする。

「剣のプロなら居合や剣道の有段者を探ればいいけど……ナイフつ  
て実力を測れないからな イテッ！」

剣人は眉にしわを寄せ、健の額を指で弾く。握力の強い剣人は弾  
指の威力も強い。健は返せる言葉も返せず、ただただ額を赤くして  
うつむいた。三人の中で一番小柄な健は、そのまま百九十に迫る長  
身の剣人に見下ろされる形となってしまった。

「だからバカなんだって。そんな表面的なもので実力が図れるわけ  
無いだろ。無計画に殴りに行ったんならともかく、わざわざ簡単に  
足がつくような方法で人殺しなんかしないさ」

健は顔をしかめて睨んだが、今回の『バカ』呼ばわりはさすがに  
言い返せなかった。

「くっそお……」

大希はこれ以上介入せず、もうなるがままに任せておくことにした。そう決めてみると、二人の滑稽なやり取りはとても楽しく映るのだ。うつすらと笑みを浮かべて二人の姿を見つめていると、いきなり一人の男が更衣室に現れた。

「すみません。ここに今村大希さんはいらっしやいますか？」

大希はすぐに手を挙げた。

「はい。僕ですが、どうかしましたか」

「いえ、刑事部の方から、今村さんが参考人として召喚されているんですよ」

「え？」「はあ？」「お？」

三人が一樣に似たり寄つたりな反応で振り返り、磁石で引かれるかのようにするすると新米の雰囲気を全身に湛えた青年の方に寄っていく。その他もチラチラとその三人と一人の様子を窺い始めた。久宇慈高校黄金世代の三人に取り囲まれては青年も縮こまるしかなく、居心地悪そうに手いじりしながら小声で続きを口にした。

「えっと、ですから、すぐに署の方へ来て欲しいそうです」

健はつばを飲み込むと、とにかく訝しがる様子の大希の肩をつついた。

「おい。お前何かしたのかよ。あ！ お前さては……」

「バカか。俺は大酒のんだお前の隣で寝たっつ」

大希が口を尖らせると、健はそうだよな、と呟き肩をつつく指を引つ込めた。剣人は宙を睨んでうむと唸り、そのまま大希に問いかけた。

「最近財布落とさなかったか。お前の持ち物が被害者から見つかったのかもしないぞ」

重要参考人として呼ばれたわけではないし、通り魔に少しも関わらない大希が呼ばれる理由としたら、近くで大希の持ち物が見つかることぐらいだろう。だが、大希はそれもなかったのだ。

「ないよ。警察が交番のお世話になるって、カッコ悪いだろ」

「それは俺に対する当てつけか。なあ」

最近まさに財布を落として交番のお世話になった健が迫ってきたが、大希はすげなく払って新米の脇をすり抜けた。

「もういいよ。……このあと体力トレーニングがあるけど、まあ、署へ出頭なら許してくれるだろ。ご足労ありがとう。行くぞ」

「はい！」

新米は勢い良く頷き、大希の後をついて歩き出した。

その頃、刑事部の方では、一人の青年がやたらと落ち着かない様子で待ち構えていた。

「大希……早く来いよお……」

### 3rd Period 病院

町の中心よりわずかに外れたところに建つ、展望台付きの白い鉄塔。これだけでは単に東京タワーを縮小し、そして純白に塗っただけの独自色の欠片も無い街のシンボルに見える。だが、このタワーには凄まじい計算性があるのだ。まず、このタワーには最新式の原子時計が積まれ、常に正確な時を刻んでいた。それだけでも物珍しいが、なんとこのタワーそのものがカルジオイド式の日時計となっているのだ。証拠が街の至るところにあるモニメントが様々に趣向を凝らした形で文字盤の役割を果たしており、元日に正確な日時計として作用するというスポットである。ベッドタウンで高い建物が少ないからこそできる芸当、爆発的な人気は無いが、息の長い観光名所となっている。

話が逸れた。だが、話すだけの価値はあると思う。また逸れた。今度こそ戻ろう。とにかく、そんなタワーのすぐそばに、久宇慈の警察署はあるのだ。

「未成<sup>みなり</sup>！ わざわざ出迎えに来てくれるなんて、苦労かけたな」

車から降り、大希は玄関先で待ち構えていた青年に駆け寄った。青年の名は来栖<sup>くるす</sup>未成<sup>みなり</sup>という。変わった名前だが、『達成したと満足せずに、いつまでも向上心を持つように』と名付けられた、れっきとした由来のある名前なのだ。『身なり』と聞き間違えた大希に、未成はいつだかそう言った。

「すぐ来てくれてよかったよ。タクシーを呼んでるから、すぐ大学病院に行くよ」

鑑識として働いている未成が大学病院へ行く理由は一つくらいしか思いつかなかった。だからこそ疑問になり、大希は小さく首を傾げた。

「ホトケさんに会いに行くのか？ どうして機動隊の俺が必要なん



だよ。参考人として引つ張り出してまでさ」

未成はしつかりと頷く。彼にとってしてみれば、彼がいなくては話が始まらないとさえ思っていた。重要参考人として呼んでもいいくらいだと。

「必要だから呼んだんでしょ。理由は追々話すから、まずはタクシーに乗って。ほら来たよ」

未成の細くしなやかな指が、遠くから走ってくるてっぺんに丸い時計のオブジェを付けた白いタクシーを捉えた。大希は自分の乗ってきた中古の軽自動車と見比べながら、ぼそつと呟く。

「俺、車あるの知ってるだろ？ どうしてわざわざ……」

未成は猫のように人懐っこい笑みを浮かべ、大希の方に振り返った。

「もちろん、君とゆっくり話したいからさ」

言葉自体は何でもなかったが、大希は気がついた。その頬が少し引きつっていることに。元々性格の優しい未成のこと、遺体を見に行くことに少々は緊張するのだろうと気にしないことに決めた。タクシーの自動ドアが開き、大希は素早くその空間に体を滑り込ませる。未成はその後にゆったりとつき従う。タクシーの運転手の質問に、未成は控えめの声で答える。

「大学病院までお願いします」

「了解しました」

サイドブレーキが引かれ、タクシーは滑るように走りだす。最近の車は随分騒音も少なく、確かに話を交わすにはもってこいかもしれなかった。大希は背もたれに全体重を預け、横目で未成の顔を窺う。彼はアイドルのように優しい顔立ちの男で、警察というと驚かれ、鑑識というとし落ち着かれる、そんな外見をしていた。一年前にふらりと転動してきて以来、二人は趣味も合って意気投合し、親友の関係を築いていた。

「未成、もう一度聞くけど、どうして俺が必要なんだ？」

未成はため息をついた。一瞬こちらを見るのだが、すぐに目を伏

せてしまう。いかにも不審な様子だった。

「なあ大希、変な話するけど、『クローン人間』って信じるかい？」  
大希はぼかんと口を開け放した。彼が信じるわけがなかった。まあ確かに、可能な技術ではある。だが、人々は認めないだろう。大希にしても、いつだかにそんな設定のあるゲームをやったくらいにしかその存在を頭にとどめていなかった。

「信じるわけ無いだろ。できたって、しちやいけないことはたくさんあるぜ。クローン人間はその一つじゃないか」

未成は曖昧に頷いた。信じたいが、決定的な理由のせいで、それを信じるのが未成にはできなくなってしまうていたのだ。

「まあね。普通ならそう言うよ。僕だって昨日まではそう思ってた。でもさ……技術的には可能だし、もしかしたら、なんだよ……」

大希は表情を歪ませた。未成は知性に溢れた青年であつたし、彼が決してふざけているわけではないこともその深刻な表情からも読み取れる。だからなおさら、大希は今の言葉が全くちぐはぐなものに思えてしまった。未成の表情から目を外し、大希は外の並木に目を向ける。

「未成らしくないな。そんなこと、あつたらたまらないじゃないか」  
一向に自分の言葉に耳を貸そうとしない大希。未成はそろそろ焦りだした。声を殺し、彼は大希に耳打ちをした。

「でも、事実あるんだよ！ 今日の深夜に殺された浮浪者の顔が、大希にそっくりだったんだ！」

「な、なんだって？」

身を捻って、大希はモノトーンの無機質な車内に目を戻した。自分に似た人間が殺されたのはあまりいい気がしないし、今までで一番の衝撃だった。だが、待てよと冷静になる。いくらなんでも、ただ似ているだけでクローンとするのは暴論だ。

「いやいや、いや。他人の空似だろ？ バカなこと言うなよ」

「本当は写真があるんだけどさ、見せたって大希は同じ事言うんでしょ？」

「ああ。」大希はすぐさま頷いた。「世の中には自分と同じ顔の人間が三人いるっていうだろ。そしてその三人に会ったら人生アウトだってね」

未成はため息をついた。ここまで自信を持って言われてしまうと、こちらもそうなのだろうと思えてくるから困ってしまう。だが、やはり未成には単なる他人の空似とは思えなかったのだ。

「だから見に行くんでしょ。見たら、何か思い出すことだってあるかもしれないし、何より解剖の人が『今村大希じゃないのか』とか言ってるから、とりあえずその『今村大希』ではないことを証明するためにも大希がいてくれた方が早いんだよ。身元を明かすものがないんだ。照合するために指紋を取ったけど、本当にそれくらいしかないんだ」

「ふうん……よくわかんないなあ……」

二人が黙り込んだところを縫うように、タクシー運転手の落ち着き払った声が出てきた。

「お二人とも、そろそろ大学病院に到着しますよ」

未成は興奮の早口をやめて、小さく頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。」そして、思い出したように頼んだ。「あの、機密情報というわけではないのですが、ここで聞いたことはなるべく口外なさないで頂けるとありがたいのですが……」

純白の、いかにも病院らしい大きな建物の前で景色の流れが緩くなる。運転手は料金を確認しながら頷いた。

「はい。分かりました」

薬品の匂いが漂う、白やベージュを基調とした調度品の揃った病院に入ってみると、すぐに違和感に気がついた。カウンターの奥の受付や、廊下に行く白衣を来た人々の視線が自分に向かって飛んでくるのだ。ちらりと目を合わせてみれば、彼らはすぐにそれを逸らしてしまう。視線に含む意志を読み取る技能を身につけてきた大希には、白衣の人々がいかにも驚き、そして不審に感じていることが

簡単に読み取れた。風邪でしきりにゴホゴホやっている患者達から離れた席に座りながら、大希は受付の方から戻ってきた未成に目を向ける。

「よし。連絡は付けてもらったから、霊安室に行こう。そこで検視担当の人と落ち合うつもりだから」

「ああ。さつさとしようぜ。みんなジロジロ見てくるから、ちよつと居づらい」

「そうだね……まあ、仕方ないよ」

未成はそれだけ言って歩き出した。大希も膝を叩いて立ち上がり、足早にその細い背中を追いかける。未成は特に迷う様子もなく、立ち止まらず順調に病院の隅っこへと向かっていた。その後を追ううちに、大希は自分のしていることがわからなくなってきた。自分は一体何のためここにいるのか。自分に似ているという刺殺体を見に来たのか。だが、単なる他人の空似であって、自分には何ら関わりがない。そもそも、生存確認なら電話で済むだろう。考えれば考えるほど未成の考えが読みがたいものに感じられるようになっていた。「あんまり気分よくないな。自分の死に顔見るようなもんだろ？」なのに、俺には何の脈絡もないときた」

「だから、『今村大希』だとして譲れずにいる解剖医達に文句なしに理解してもらったためだつて。で、ついでだから見て欲しいな、つてことさ。あ、こんにちは」

未成は霊安室の前で待ち構えていた、小柄で、白髪を綺麗に整えた初老の男性に頭を下げる。だが、一向にその男性は未成に目を向けようとせず、食い入るように隣の大希を見つめていた。二人が立ち止まるやいなや、男性はいきなり大希に詰め寄ってきた。

「あなたが今村大希ですか？ 息をして、しっかりと生きているあなたか」

生きているも何も、ここまで歩いてきたのだから死んでいるわけがない。自分はロボットかと突っ込んでやりたくなつたが、相手はかなりの年長者だ。上意下達の厳しい世界で生きている大希に、そ

んな小生意気なことを言う勇氣は無い。その鷹のような目に困った色を浮かべ、薄い唇をいっばいに引き伸ばして苦笑いした。

「ええ。神奈川方面機動隊勤務、今村大希と申します」

「なるほど。そうかそうか……いやはや、申し訳ない。てつきり、先日お亡くなりになった方はあなただとばかり……」

やはり、実際の口から聞いてみると違う。本当に、検視担当も殺されたのは大希だと信じて疑わなかったらしい。そこまで言われると、ついに大希も気掛かりになってきた。そわそわと手の置きどころを探しながら医師に尋ねる。

「そんなに私と似ているのですか？」

「ええ。これは見て頂いた方が早いでしょう。こちらへ」

医師はゆっくりと霊安室の戸を引いた。がらがら鈍い音がして、圧殺されそうなほど重たい雰囲気を保った空間が開かれていく。最初は神妙に振る舞い、無表情で霊安室の中を見つめていた三人だったが、ほぼ同時に異変に気づき、そして医師は目を丸くして部屋に飛び込んだ。

「ない！ 遺体がない！」

雷に撃たれたように立ち尽くしていた大希は、望み薄だが、それでも全身全霊をかけて信じたい事を尋ねてみる。

「そ、そんな。もう運びだされたんじゃない……」

「そんなことはない！」

医師はくるりと振り向き、つばを飛ばして叫んだ。その目は恐怖に見開かれ、手はわなないている。怪生のものに会えば、丁度似たような反応になるだろうか。それ程に医師の様相はひどいものだった。

「まだ遺体は解剖を待っていた。解剖がなかったとしたら、誰が好き好んで遺体なんか持ち去ろうとする？ 消えたんだ。忽然と消えてしまった！」

あまりに大きい医師の叫びを聞きつけたか、若い看護師が大希や未成のそばまで駆け寄ってきた。いかにも戸惑った表情を浮かべた

彼女は、心配そうに霊安室の中を覗く。

「い、一体どうしたんですか。かなり響いてますよ！」

しかし、医師は青くなつて近くの椅子に座り込んでしまい、顔を両手に埋めてうつむいてしまつていた。まともに答えられる様子ではない。それを見て取つた未成が代わりに受け答える。

「先日殺害された、身元不明の遺体が解剖を前に消えてしまつたんです。しかも、誰も触れた形跡がないんです……」

看護師は目を見開いた。そして、大希がついぞ言つたことを復唱してしまつたが、答えはやはり同じだつた。この世で起きたとは思えない事象を前にして、看護師は彼女自身も知らないうちに後退りを始めていた。

「あ、あの……わ、私。知らせてきますね。他の人にも……きつと誰かが運び出したんですよ。きつと」

うわ言のように言い残すと、看護師は脱兎のごとく駆け出していった。それを見送つた大希だつたが、自身もかなり混乱していった。確かに、死体など持ち出す意義がない。そして、それが死体だつたからこそ、余計に『消えた』という結果に説得力を持たせてしまう結果になつていた。空想の絵空事をいきなり真実として突きつけられた大希は、その混乱を処理することができずに頭痛を覚えるようになってきた。しかも、その痛みはいや増すばかりだ。大希は歯を食いしばりながら、未成に引きつった笑みを見せる。

「お、俺、帰るよ。何だか頭が常に何かで叩かれてるみたいなんだ……」

未成も小刻みに頷いた。大希はひどく顔をしかめており、その辛さが見て取れたのだ。蒼白な顔で大希の背中を見送ると、そのまま未成はぎこちなく霊安室の方に目を向けた。その目を厳しくし、未成は遺体が存在したであろうベッドを凝視すると、未成は誰にも聞こえない声で呟いた。

「こんなことになるのか……」

外に出た大希は、急いでタクシーを捕まえる。最早まともにものを考えることもできなくなってしまった彼は、とにかく自宅のせんべい布団に戻ろうと心に決め、走りだしたタクシーの中できつく目を閉じた。

## 4th Period 夢

気づけば、大希は霧の中に立ち尽くしていた。滅多に無いほど濃い霧で、二メートル先さえはつきりと見えない。大希は周囲を手探りで確かめ、ようやくここが時計塔の下だと気がついた。自分がどうしてここにいいのか、いる必要があるのかわからなかった彼は、ひとまず自分の家に帰ろうと心に決めた。ところが、そう思った矢先に大希は不思議な声を耳にした。

「今村大希……」

大希は足を止めた。霧の中、大希は刮目して周囲に気を立てるが、この霧では声の主が全くわからない。彼は戦慄していた。その声は自分の声とあまりに似ていたからだ。大希は白い虚空に向かって叫ぶ。

「誰だ！ 一体誰なんだよ！」

「今村大希。お前も今村大希だ」

今度は前から後ろから、二つの方向から自分の声が聞こえてきた。この時点で、既に大希の理解を越えて世界は動いていた。虚ろな目で首を振りながら、大希は前に進むことも後退りすることもかなわず、ただ固まってしまった。そんな大希のもとに、周囲に染み渡るような靴音が聞こえてくる。そして、急に霧が晴れた。

「うわあ！」

大希は悲鳴を上げた。そこにいたのは何人もの自分。三人、四人、五人。それどころではない。十人くらいはいるかもしれない。口が震えて、大希はまともに口をきくことすらできない。そんな大希の肩を、一人の“彼”がしかと捕まえた。

「な、何するんだ。やめろ！」

大希は必死に振り払おうとしたが、この世のものと思えない恐怖に縮みきった体では、剣道で鍛えてきた体も形無しかった。周りの“大希”の一人が、なんと自分の首に手をかけてきた。鷹のような



目で凝視し、獣のように歯を剥き出し、普段の整った表情からは遠くかけ離れた人外の笑みを浮かべながら、目の前の“大希”は首にかけた力を強めていく。大希は恐怖と絶望の入り混じった目つきで目の前の凶行を見つめていた。

その時だ。乾いた音が何度も何度も響き、大希の目の前で彼らは不自然に吹き飛び始めた。頭からつんのめるもの、胸を突き出すようにして吹き飛ぶもの、肩からきりもみに飛ばされて地面に打ち倒されるもの。最後に首を絞めている個体が目の前でどこかを撃たれ、静かに崩れ落ちていった。目の前の事態をまるで呑み込めず、大希は羽交い締めになされたままで遠くに目を向けた。すると、塔のちよつと真下に立っていた人物が、こちらに向かって銃口を向けていた。最初は助けが来たのだろうかと前向きに期待したが、その顔を見た途端、大希の心は地獄の底に突き落とされてしまった。

「お前も、偽者だ」

「うわああ！」

大希は絶叫した。周囲の空気を皆震わすほど絶叫した。その絶叫をも引き裂き、銃声が響いた

「ああ！」

大希は布団を蹴り飛ばして起き上がった。途端に、男所帯の埃っぽい臭いがして、目の前に乳白色の壁が現れた。足下には、いつも寝ているせんべい布団が敷かれている。眩しい朝日を浴びて、ようやく大希は自分が夢の世界に置かれていたことに気がついた。

「夢……？　なんだ。そうかそうか……」

大希は安堵のため息をもらしてしまった。考えれば考えるほど、奇っ怪でおぞましいシチュエーションだった。起きた大希には、それを夢と気付けなかった自分自身が不思議で仕方なかった。

「おう。起きたんなら食べちまえよ。軽いもの作つといたから」

居間の方から、どこか上の空の様子で健が大希に向かって呼びかける。大希は眠い目をこすりながらそれに黙って応じようとしたが、

立ち上がった瞬間に聞こえてきた音で立ち止まった。

少々電子的な銃声。銃火器の発射音。ある予感に大希は顔をしかめる。一足飛びに居間へ踏み込み、そしてテレビの方を見た大希はため息をついてしまった。

「お前、朝からゲームなんかするなって」

テレビの中で繰り広げられていたのは、一人の傭兵が基地の中へと潜り込み、あんな戦いやこんな戦いをしたり、ついでにダンボールに潜ったりする活躍劇だった。当然、銃声は鳴るし、ときおり爆発音さえ鳴る。本当のことを言えば、アクションゲームをするのが趣味の健のこと、今日明日のように二日連続で非番が続くという日に朝からゲームをしているのはさして珍しいことではない。しかし、この銃声が自分の夢に関わりあるだろうと思うと、大希は呑気にコントローラーを握っている健が少々許せなかった。ちゃぶ台の前にあぐらをかきながら、大希は口を尖らせる。

「おい。聞いてんのか。俺はニューズ見たいの」

「わかったわかった。ちょっと待って。セーブするから」

健は宣言通り、しっかりとセーブを始めた。再びため息をついた大希は、リモコンを手の内できると回したり、あちこちのボタンに指を置いたりする。別にニューズを見ようと思わなければ、健のことなど大希は放っておいた。健はゲームが上手く、見ていても楽しいのだ。だが、今日ばかりはそういうわけにもいかない。気になることが多すぎる。いらいらとりモコンの平らな部分を叩き始めた頃、ようやく健はゲームの電源を切った。

「そうかりかりすんって。体に良くないぜ」

「うるさい」

健のからかうような言葉をすげなく払い、大希はさっさとチャンネルを回す。普段見ているニューズ番組だが、幸い地方のニューズが報道されていた。大希は目の前の箸に手をつけることなく、じつとテレビを見つめた。

『先日未明、身元不明二十代の遺体が久宇慈市の住宅街で発見され

ました。警察は、殺人事件として犯人の行方を追っています。』

昨日の事件は報道されるだろうか。大希はさらに聞き耳を立てたのだが、それ以上は何の情報も提示されることなく次のニュースへと入ってしまった。横浜であったちよつとした祭りの話で、殺人事件からは遠く離れた話題だ。大希はその結果に物足りないような、納得したような、そんな感情になった。二、三度繰り返して頷くと、ようやく大希はいただきますを言い、目の前の目玉焼きに手をつける。

「やっぱり、箝口令かんじうたいというか、やっぱりあんな事は伝わっても報道されないよな……」

大希の呟きに興味を示し、テレビから目を逸した。

「え。どうして箝口令を敷くようなことがある？ というか、今日伝えられるのはあれが全てだろ」

大希は健の不思議そうな瞳を見つめた。表情まで少年じみている。大希は勘定した。果たして昨日の出来事を話して、健が信じるだろうか。そしてすぐに答えは出た。健はそのようなお化けや怪奇現象の類を全く信じないのだ。つまり、話したところで無駄ということである。

「ああ。まあそうだよな……」

長く息を吐き出しながら、大希は惰性でニュースを見つめる。そこにあったのは、久宇慈市の湾岸部にある一つの研究所だった。

『久宇慈量子化学研究所が、一二六番元素の研究と並行し、一二七番元素の研究に着手しました。一二七番元素とは、リチャード・フインマンによって、存在可能な最後の元素と指摘された元素であり、その名を取ってフインマニウムとも呼ばれる元素です』

久宇慈量子化学研究所。この誕生には曰くがあった。十二年余りの長さにわたって職務を全うしている現市長は、初めてその任に就いた時、『時空都市、久宇慈』という、親父ギャグにも似た雰囲気を持つしよもないネーミングのスローガンを掲げた下で、近未来的な雰囲気を持ったまちづくりを目指したのだ。時計塔もその一環

の一つである。そんな市長だから、研究所を建てるという計画が持ち上がった時真っ先にアピールし、そして受け入れられた結果できたのが『久宇慈量子化学研究所』なのだ。

「よくやるよな、研究者の皆さんも。一三七番元素なんか、どこで活用するかわからねえよ」

「まあ、作れただけで価値はあるだろうし、そこが大事なんじゃないの？」

「まあ、そうなんだろうけどさ……」

途方もない構想のニュースを見つめながら、二人はのどかな朝を過ごしていた。

所も時も変わって、未成は昼頃からずっと署の鑑識課でパソコンをいじっていた。それほど事件も起きない久宇慈市では、その規模も大して大きいことはなく、学校の教室ほどの広さの中、雑然とした設備が広がっている。その一角に陣を構えた未成は、同僚や上官から度々視線を送られつつ指紋の照合を行っていたのだ。そして、未成は抱いていた疑念を確信に変えることとなる。

「やっぱりだ。そうなるしかないもんね……」

未成はぼそぼそとパソコンに向かって呟く。その画面に広がっていたのは、消えてしまった遺体から取った指紋が、しっかりと今村大希の指紋と一致していた事を示すものだった。彼の声は小さかったが、静かな部屋では十分聞こえていた。上官がすぐさま立ち上がり、未成のそばまで駆け寄ってきた。

「どうした。何がそうなるしかないんだ？」

未成は上官の目を見て頷くと、そっとパソコンの画面を指差した。ざっと目を通した上官は、しばらく漠然と画面を見つめていたが、その結果を飲み込んだ瞬間、いきなりその目を見開いた。

「どういう事だ！ 奴、昨日からピンピンしてただろう！ どうなってるんだ！」

未成はいきなり胸ぐらを掴まれる。目を白黒させながら、未成は

何とかその腕に手を重ねる。

「や、やめてください。僕にわかるわけないじゃないですか……」

「あ。そ、そうだな……」

もつともな言葉に冷静さを取り戻し、上官はそつと未成の胸ぐらから手を放した。すつかり毒気が抜かれた様子の上官に、未成は曖昧な顔で笑ってみせた。取り乱す上官など今まで指で数えられるほどしか見たことがなく、もう一人いた同僚も未成達の所まで駆け寄ってくる。

「い、一体どうしたんですか？」

「いや、これを見てくれ」

「これですか？ あ、な、何で大希が……」

未成はじつと指紋のデータと大希の名前を交互に見つめる。後ろで慌てている二人の声が遠く、くぐもって聞こえる。未成はそれ程に深く思案の海に飛び込んでいたのだ。

紛れも無く、未成は「大希」という存在が複数あることに気がついていていた。しかし、それを確信めいて大希に伝えれば、間違いなく頭のおかしい奴と思われるしまう。だから、大希には実感としてその存在を知らしめておくつもりだった。しかし、それも叶わず、遺体は消えた。そこは未成にとって予想外の出来事だった。そもそも、その存在を消そうとした人間がいたことに驚きだった。果たして、ただの通り魔なのだろうか。未成はそこまで踏み込み考えていた。

「誰が、何のために殺した……？ 殺す必要がある存在にも見えなかったはずなのに」

何かが変わろうとしている。「この」2012年に、何かが変わり始めている。未成は心の中、自分に向かって語りかけた。そつと未成は周囲に目を配る。同僚の二人はこの事実をどこかへ知らせに行ったのか、課から消えてしまっていた。見ている人物がいないことを確認すると、未成は素早くインターネットを開き、アドレスを打ち込み始めた。

その間にも、未成は大希にこの事実をどう伝えたものか考えてい

た。

## 5th Period 飲み帰り

久宇慈警察署の休憩スペース。フロントからでは全く見えないところであり、警察署に油断した雰囲気を持たせないよう配慮されていた。自販機が置いてあったり、やや柔らかい椅子があったりして、狭いが概ね快適なスペースではあった。使う人は、大半がアクリル張りの喫煙スペースに入っているが。その中でタバコをふかしている他課の人々ときおり目を配りながら、大希と未成はプリントされた指紋照合の結果を挟んで向かい合っていた。

「くっだらないなあ！」

未成に延々話を聞かされた後の開口一番、大希はのけぞりながらそう叫んだ。せつかくの非番二日目、健がせつかく誘ってくれたからと、自分も健と共にコントローラーを握って健とゲームを楽しんでいたところだった。だが、いきなり大希は未成に呼び出された。指紋照合の結果が出たから、自分が休憩時間のうちにちょっと来て欲しいと。親友の頼みのこと、面倒だったが仕方なく赴いてやったのだ。それが、さらに面倒な話を聞かされるきっかけとなってしまった。

「くだらないって……僕は真面目だったのに。証拠もあるし」

「証拠って！ 指紋なんか、十万分の一の確率で同じになっちゃうんだろ？ それで、殺された被害者が俺のクローンみたいな存在だなんて、馬鹿げてるんじゃないか？」

舌鋒鋭い大希の言葉に肩を縮こまらせながら、未成はそれでも愛想よく笑った。本当に、この男はめったに怒るということをしらない怒るということを忘れてしまっているかのようだ。資料をまとめ直し、未成は冷静に受け答えた。

「大希。君は世界に三人ほどこしか自分に似ている人間がないといつたじゃないか。一応遺体の写真も今見たでしょ？ 世界に三人ほ

どしゃくない人間が、さらに十万分の一の確率で指紋が一致しているなんて、有り得ない確率じゃないか」

未成の飄々とした言葉に、大希は思わず口を塞がれてしまった。未成の言葉を噛み砕くように口をもごもごさせ、顔をしかめる。確かに遺体の写真を見た。その顔には痛みに苦しんだ様子も、安らかな様子もなく、ただ魂が抜けていったような、そんな空虚な死に方を如実に表していた。だから、鏡に写したぐらいに似ている様子をしっかりと確認できたのだ。

「そりゃあ……未成の言うとおりさ。顔も指紋も同じような人間なんて、そうはいない」

けれど。大希は心の中で呟いた。やっぱり俺は、そんな事を認める訳にはいかない。自分が知らない所でクローンが作られていたなんて、馬鹿な事は信じられない。

「でも、俺みたいな没個性的な顔なんか、どうせ他にも似てる奴はたくさんいるだろ」

「そんな事言うなって。イケメンだよ」  
「うるせえや」

かっこいいと言われて嫌になるほど捻くれた人間ではなかったが、話をごまかされたくはなかった。大希は身を乗り出し、その人差し指を未成の真っ直ぐな鼻先に突きつける。

「あのさ、一応技術的にはできるわけだし、可能性については、可とすることにするよ。クローンを産む人もいるとする。で、俺がクローンの素体になったとするよ？俺はその事を全く覚えていない。クローンにしてまで複数用意したいほど有用な人間でもない。やっぱり無理がある」

「そう言われたら、そうなのかもしれないけど……」

仰け反り至極残念そうに顔をしかめている未成に、大希はさらに迫った。昨日の夢は、まだしっかりと覚えていたのだ。

「俺、昨日クローンに襲われる夢なんか見たんだぜ？ しまいにはズドンだ。お前がクローンの話なんかしなかったら、俺は絶対そん



な夢を見なかったね」

未成はついに諦めた。これはいかに手を尽くそうと、この事實は理解してもらえそうにない。だが、まあそれならそれでも構わないし、彼に何か異変が起きた様子もない。全くの安泰だ。ならば、長々この話題を引つ張るのは友情の障害となるに違いない。

「わかったよ。ごめん。もうこれ以上変な事は言わないよ」

未成がそつと手を合わせて頭を下げる。大希もこれ以上詰め寄るつもりは無く、腕組みをしてため息をついた。

「まあいいさ。本当に、そうだと信じたいような事件だったしな。それじゃ、俺は帰るよ」

大希はソファーから重い腰を上げた。今ごろ健が昼食をこしらえて帰りを待っているころだろう。すぐに帰ろうと思った大希だが、一つ思い出したことがあった。休憩スペースの入り口で立ち止まって振り返る。

「……なあ、仕事が終わって暇なら、ほんの少し飲みに行かないか？」

「え？ ……あ、もちろん！ でも給料日前で……」

どこか驚いたような顔をした後、すぐに頷きかけた未成だったが、自分の懐事情を思い出してうつむく。その様子を見て、大希は小さく笑った。

「いいよ。俺がおごるから。もちろん、俺もあんまり金は出せないけどさ」

「本当かい？ よかった。なら行くよ。行く行く。なんだか大希、最近不満がありそうだしね。お礼に愚痴くらい聞くよ」

屈託なく笑う未成の言葉に、大希は先日のテレビの光景を思い出した。全く満足は出来なかったが、酒の肴にはなるかもしれない。大希は微笑み、小さく頷いた。

「ああ。頼む」

駅前、大手の居酒屋の隣にある小さな店舗。年老いた店主が道楽

で商売しているためか、この店はかなりおつまみの値段が安い。いつも大希や、彼らの友人はこの影に隠れた良心的な店で飲んでいるのだった。

座敷になつて席の隅に座り、二人は大手を避けてきた他の人々を見つめながらおちよこを傾けていた。焼き鳥の香ばしい匂いが店中を包み込み、畳の間はどこか家のようにくつろげる。カウンターに座れば、店の親父が嫌味も言わず愚痴を聞き、的確なアドバイスを授けてくれる。大手の込み具合に辟易し、この外装は少し汚れた店に入ってみる勇気が湧けば、この店に間違いなくハマってしまう。大希達はそういうクチだった。

「あの人もどこか楽しそうだね」

ほんのりと頬を赤くした未成は、カウンターに座って親父と話の花を咲かせている三人のサラリーマン達を見つめていた。大希はこんがりした焼き鳥を口に運びながら微笑む。

「ああ。ああして俺や健、剣人もここで飲むようになったからなあの人達もちよくちよく来るようになるさ。大手みたいにわいわい騒ぐ雰囲気じゃないけど、そこがいいんだよな」

息をつくとき、大希は隅に設置されているテレビを見る。ちようちよとニュースが入っていて、見出しには『超光速物質の存在が立証』という文字が躍っていた。朝にそのニュースを一度見ていたが、やはりこの話題には惹かれるものがあった。

「なあ、未成はこのニュース見たか？」

「うん。もちろん見たさ。ニュートリノがついに超光速の物質として実証されたってことでしょ？ 本当にすごいことだよ」

「ああ。ちようちよと去年に報告されて、ついに今年実証されたってわけか。この物質のお陰で、時間の逆行やワープの存在も示唆されたんだ。いやあ、感動的だな」

お酒で少なからず勢いがついていた大希は、そのまま先日から溜め込んでいた愚痴に走る。

「全くさあ、この前そういう感じのテレビを見てたんだ、俺」

未成は枝豆に手を伸ばしながら耳を傾ける。素直に聞きへと回ってくれた未成に気を良くし、大希はすらすらぺらぺら話し始めた。

「深夜番組だったんだけどさ、タイムトラベルについて議論するっていう話だったから、俺ずっと楽しみにしてたんだよ。わかるでしょ？ 俺、インターネットで予習までしたんだぜ？ そしたらさ、

その予習で得られた知識ぐらいいいかタイムトラベル可能派は言い出さなくてさ、否定派にコテンパンだよ。もう、完膚なきまでとはああいづのを言うんだろうね。こっちはわざわざ夜更かししてまで見てやったつてのに、とんだ目にあつた。その後剣人や健にからかわれるしさあ……もつとレベルの高い議論はできなかったもんかね」

ぐいとおちよこを傾けた大希を見て、未成は目を細めて優しく微笑んだ。

「それは大変だったね。でも、このニュートリノ実証がきっかけで、タイムトラベルが可能なものとしてこれから議論されていくんだよ。間違いなく」

おちよこを食卓に置いた大希は、未成の励ましを聞いて嬉しそうに頷いた。

「ああ。あのポケ老人のエセ科学者どもじゃなくて、本物の科学者がまじめにタイムトラベルを議論する日が生きているうちに来るかもしれないって思ったらわくわくするな。やっぱりこういう話題はいいよなあ」

天井を見上げ、しみじみと語尾を引き伸ばした大希。それよりさらにしみじみと、むしろ寂しそうにも見える目をして、未成は深く頷いた。

「ああ。きっとタイムトラベルはできるって、言われるようになるよ」

未成は、SFの話題にはさほど酔えなかったようだ。彼のあまり好ましくない表情を悟ったのか、大希は一旦口をつぐみ、それから再び口を開いた。とりあえず話を変えることにした。本当に話したかった話題に。

「なあ、そんなことよりもっと気になることがあるんだ」

「何だい？」

大希は周囲に気を配る。カウンターの人々は気持ちよく飲んでい  
るのだ。こんな話を聞かせるのは悪い。そう思った大希は、未成の  
方へと思い切り顔を近づけた。

「この前の遺体だよ。あれが俺じゃないにしても、不思議なことが  
もう一つある。何で消えたんだ？ それとも、やっぱりどこかに行  
ってただけなのか？」

あまりに急な話題転換に、未成は瞬間目を丸くした。しかし、あ  
る程度予想はしていたことだったから、その対応は柔軟だった。彼  
も周囲に気を配り、手でかばいながら小声で答えた。

「消えたんだ、本当に。何にもない。行方知れずなんていう度を越  
してる、というのが結論だよ」

「そうか……消えた。俺達は狐にでも化かされてるのか……？」

彼は大きくオカルトチックな話に興味を示すタイプではなかった  
が、これまでの生き方に方針の転換を迫られているような気が大希  
はしていた。だが、未成は力強く首を横に振る。

「そんなレベルじゃないと思う。そんな、そこらへんに転がってい  
るような話の出来事じゃないよ。これは」

普段は控えめなはずの未成が今に限ってはかなり力強い語調だっ  
た。そこに目ざとく気がついた大希は、小さく心の中で小手に踏み  
込んでみる。

「なあ未成。お前、本当は何か知ってるんじゃないのか？」

未成はいきなり顔を上げて目を丸くした。ドキツとした、らしい。  
眉根にしわを寄せてため息をつく、未成は静かに首を横に振って  
みせた。

「そんなことないよ。僕が知ってる理由があるかい？」

「ああ。まあそうだよな……」

大希はぼんやりとした調子でとっくりを傾ける。その間にも、意  
識は消えてしまった遺体で頭がいっぱいだった。いきなり未成が大

声を上げるまで、その調子は収まらなかった。

「ねえ大希！ 溢れてる溢れてる！」

「あ！ うわあ、やっちゃまった……」

小さいおちよこから溢れ、テーブルの上に光る焼酎。顔を見合わせる、二人はお互いに苦笑してしまった。

結局二人は他愛のない話に落ち着き、結局十時頃まで飲み続けていた。その調子で長々話し続けるのかに見えたが、結局大希は健康優良児を地で行く青年だったため、それ以上は飲まずにのんびりと帰り道に就いたのだった。

「さあ、明日は仕事だしなあ、さっさと帰ってゆっくり寝るかな……」

住宅街の路地の中、大希は伸びをして夜空を見上げた。よく晴れた夜に月が映えている。大希はひんやりした気持ちのいい空気に包まれながら、ほっと長々と息をついた。親友のごきげんな様子に、未成はやはり嬉しそうに微笑む。

「よかった。愚痴を言って少しは気分が晴れたのかな」

「ああ。大分助かったよ。これでまた明日から、訓練に没頭できるさ」

「頑張りなよ。いざという時が、いつ訪れるかはわからないからね」  
未成がそう言って微笑んだまさにその時だった。何の気もなしに路地の分かれ道へと目を配った時、思わず自分の気が確かかどうかを疑ってしまう光景が目飛び込んできた。

「嘘だ……」

未成は茫然自失とし、呻きにも似た言葉を洩らした。その目の前には、二つの人影。向かい合うようにして立っている。だがどこか不自然だ。どこが不自然かという、一人の男は胸に向かって腕を突き出し、もう一人の男はその背中から何か突き出ているのだ。間違いない、殺人が行われたまさにその瞬間だった。

大希も言葉を失った。人死にを見たのは円満なものかわずかしか

ない。殺される瞬間を見るなど、かの事件ですら無かった。凄まじい衝撃に、大希はしばしその光景を見つめていることしかできなかった。

だが、大希も職務を思い出す瞬間がすぐにやってきた。刃物を抜かれ、一人の男が倒れ伏した瞬間を見た途端、大希はその身を駆り立てる使命感が湧き上がった。誓ったのだ。この世の悪をくじく警察になると。その警察になった今、目の前で人を殺した男を放っておくわけにはいかなかった。目をらんらんと輝かせ、大希はいきなり突進を始めた。

「お前！　そこで大人しくしろ！」

大希の吼え声に気が付き、手を汚した男が彼の方へと向き直った。大希は目を細める。その男の顔を確認できないのは、ただ単に暗がりの中というだけのことと思っていた。しかし、そうではなかった。その男は返り血を浴びたマスク、そして黒い頭巾を深々と被り、その顔を窺えないようにしていたのだ。

「サツか……？　いや、お前は……」

殺人者は大希と倒れている男とを見比べるような動作をした。その隙を突いて、大希は殺人者に向かって鋭い蹴りを突き出した。しかし、やはり大希は酔っていた。その蹴りは見事に照準を外し、殺人者の肩あたりを捉えてしまった。威力も弱く、殺人者を突き飛ばすはおろか、痛みにも呻かせることさえ叶わなかった。

「俺の邪魔をするな！　今村大希！」

「どうして、俺の名前を、知ってる！」

殺人者は鋭い拳を大希の鳩尾めがけて振り抜こうとする。大希は突きを外す要領でその拳を叩き落とし、素早く蹴り上げた。だが、これは殺人者が簡単にかわしてしまう。そこから殺人者の動きは早かった。大希を手で突き飛ばしてバランスを崩させると、そこにナイフを構えて一気に襲いかかった。

「ぐあっ！」

ナイフは大希の横腹あたりを捉えていた。焼け付くような激痛が

腹から全身を駆け巡る。しかし、大希はそれしきのことてくたばるような人間ではなかった。ナイフを掴んでいた殺人者の手首を掴み、思い切りその筋肉が薄い部分を狙って殴った。人間としての本能か、いきなり腕に危害を加えられて殺人者は大希に刺さるナイフを手放してしまった。

「未成い！ 救急車頼む！」

「あ、ああ。わかった！」

痛みで頭がもうろうとするのをこらえながら、大希はナイフを抜き放った。せつかく止まっていた出血が蘇る。痛みも蘇ってきた。だが、余計に動かれて傷が広がるよりはずっとましだろうと大希は考えたのだ。救急車も上手く事が運べばすぐに来るだろう。大希はとにかく殺人者を取り押さえようと飛び出す。ナイフは奪ったのだ。後は自分が気を失うまでにかかる時間との勝負だとしか考えていなかった。次の瞬間までは。

「うああ！」

乾いた銃声が周囲に響き渡る。それと同時に大希の肩から血が舞った。衝撃に耐えられず、大希は道にもんどり打って倒れこんだ。腹と肩を襲う激痛に、今度こそ大希は敗北を知らされることとなる。男はゆつくりとそばまで歩み寄り、銃口を大希の額に押し付ける。大希は冷や汗が吹き出してくるのを感じた。殺される。大希は確信してしまった。彼の身が硬くなっているのは、怪我だけのせいではないだろう。息を荒げ、大希はただただ無慈悲な殺人鬼を見上げていた。

「お前は違う。邪魔立てするならこうしてやるが、黙っていればなにもしないでおいてやる。わかったか」

それだけ言い切った殺人者は、ゆつくりと額から拳銃を離れた。大希が目を見開いたままである中、男は悠然とナイフを拾い上げ、拳銃を懐に収める。そして、その男はさも普段通りの仕事をしたかのように、口笛を吹きながら歩き去っていった。

どうやら殺されずには済んだらしい。しかし、薄れていく意識の

中、燃え上がる悔しさだけが大希の中に残っていた。何とかうつぶせになり、起き上がるうとしながら大希は歩いて行く男の背中に手を伸ばした。

「この、野郎……」

しかし、その手は全く届かない。悔しさに顔を歪ませ、拳をアスファルトに打ち付ける。その痛みが、ほんの少しの時間、大希に倒れるまでの猶予を与えた。そして大希は被害者の顔を確かに見た。そして、これまで無かったほどに驚愕した。

「そんな！ また……俺なのか？」

倒れていたのは、紛れも無く虚ろな顔をした自分だった。いよいよ大希は混乱する。頭の中がいろいろな感情でこった返し、血の足りなくなった頭はすぐに限界を迎える。

「ちくしょう……どうなってるんだよ。誰か教えてくれ、よ……」

大希は未成が慌てて駆け寄ってくる足音を耳にしながら、静かに意識を失った。



## 6th Period 倒れた後

大希はまたしても霧の中にいた。ただ、その霧はあまりに異質で、まるで演出に使うドライアイスの煙のようだ。そして、立っているのはまた時計塔の前。今度の大希はすぐに気がついた。

「今度も夢か……？」

夢だと思い当たったのはいいが、結局大希には夢から出る術がない。諦めた彼はその場にあぐらをかいて、横腹に手を当ててみた。傷は無い。だが、刺された痛みも撃たれた痛みも思い出し、大希は顔をしかめてしまった。大希は考える。あの後自分は怎么样了だろうか。夢を見ているのだから、死んだという事は万が一にもあるまい。無事に救急車で病院に運ばれ、輸血を受けたり、傷を縫われたりしながら一命を取り留めたに違いない。結論に至った大希は、ため息をもらした。安堵のものかという、決してそれだけではない。

「あーあ。井上<sup>いがみ</sup>さんにどやされちまうなあ。酔って犯人を取り逃がして、その上大怪我を負っただなんて……」

自分の足元を見つめて頭を掻く。誰からも鬼と恐れられている上司の目に付いたのは間違い無いだろう。目を覚ました途端に大目玉かと思うと、目を覚ましてしまうのもなかなか億劫だった。だが、夢の中にいたところで、することも見つからない。全く困ったものである。大希は諦めたような顔で時計塔を見上げた。

「やつぱり起きなきゃダメだよなあ。どうしたら起きられる？」

時計塔に聞いたところで何か答えてくれるわけはなく、相変わらずその文字盤は厳格に時を刻んでいた。大希は言葉も無くその文字盤の数字が移り変わっていくさまを眺めていた。五十九分、〇分、五十九分……。

「え、おい。一体どうなって……」

大希は思わず呟いた。そのうちにも、どんどん時計の数字がめちやくちやに移り変わっていく。加速度的に時計が巻き戻ったかと思

えば、今度はゆっくりと進み始める。夢の中なのだから何が起こってもおかしくはないが、いったい心の奥底で何を考えているのか怪しくなる。訝しんで時計を睨みつけていたら、急に時計塔の足元が輝き始めた。大希はいよいよ言葉を失い、弾かれたように立ち上がって後ずさりを始めた。その間にも時計塔の足元の光は青白さを増し、霧が急に濃くなつていく。大希は、これは夢だと言い聞かせなければ、まともにもその光景を眺めていることができなかつた。

急に光が失われ、今度は周囲を包んでいる霧ごと闇に包まれた。その闇は大希に強い印象を植え付け消えていく。後に残つたのは、この世のものではなかつた。

ロボット。その姿を見上げた大希の頭にはすぐにその単語が浮かんできた。金属の関節がのぞき、白に塗装されたフレームを持ち、低い電子音を響かせているその様子は確かにロボットに見える。だが、その外見はあまりに凶暴だつた。三体のそれは、サソりにクモ、そしてカマキリをそれぞれ模しており、見ただけで萎縮させられてしまつたろう。

さらに困つたことには、凶暴なのは決して外見だけではないということだ。サソリの尾やハサミには銃口のようなものが取り付けられているし、クモはどんな攻撃をも撥ね付けそうな外見をしている。カマキリの腕は、全てを貫き破壊してしまいそうだ。戦うために生み出された、巨大、強大な機械達であつた。

そんな圧倒的な存在を前に、大希は恐怖し凍りついた。しかし何故か、初めて襲われる恐怖だとは思えなかつたのだ。大希は心の中で呟く。

……デジャヴゥ？ いや。ここが夢の中なんだけどな……

既視感に恐怖が少し緩み、大希が目を細めたその瞬間だ。急にサソリが切れ長の目を光らせてこちらを睨む。同時にハサミを振り上げこちらに向けてきた。そのハサミの根元で光っているのは、ガトリング砲の銃口だ。それに気がついた大希は、咄嗟にその場から逃げ出した。轟音と共に銃弾が飛び、地面に亀裂を作っていく。大希

は必死に逃げた。甲高い電子音が響き渡り、エンジン音と金属音が混在した耳を塞ぎたくなるような音を響かせながらサソリ、そしてクモが動き出す。確かに大希の姿に狙いを定め、その眼を赤く光らせながら追ってきた。反対に大希は蒼白になり、抵抗もままならなままにただただ逃げ続けた。

「何で追ってくるんだよ！ 止まれ！ 止まれよ！」

既にこの世界が夢の中だということなど、頭から吹っ飛んでいた。生きたいという思いに任せ、大希は必死に走り続けた。無力で哀れな一人の青年に向かって、サソリ達の発した無機質な音が追いかける。

「Follow the given command . Fol  
low the given command .」

「何だよ！ 来るな！」

「Follow the given command .」

大希の叫びも虚しく、サソリ達は無感情に迫ってくる。サソリの放った銃弾のせいで地面が砕け、大希は躓き地面に叩きつけられてしまった。それでも大希は、這いつくばったままで一歩でも先へと進もうとする。振り返ると、サソリがその銃身を光らせ、こちらへ正確に狙いを定めているところだった。

「やめろ……やめろお！」

その刹那。突如サソリ達の動きが固まった。

「Follow the given command……」

その目を白黒させ、閉じようとするハサミを必死に開こうとするサソリ。クモの方は、必死に一步を踏み出そうとしている。大希は何がどうなったのかもわからず、尻を擦るように後ずさりしながら、その姿を見つめた。サソリの目から光が消えた。クモの目からもなくなった。途端、ただの置物と化したその二体はその場に崩れ落ちてしまう。肩で息をしながら、大希はぼんやりとそのガラクタを見つめていた。その時、いきなりカマキリがサソリやクモを引き裂き現れた。大希は再び飛び上がる。

「ああ！ 忘れて」

大希が言うか言わないかのうちに、カマキリはその鎌を大きく振り上げる。が、いきなり大希の目の前でカマキリもまた崩れ落ちた。その呆気無い幕切れに戸惑い、大希は言葉を失ったままでその姿を見つめ続けていた。

「大希」

エタノールの匂いがわずかに漂う白い病室の中。聞き慣れた親友の声で、大希はようやく目覚めた。未だ霞んでいる視界の中で、大希は未成の姿を捉える。

「未成……？ あれ。サソリのロボットは？ クモも……カマキリも……」

すっかり混乱しきったように見える大希の目を見て、未成は顔をしかめてため息をついた。

「何を言ってるのかわかんないよ。君は刺されて撃たれた後、病院に運ばれて緊急の手当を受けたんじゃないか。あの夜から三日、大希はずっと意識を失くして寝込んでたのに。みんな心配してたよ」

「み、みんな？」

大希は自分が寝かされていた白いベッド、そして腹に巻かれている白い包帯に目を落とす。右腕には点滴が繋がれている。ようやく大希は現実と非現実の区別が付き始めてきた。よくよく考えてみれば、あんな存在がこの世に、この久宇慈市に存在しているはずもない。大希は自嘲気味に小さな笑い声を上げた。

「そうか……あれは夢だったか。そうだ。夢だ夢だ」

ようやく普段通りの真っ直ぐな男に戻り始めた大希を見て、未成はほっと胸を撫で下ろした。いつものように小さく微笑み、彼の肩を叩いた。

「よかった。やっとまともに話ができそうだね」

「話？ ああ。そうだ！」

大希の脳裏に、倒れる寸前に見た被害者の顔が蘇ってきた。今度

ははつきりと見た。あれは自分だとしか言いようがない。街灯の元に照らされたその顔は、どこを取っても自分にそっくりだった。大希は未成に詰め寄りたところだったが、点滴で動けないため首だけ向ける。

「なあ、被害者の人はどうなった？ また俺に似てたじゃないか！  
一体どうしたことだか……」

未成もまさにその話をしようと思っているところだった。ただ、再び取り乱したこの様子で聞いてくれるとは思えない。彼の肩を叩き、髪をかきむしっている大希をなんとかだめる。

「焦らないで。焦ったら、余計に次の話でびつくりするよ」

「あ、ああ。わかった……」

大希は肩をすくめ、ゆっくりとベッドにもたれかかる。何もわかっていないうちから慌てたところでどうにもならないことは、彼も気がついていた。首を二、三度振って、大希は未成の顔を見上げる。  
「結局、あの後どうなったんだ？」

単刀直入の質問。未成は慎重に話の展開を練った。こちらも単刀直入に返せば、必ずや大希は驚くだろう。一応重傷を負っているのだ。負担をかけるのは良くない。大希の急かすような目に愛想笑いで応えながら、未成は一言一言丁寧に話し始めた。

「いいかい？ 落ち着いて聞いてくれよ。まず、被害者が君に似ていたという話だったけど、これには刑事部の方もいよいよ怪しがり始めたんだ。あ、これ以降話は隠匿されてる……隠匿する必要は無いんだけどさ、平凡に生きている人が信じてくれるわけがないからね、仕方ないんだ」

未成が一語一句確実に話していくものだから、話が非常に間延びした。特にせつかちな性質を持つわけではなかったが、あまりの遅さに大希はいくらなんでもイライラさせられてしまった。腕を組もうとして、改めて両腕が動かせないことに気がついて顔をしかめ、左手で軽く布団を叩きながら大希は眉を寄せた。

「前置き長い。その内容を教えてくれって言ってたんだぞ」

「ああ。ごめんごめん。色々な話が持ち上がったよ。あの死体が消えたのは、蘇って、こうして再び殺されたからだとか、僕が前に言ったみたいに、クローンがどうとか。うん。自分で言ってる分にはわからないけど、他から聞くとナンセンスに聞こえるね」

目を光らせ、真剣な様子で話を聞いていた大希だったが、未成の冗談に再び脱力させられる。

「だからあ。そういう冗談はいらないから、さっさと先を話してくれよ」

「君に楽にしてほしいから、こういう言葉を挟んで上げてるんじゃないか」

「そう思ってるなら逆効果だ。余計イライラするからな」

両手を挙げてとりなそうとする未成を、大希はばつさりと切り捨てた。未成はため息を洩らし、鼻頭を掻いた。怒られるようでは仕方がない。

「それならいいよ。わかった。で、これは指紋検査だけじゃ怪しいということになって、ともかくDNAの検査を試みようということに決まった。でも、また消えた」

「なんだって！」

大希は素っ頓狂な声を上げた。未成は言わんこつちやないとでも言うかのように顔を曇らせ、大希の頭を小突いた。

「だから気楽に落ち着いていて欲しかったのに……」

他のベッドでも病人が動き出している。二人は少し申し訳ない気分になった。未成はさらに大希の頭を小突き、大希はすっかり小さくなってしまった。隣では、一人の患者がこちらを睨んでいる。未成は愛想笑いで頭を下げ、今度は大希に耳打ちした。

「まあいいか……最後まで話をするかね、結局その正体はわからなかった。嚴重に管理されているはずのDNA検体までなくなっただからね……」

「まさか。じゃあわかったことは、結局あの遺体が確実に消えたことだけか？」

大希のうんざりしたような声に、未成は苦笑いで答えた。それから、二人は示し合わせたくらいに同じタイミングで肩を落とす。本来はありえないはずの出来事がたくさん積み重なり、壁のように厳然と二人の目の前に横たわっていた。大希は唸る。今になってみると、以前はどれだけ突きつけられている不可思議をかわす手段があっただろう。今は受け入れる以外に無いように思えた。だが、大希は認められなかった。健もこの手の話題には相当頭の硬い奴だと彼は思っていたが、大希も十分頭が硬かったというわけだ。彼は肺から全ての空気を搾り出すようにため息をつく。

「知らねえや。もういいよ。そもそも、これを考えるのは未成達の役目であって、俺が考えるようなことじゃない。これ以上はもう考えない。考えれば考えるほど、頭がこんがりそうだし」

「え。待ってよ。君にも十分関わりがあるんだから、君にも一緒に考えて欲しいんだけど……」

未成の言葉を潔さの無いものと受け取り、大希は顔をしかめた。

「嫌だね。こんな、よくよく考えてみれば、こんな……話、向き合う気になれない」

馬鹿馬鹿しいと言えなかったのは、警察官としての矜持があるからであつた。怪生の類とさえ思われるような存在でも、死んだには違いないのだ。大希はがくりとうつむいた。

「くそ……俺は一体どうしたらいいんだよ？ 被害者を気の毒に思うことすら難しくなつた。被害者のために、何が何でも捕まえようと思うところを、いきなり自分は加害者の動機を探つてる。順序が違つんだよ。何であれ被害者の為に全力を尽くすのが当然だし、動機はともかく、まず加害者を捕まえないと話は始まらないんだ。……わかつてることなのに、全部がおかしくなつてる。俺と寸分違わない外見だつてことで」

搾り出された大希の言葉に、『犯罪者を捕まえられなかった』という責任の重みを感じた未成は黙りこむ。励ましてやりたいと思うところだったが、未成にはふさわしい言葉が見つけれなかった。

「あ、えっと……その……」

口ごもる未成は、頭を掻いたり、手を揉んだりすることしかできなかつた。何か言おうと口を開いたり、断念して閉じたりしているうちにも、気まずい時間が経っていく。そんな時に、柳剣人は現れたのだ。



## 7th Period お見舞い

リングが詰まった網をぶら下げながら、剣人は大股に大希の横までやってきた。大希は顔を向けず、横目で剣人のことを捉えた。彼は黒いスラックスに白い長袖シャツ、そしてまた黒いベストという全く可愛げのない格好だ。この男はあまりカジュアルというものを知らないのだ。そんな生真面目な男がやってきたところで、この暗い雰囲気は晴れない。

「剣人か。こんなところまでどうした？ 非番だったのに」

剣人は口元にうつすらと笑みを浮かべ、そつとリングを顔の高さまで掲げた。そしてさつさと病室の隅の椅子を二つ取り、未成の隣に並べて座ってしまった。それから、無造作にリングをテーブルの上に置く。

「差し入れを持ってきてやったんだ。理由は一つに決まってるだろう。それから、剣人は開けっ放した扉の向こうに目をやる。何かを待っている様子だ。大希や未成もつられて廊下に目をやる。一時流れる静寂。それから三人の目の前に現れたのは、一人の女性だった。小さなメモを手に持って、おそらく病室の名簿を確認しているのだろう。その丸い目をきよるきよるとさせている様子は、まるでリスのようだった。剣人は一瞬愛おしそうな目をして、それからその女性に向かって手招きする。

「おい、さくら。こつちこつち」

さくらと呼ばれた女性は、すぐさま剣人を視界に捉えた。自分や剣人の幼なじみであり、剣人の恋人でもある彼女。その明るい笑顔でこちらまでやってくるのだろう。大希はてっきりそう思ったが、そうはならない。彼女は頬を軽く膨らませ、長いスカートをなびかせながらやってきた。

「置いてかないでよ。結局病室を聞き直す羽目になったんだからね」  
デニム生地のロングスカートにブーツを履き、クリーム色のカー

デイガンを羽織った彼女は、素朴な中にも育ちの良い雰囲気を醸し出している。その表情のどこかにあどけなさを残し、それがまた彼女の雰囲気を強調していた。そんな彼女を愛している剣人は、素直に頭を下げてしまう。

「悪い。さつさと大希の顔を見ておきたくてさ」

「はいはい。わかりました、つと」

さくらにしても、これ以上に責める気はない。肩まで伸びた髪を背中に流すと、さつさと剣人の隣に腰かけた。

「……二人とも、元気で何より」

会った途端に痴話喧嘩を見せつけられ、大希はすっかり鳩が豆鉄砲を食らったような顔になっていた。気付いたさくらは、肩をすくめて上目遣いをする。

「ごめんね。気を使わせちゃったかな。お見舞いに来たのに。ほんとは私が言うセリフよね、それ」

戸惑いどおしの大希だったが、久宇慈高校のミスコンに推薦されたような美人に謝られては、男として許さないわけにもいかなかった。大希が引き出されるように頷いてしまうと、さくらはにっこりと笑い、手に提げていたかばんから紙皿と果物ナイフを取り出し、リングの網を開け始めた。

「待ってて。今リングむくから」

「あ、ありがとう」

大希は頬を緩め、さくらの手の内でリズムカルに動く果物ナイフを見つめはじめ。さくらはただ料理が得意なだけでなく、こうした細かい作業も上手だ。そこには彼女の気配りができる性格が現れている。美人で性格にも優れているとなれば、剣人のことを誰もが羨むのは当然だった。

「さくらさんと剣人さん、式はまだ挙げないんですか？」

カップルの隣で気恥ずかしくなったのか、未成は二人の方を見ない。改めて尋ねられて、剣人とさくらは向かい合ってみた。もうすでに、見つめあっただけでどぎまぎするような初々しさはなくなり、

一緒にいて当たり前と二人は思うようになっていた。

「まあな。付き合いだして九年か。そろそろ結婚してちょうどいい頃かもな」

「私は大学を出た頃からずっと言ってるけどね。結婚しよう、しようって。結局は剣人の肚次第なんだよ」

さくらが剣人の瞳を覗き込みながら言うと、彼は苦笑いしながら頭を掻いた。

「だって、まだ十分に生活資金が貯まってなかったからさ……」

「そういう慎重なところはあなたのいいところだけど、私だって稼いでるんだから、こういう時には思いきってほしいな」

「そうか？」

しばし相思相愛のやりとりを見つめていた大希だったが、しだいにうるさく感じるようになっていた。普段は真面目でお堅いところもある二人のためか、なぜだか余計に鬱陶しかった。

「愛し合ってるのはわかったから、いい加減にしてくれよ。お前たちは俺の目の前でイチャイチャするためにここまでわざわざ来たのか？」

ようやく二人は我に返った。笑顔を引きつらせ、ぎこちない動作で大希の方に目を戻す。剣人は頬を赤らめた咳払いで大希の質問に答える。さくらは目を泳がせながら、切ったばかりのリングを差し出した。

「ごめんね。もちろんそんなつもりは無いよ……この話題は二人で家まで持ち帰るから、許して」

「ああ。勘弁してくれよ？」

大希は眉にしわを寄せたまま、さくらが差し出した色濃く甘そうなりんごに手を伸ばす。このところずっと彼女がいないものだから、二人の仲睦まじい様子を見るのは面白くなかったのだろう。嫌そうな顔を少しも崩そうとしない。剣人とさくらは困った顔で目配せするしかなかった。

そんな時に助け船を出せるのが未成なのだ。三人の顔をぐるりと見渡した彼は、柔和に微笑んだ後、リングを一つ頂戴しながらさくらに尋ねた。

「じゃあ、さくらさん達は一体何をしにここまで？」

それを聞いた途端、さくらはぱっとその顔を輝かせた。目で感謝を必死に伝えながら、さくらは上ずった声を出す。

「う、うん。そうそう！　そうよ。私達はとても心配な事があったからここまで来たの。全く、私達ったら何してんだろ」

そのわざとらしい言い回しといたら、大希はさらに視線を強めてしまったほどだ。さくらは苦笑いをひきつらせ、さすがの未成もこれを助けるのは無理だと思う。だが、歴戦の大將は小さな小さな突破口一つで勝利を得てくるのだ。

「そうだな。本当はお前に忠告をしに来たんだ。お前が思った以上に元気だったから、一瞬忘れそうだったけどさ」

「忠告？」

大希はいきなり目を鋭くした剣人に怪訝な顔をした。その目は全く心当たりが無いらしく、疑問の色が浮かんでいた。それを見て取った剣人は舌打ちをして、出し抜けに大希の左肩を掴んだ。

「いてえ！　何すんだよ！」

反射的に剣人の手を払い落とし、そのしかめっ面を睨み返す。その視線に久宇慈の大將はぴくりとも動じず、にべもなく言い放った。「その痛みを忘れんな。これ以上の無茶は絶対にするなよ。……親父みたいになるぞ」

剣人が言い放った横で、さくらも控えめに頷く。大希は目を瞬かせた。久方振りに蘇ってくる過去の記憶。心に深く刻み込まれたそれは、そして自分や剣人、そして健が警察官を目指すきっかけだった。そして、この世の理というものを付きつけられた瞬間でもあった。大希は困ったように肩をすくめ、自分の腹に巻き付いている包帯に目を向けた。

「切り替え早いな。結婚するしないの話の後で、いきなりその話を

持ち出すかよ、普通」

「これくらい切り替え早くないと、大将の仕事はやっていけないからな」

不敵に笑ってみせた剣人と、感心した笑みを浮かべた大希。その二人の間に交わされる感情のやり取りを読み取れない未成は、交互にその笑みを窺いつつ、申し訳なさそうに声をかける。

「あの……その話、詳しく聞かせてくれないですか？」

テーブルに片肘ついていたさくらが、不思議そうな顔で未成の目を窺う。

「あれ。あの時結構なニュースになってただけど、やっぱり転勤してきたばかりじゃわからないか」

未成は目を泳がせ、少々うろたえた様子だ。何の気なしに言ったつもりだったが、変に困らせてしまったことに気づいたさくらは慌ててとりなそうとする。

「ご、ごめん。そんなに悩まなくていいよ。話しても減るものじゃないし、今話すから。ねえ？」

さくらから送られてきた視線を受け取り、剣人は静かに頷いた。

その時、やたらと大きな音で病室の戸が開く。相部屋の人々から迷惑そうな目を一身に受けていたのは、空井健だった。一番来て欲しい人間がやってきて、大希は満足げに微笑む。

「ちょうどよかった。待ってたんだ、お前のこと」

「は？ 待ってた？ 何のこと？」

スーパーで買ってきたらしい詰め合わせセットをぶら下げ、健はぽかんと口を空けた。前も後ろもわかっていない健に、さくらは指を振りながら説明した。

「今から、この来栖未成くんに私たちが共有している思い出を話してあげようと思ってるの。そこにちょうど役者が出揃ったってわけ。オツケー？」

しばらく首を傾げていた健も、大希、剣人、さくらの表情を見回

しているうちにようやく話が飲み込めた。

「ああ、あれか。そりゃあ、俺も必要だよな」

健は椅子を取り上げ剣人達とは反対の側に座った。それを確かめた大希は、首を捻って未成の目を見つめる。

「俺達が今こうして警察をやっているのは、今から話す事件がきつかけなんだ」

## 8th Period 帰り道

その時彼らは小学四年生、この世の不条理など知らない無垢な四人だった。その時既に現在まで繋がる絆は作り上げられており、よく一緒に行動していた。これより始まる事件が起きた日も、四人は変わらず一緒に下校していたのだ。

「ねえ、大希って、好きな子には意地悪するの？」

人通りの少ない住宅街に入るやいなや、さくらがランドセルを背負い直し、気分良く飛びはねながら尋ねる。それはあまりに唐突過ぎ、大希は思わずつんのめった。

「どうしてそんなの聞くんだよ！」

大希は歯噛みしてもどこ吹く風、さくらはその丸い目で大希の困りきった顔を見つめ、体を傾け全身いっぱい疑問符を浮かべてみせる。

「今日ね、友だちと話したんだ！ 彰あきひが由紀ちゃんゆきのほっぺたつねつたり、髪の毛引つ張つたりするの、もしかしたらそのせいじゃないかな、ってね！」

口をつぐんでむっとした口元を作り、大希は目を細くした。確かに、彰はいたずら好きだが、引つ込み思案の由紀に対しては泣かせてしまうほどひどかった。女子たちの言葉もどこ吹く風、日ごとに様々な嫌がらせをしている。そのうち先生にも注意されそうだ。その姿を思い浮かべ、大希はゆっくりと首を振る。

「あいつはそうかもしない。でも、俺はいろんな人から『嫌われるだけだから止めておけ』って言われてるから絶対にしないよ」

「ふうん」

納得した顔で頷くと、さくらはそのまま大希の後ろを歩いている剣人や健に向かって尋ねた。

「剣人や健は？」

「俺達もやんないよ。嫌われるのやだし」

「みんないい子なんだねえ。よかった」

目を丸くした、さも心外という健の顔を見て取ったさくらは、腕組みをして何度も頷いた。愛嬌のある可愛らしい振る舞いをじっと見つめながら、剣人はにやりと笑った。

「ま、さくらは心配いらないな。さくらをいじめたりなんかしたら、他の女子が許しちゃいないし」

「そうそう。まあ、さくらはかわいいから、気になってる奴は多いと思うぜ」

大希が言つと、さくらは頬を染めながら髪をくしけずった。女友達からかわいいと言われるのに比べて、幼なじみの男の子からかわいいと言われるのはやはり照れくさかった。十字路にさしかかりながら、さくらははにかむ。

「褒めてくれてありがとう」

だが、不穏とはこんな平穩を引き裂いて現れるものだ。十字路の影から現れた軽トラック。さくらは慌てて足を止め、道を行くトラックをやり過ごそうとした。危なくひかれてしまいそうで、さくらは冷や汗を拭ったが、なんとそのトラックはさくらの前で停まった。さくらは目を丸くし、恐る恐る首を傾げた。

「え、何？」

さくらは逃げ腰だった。知らない人に付いて行ってはいけないと教えられている。声でもかけられようものなら、さくらは大声を上げながら逃げようというつもりだった。だが、声さえかけられなかった。いきなり運転席のドアが開いたかと思うと、目出し帽をかぶった、体格のいい二人の男が飛び出し、いきなりさくらの両腕を掴んだのだ。凍りついてしまったさくらから声は出てこない。そのままか弱い少女はトラックの暗い荷台の中に押し込まれてしまった。

「待て、さくらに何するんだよ！」

そこで黙っていなかったのは大希だった。古参の機動隊である父



からは、『危ないことには首を突っ込むな』と釘を差されていた。しかし、昨日ヒーローショーに連れていってもらって昂ぶっていた正義の心は収まらない。剣道で磨いた身軽さを生かして、荷台の扉を閉めようとしていた男に飛びかかる。そのまま踏み込みで鍛えられた足を男に叩きつける。不覚を取った男は地面に突き倒された。身を翻し、大希はもう一人の男に向かい合おうとする。

その瞬間に拳が飛び、大希の鳩尾に叩きこまれた。所詮は小学生の大人に敵うわけがなかったのだ。吹っ飛び、もんどり打つてうつ伏せに叩きつけられる。抵抗できなくなった大希の体を掴み上げると、先ほど蹴倒された男は、恨み返しとばかりに大希の頬を一度殴りつけた。

「大希！」

さくらは荷台の奥から飛び出そうとする。だが、大希の鳩尾を殴った男は懐からナイフを取り出し、その目の前に突きつけた。

「出てくるな。二度と人前に出られなくしてやるぞ」

頬を切っ先で撫でられたさくらは震え上がり、蒼白な顔で引き下がった。それを確かめた男は、大希の肩を踏みつけているもう一人の方に振り向き、そして鼻を鳴らす。

「ガキに向かってよくやるぜ」

「ああ、生意気なガキはこうしてしつけしてやらないとな！ 親の顔を見てやりたいぜ！」

不意打ちは相当男を立腹させたらしく、大希は既にボロ雑巾のようになつて横たわっていた。その顔へ、男は歯でも折ってやろうと足を振り上げた。

そこで黙っていられないのが、クラスクールに振る舞いつつもクラス一友情に厚い剣人だった。始めは起こった出来事に戸惑い動けなくなっていたが、大希が為す術もなく叩きのめされているうちに、その心の内に火が付いたのだ。

「やめろ！」

叫びながら飛び出し、剣人は素早く男の襟首を掴んで引っぱる。

片足立ちの姿勢になっていた男は、いくら体格がいいといえどもバランスを崩した。だが、やはり剣人も敵わなかった。何とか窮地を救ったはいいものの、今度は剣人が襟首を掴まれ、なんとさくらのいる荷台に彼も押し込まれてしまったのだ。さくらをナイフで脅した男が、もう一人に向かつて呼びかける。

「そいつもこの中に入れる！ こいつらからも身代金は取れるだろ」  
「危なくねえか？」

「どうせ見られてるんだ、そいつもまとめて突っ込め」

大希を掴み上げた男は頷き、荷台の中に放り込んだ。その有様に、さくらは声にならない悲鳴を上げた。それから、男はもう一人の姿を探し始める。

「おい、あいつはどこだよ」

大希に突き飛ばされた方の男が口走った時、いきなり甲高い音が鳴り響いた。

「うわ！ 何だ！」

男は音が鳴り響いている車の前方へと走る。そこには、鳴り響く防犯ベルを取り落とした健がいた。思わぬ事態に、焦った男は逆上した。

「てめえ！」

「わ、わあ！」

元タインドア系で、その時まだ臆病な所があった健。それでも小さな勇気を振り絞っての行動だったが、男の圧力に耐え切れずに踵を返して逃げ出そうとした。しかし、慌てた健は足をもつらせ転んでしまった。そんな健をつまみ上げ、男はその歯を見せた。

「面白いことしてくれんなあ？ お前もまとめて連れてってやる。後で見てるよ」

「や、やめて！ お願い！」

当然耳を貸すはずもなく、男は健もトラックの中に放り込んだ。扉を固く閉めると、男達は運転席に飛び込んだ。ちらりとサイドミラーを覗くと、一人の女性が軒先で息を呑んでいるところだった。

「やべえ、見つかった！ ずらかれ！」  
男はいきなりアクセルを踏んだ。

さくらは暗い車内で泣き叫んだ。ナイフを付きつけられ、幼なじみの大希が叩きのめされた。このトラックの行き先はわからない。『誘拐』されたのだ。恐怖に惑い、さくらは取り乱して泣き叫ぶ。  
「出して！ ここから出して！」

健も隅で膝を抱えてすすり泣いていた。大希は虫の息で起き上がれない。とてもさくらの事をかまわってやる余裕など無かった。さくらの悲鳴は強くなるばかり、息をつまらせ苦しそうに喘ぎながらも、さくらはその小さな拳をトラックに叩きつけ続けた。最早普通ではなく、そのまま気が違ってしまうそうだった。

「さくら、落ち着け」

唯一他人に気を配る余裕があつた剣人は、さくらの肩に手を置き、何とかなだめようとする。しかし、既に周りが見えなくなっていたさくらは剣人を大希の方に突き飛ばす。

「離して！」

剣人はたださくらをなだめようとするだけではどうにもならないことを悟った。痛みに呻く大希を申し訳なさそうに一瞥し、今にも壊れてしまいそうな彼女を見つめた。気の毒だと思ふ感情と共に、もう一つの感情が浮き上がってくる。その感情に従つた剣人は、喚き散らすさくらを抱き寄せた。

「さくら、落ち着け。泣いたって……疲れるだけだ」

急に感じた他人の暖かさに惑い、さくらはぶるりと体を一回震わせた。剣人はさらに抱きしめる力を強くする。

「さくらの事は俺が守るよ。きつと助けだつてくる。そつだ。大希のお父さんが来てくれるかもしれない」

「大希の、お父さん？」

さくらがオウム返しにすると、剣人は強く頷いた。ときおり剣人や大希が所属する剣道少年団に足を運んでくる大希の父親、いまむらた今村竜つまさ

将。その凄まじい名に全く恥じない剣士で、全日本大会でも常にベストエイトに残り、昨年は準優勝を果たしたことさえある経歴の持ち主だった。剣人は、その姿を思い出しただけで安心できる気がした。

「ああ。すつごく強いんだ。あんな奴ら、十秒で参ったって言うよ。剣人の力強さに、さくらの呼吸も少しずつ落ち着き始めた。自分から剣人にしがみついたさくらは、そのわずかな体重を全て剣人に預けた。

「うん……私、信じる」

「そう。信じようか」

さくらの重みを感じながら、剣人は目を閉じ、憧れの剣士に思いを馳せていた。

トラックは、港の空き倉庫へ入ろうとしていた。

## 9th Period 四人の絆

「そこに入ってる!」

港前の廃倉庫に連れ込まれた途端、四人はナイフで脅されながら狭い一室へと追いやられた。埃のかぶった机やパソコンが雑然と散らかっていて、長い間人が入っていないことを思わせる。四人は今まで想像もできなかったひどい空間に、ますます気落ちしてしまった。そこへ追いつちをかけるように、男が扉を思い切り閉めきつた。その鉄が軋む音、ぶつかる轟音に四人は同時に飛び上がる。

「すつごく古いこのパソコン。何年前のだろ……」

健は恐怖を紛らわそうと、目の前に並ぶパソコンを見て、キーボードを適当に打ちながら首を傾げる。そんな思いに全く気付けない大希は、疼く全身に苦しみながら顔をしかめる。

「そんな事どうだっていいだろ。まずはこの状況をどうにかしないと」

「どうにか? どうにもならないじゃないか。……助けを祈るしかないよ……」

健はキーボードを脇へと押しやりながら大希を睨み、そして脱力してため息をついた。こんな所で口論したところでどうにもならないことは、誰もが共通して納得していた。さくらは隅で膝を抱えて座りながら、窓から見える男の姿を怯えきつた眼差しで見上げる。

「どうして私たちがこんな目に遭わなきゃならないの……?」

剣人はさくらの隣に腰を落ち着け、ぼんやりと思案を巡らせた。その活躍に憧れて、様々なものを見る刑事ドラマや探偵アニメ。たまに取り扱われる誘拐において、その理由は単純明快なものが多かった。不幸なことに、さくらの出自はその理由にすっぽりと当てはまるのだ。

「それは、さくらの家がお金持ちだから。だろうな」

城家<sup>しろ</sup>。住む家は立派だが、祖父母を含めた五人暮らしならごく当

前の広さだ。服も友達と同じようにキャラクターがプリントされたものだとかを着ている。車で学校の送り迎えだとか、そういう金持ちじみたことは全くなく、毎日大希や剣人と元気よく歩いている。その暮らしぶりは大して周囲と変わっている様子は無い。しかし、父は若くしてとある企業の社長を務めており、金持ちであるに違いないのだ。剣人の眩きを耳にして、さくらは鼻をすすった。

「ごめんね。剣人や、みんなに私迷惑かけてる……私のお父さんのせいで……」

「そんなことを言ったらだめだ。さくらも、さくらのお父さんも全く悪くない。全部悪いのはあいつらなんだ」

剣人は自分で自分がわからなくなっていた。怖いと思っているはずなのに、さくらの隣にいただけで言葉がするする出てきてしまう。そして、その言葉は確実にさくらを勇気付けられているようなのだ。さくらはようやく笑顔を見せた。

「ありがと。剣人って、とっても優しいよね。友だちは剣人の見た目をほめてるけど、剣人の一番いいところは優しさなんだって、私知ってるんだ」

剣人はどつきりした。心臓がぐつと締め付けられるようだった。どうしてこんなに苦しくなったか、これまた剣人は自分がわからなかった。その戸惑いを押し隠し、剣人は小さく笑ってみせた。

「よかった。いつものさくらに戻ったな」

「うん」

二人は自分達が置かれている状況も忘れ、くすくすと笑い始めた。それを大希は感心しつつも、うんざりしたような顔で見つめた。

「元気になったのはよかったけど、少し安心しすぎじゃない？俺達はさらわれたまんまだぞ？」

大希の言葉で現実に戻された二人は、ため息をついて顔を曇らせた。

「そつだよな。ごめん」

剣人とさくらが揃って頭を下げると同時に、地面に耳をつけるよ

うな格好をしていた健が急に三人を制する。

「しっ！ このひび割れから、あいつらの声が聞こえてくる……」

三人は息を殺し、健は目を閉じ外の音に集中し始めた。

「ああ、城行成しろゆきなりさんですか？ 今ねえ、お宅の娘さんと、その友人を預かっているんですよ」

その声は全くおかしなものになっていた。アヒルにも似た、妙に上ずったその声は、口から発せられていないようでさえある。あまりに珍妙な声に健は首を傾げる。ちよつと顔を上げてみると、男達は携帯電話と大きなスプレー缶を交換しているところだった。健は再び耳をすませる。

「娘は！ 娘の友だちは無事なんですか！」

オンフックにしているのだろう。さくらの父の優しい声色も聞こえてきた。

「ああ、今のところ無事です。そして、あなたが我々の要求を呑むなら、この先も無事です」

さくらの父の、ほっとしたため息が聞こえてきた。それから、感情を抑え込んだ、無機質ながらも苦しげな声が聞こえてくる。

「一体、何が目的なんですか」

「何が目的？ 決まっているでしょう。あなたからまだ貰いきつてない『退職金』ですよ」

「な、何ですか？ 『退職金』？ まさかあなた達は……」

さくらの父は何かに思い至ったようだった。ほんの少しだが、電話越しの雰囲気が強くなったように健には感じられた。

「どうして娘やその友だちをさらうんですか。逆恨みじゃないですか！ セクシャルハラメントや飲酒運転を繰り返すような社員を置いておけるほど、私の任されている支社に余裕はありません！」

「おっと、もういっぺん言ってみる？ お前の可愛い娘の爪、一枚剥がしてやるのか。この電話越しにぎゃんぎゃん泣きわめく声を聞かせてやるのか？」

「ま、待ってください！ それだけは、娘を傷つけるのだけは……」

健はこれ以上聞いていられなかった。目を固く閉じて、唇を噛みしめながら耳を離れた。考えただけでもむごたらしい。健は身震いした。

そんな彼の様子を機敏に感じ取ったのが、さくらはひどく怯えた顔で尋ねる。

「どうしたの？ 何か言ってた……？」

健は慌てて首を振った。違和感を持たれることだけは避けねばならない。ただその一心で、彼は平静を装った。

「ううん。みんなには何もしないって」

やはり先ほどの顔をすっかり確かめていたからか、三人とも少し訝しむような目をしていた。健は唇を噛んでうつむく。何とかみんなの前を向けるようになってきたところだ。自分がその雰囲気壊すわけにはいかない。自分に言い聞かせた健は、努めて明るい笑みを浮かべた。

「さくら。大丈夫だって。何にも起きない。俺達は、助けが来るまで我慢してればいいんだよ。わかる？」

大希は健の思うところを知った。その心意気を汲んで微笑む。

「ああ。そうだな」

四人が励まし合って恐怖を紛らわしている、まさにその時だった。外で男が騒ぎ出した。何か筒のような物が投げ込まれ、つんざくような音を立てて破裂した。大希達は思わず耳を塞いでしまう。それは外の男達も同様で、その隙をつき、五人の警官達が倉庫に飛び込んできた。ふらつきながら、犯人は五人を妨害しようとする。転がしたり、二人で木箱の中身をぶちまけたりと、ここに至って往生際の悪いところを見せている。

「助けがきた！」

「頑張れ！」

さくらと剣人は窓にしがみつき、五人の警官が犯人の妨害を乗り



越えて迫る様子を応援し始めた。健はおっかなびっくり、窓枠から目から上だけを出して眺めている。そして、大希の目は一人の機動隊員に注がれていた。

「お父さん？」

銃を構えて先陣を切る、竜を思わせる目をした警官。確かに大希の父、竜将だった。ドラム缶を飛び越え、リングを蹴り払い、竜将はその目に激しさを宿らせ駆けていた。その勢いに負け、勝ち目がないと踏んだ犯人たちは、ついに四人がいる部屋に飛び込んできた。さくらは思わず悲鳴を上げる。

「来い！ ぶつ殺すぞ！」

つばを飛ばし、目を飛び出てきそうなほどに見開いたその表情に、四人は再び縮み上がってしまう。そろり、そろりと四人は男達の方へと歩き出していく。人質にとって、何とかこの場を凌ごうとでもいうつもりなのだろう。そうは問屋がおろさない。その背後には、既に竜将が追いついていた。拳銃をぴつたりと構え、真っ直ぐに男の胸を狙っていた。

「止まれ！ これ以上四人に手を出すな！」

「う……」

男はナイフを手にはぶら下げたまま、竜将を睨みつけた。だが、竜将はそれをさらに上回る圧力をかけた。その威圧感に耐えうる人間など、わずかしかないだろう。男達は急に震えだした。

「う、うわああ！」

竜の圧力を前にして、人は狂わずにいられない。金に困って思いついた犯罪。正義というものの強さを舐めていた男達は、とうとう自暴自棄になった。

「ちくしょう！」

大希に蹴飛ばされた方の男が飛び出し、ナイフを持っていた男が思い切りそれを投げつけた。一瞬飛び出してきた男に気を取られ、竜将はナイフに気がつくのが一瞬遅れてしまった。避けられず、竜

将はその右手の甲にナイフを受ける。さくらが悲鳴を上げた。

彼は鋭い痛みを目を見開き、拳銃を取り落としてしまう。それと同時に、飛び出してきた男が竜将に体当たりを食らわした。痛みでその他の感覚を奪われていた竜将は、いとも簡単に突き倒されてしまった。目を血走らせ、とうに正気を失った男が、ナイフの代わりに竜将の落とした拳銃を取り上げる。

四人が凍りついた。絶望した。倉庫に響き渡る音と共に、竜将は電気ショックを受けたかのように跳ね上がる。違うのは、鮮血が一気に噴き出したことだ。四人はもちろん、犯人さえも今しがた起きた出来事を飲み込むことができずに呆然としてしまった。そこに四人の警官が跳びかかり、容易く犯人を取り押さえた。警官がのしかかる中で、犯人はついに気がつく。

「ああ……やった。やつちまった……」

抵抗の色も示さず、男達はいとも簡単に拘束された。引つ張り立たされ、まだ少年らしさを残す警官二人に悄然と連れられていった。その様子を呆然と見つめていた大希は、急に鼻を付いた血生臭さに現実へと引き戻された。

「お父さん！」

大希は固まっている三人を放つて飛び出し、虚ろに天井を見つめている父に駆け寄った。胸元からは血が今も溢れ、彼の命運が尽きたことを明らかにしていた。そんな事を認められるはずもなく、大希は必死に父の肩を叩いた。

「お父さん！ お父さん！」

「大希……か？ ひどい顔だな……許せない」

今まさに自分が死のうとしていても、竜将は大希の父親だった。その父親としての使命感が彼を逸らせ、呆気無く致命傷を負わせたのはこの世の理不尽としかいう他にないだろう。大希は目にたつぷり涙を浮かべ、父の肩を必死に叩いた。

「そんな事より病院！ 早く手当てしないと」

「大希」

父の声と、そしてもう一人の声が重なった。見上げると、そこには父の同僚、井上勝いがみ まさるが立っていた。普段の強面は歪み、哀れみと悲しみ、そして同情が入り混じった感情を隠しきれていなかった。

「多分、お前の親父はもう助からない。黙って、最期の言葉を聞いてやれ。」勝は背を向ける。「勝手に先走るからだ。だから参加はやめとけて、言ったのによ……」

憎まれ口は震えていた。鬼の涙を、竜将は鼻で笑う。

「お前らしくないな……そのみんなもこっちに来てくれ」

剣人はずっと目を見開いて、さくらは剣人にすがりついて泣きじやくり、健は放心した顔でやってきた。先に来ていた大希と共に、四人は自分たちのせいで、大希の父親が死のうとしていると自身身を責めていた。責め続けていた。それを読み取ったのか、竜将は小さく息をついた。

「自分を責めるな。悪いのは父さんなんだ。君たちを助けたい、助けたいと思つて、ちよつと焦りすぎたんだよ。油断してたのかもしれない。日本で二番になったから……」

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

さくらは呪文のように唱え続けていた。竜将は血塗れの手でさくらの肩を叩く。

「だから……さくらちゃんのせいじゃない。他のみんなのせいでもない……悪いのは、みんなをさらおうとした馬鹿な男達だ。職務怠慢で辞めさせられた逆恨みなんて、人間としてみつともない。みんなは、絶対そういう人間になるなよ」

四人は沈黙していた。竜将は眉根にしわを寄せてみせ、少し強い口調で迫る。

「返事は？」

「は、はい」

「よし。それから、君たちは本当によく頑張った。怖かっただろう？ それなのに、みんなはよく頑張ったよ。今日頑張った事は絶対に忘れないようにしなさい。これからもきつと頑張れるはずだ」

「はい」

竜将は一度目を閉じて息を吸い込み、息子の顔をしかと見据えた。  
「大希。もう一度言う。絶対に自分を責めるなよ。父さんは死ぬけど、それをずっと引きずり続けるな。父さんは誇らしい。お前たちの為に死ねたんだ。モウロクして、お前や、嫁さんに迷惑かけながら死ぬよりずっといい……」

「何言つてやがる。死んだら元も子もねえだろうが」  
すかさず勝は呟いたが、やはり竜将は鼻で笑う。

「そういう事は、しっかりと怒つて言えよ。そんなんじゃ迫力ねえぞ。お前はこれから俺の分も神奈川の機動隊を引っ張ってくんだ。もつと頑張れ」

「言われなくても」

そんなやり取りを見つめていた大希に、電撃が走るように一つの考えが立ち上がる。急に顔を引き締めた。涙を拭き、姿勢を正して、大希は素早く敬礼する。

「お父さん。俺、絶対警察になる。お父さんの分も、頑張つて働く！」

「そうか……嬉しいなあ。でも、絶対に、こんなダメ親父になるんじゃないぞ。お前は、元気に働いて、ちゃんと定年迎えるよ」

「はい！」

大希と父のやり取りを見つめていた剣人も、静かに敬礼する。健も、さくらもそれに倣った。

「俺も警察になります。俺も、おじさんのように正義の為に戦いたいです」

「ぼ、僕もなります……まだビビリだけど、絶対克服して、立派な警察になります」

「私もなります。絶対に」

「さくらちゃんはやめておきなさい。警察のお手伝いをしたいなら、他にもたくさん仕事がある。さくらちゃんに似合う仕事を見つけて、そこで活躍してほしい。警棒振り回すようなこと、絶対行成さんが

嘆くから」

「は、はい……」

さくらはほんの少し気落ちしたようだったが、すぐに敬礼をし直した。再び深く息をついた竜将は、ゆっくりと体から力を抜いていく。

「ありがとうな。みんな。俺の人生を引き継ぐ、だなんて言ってくれる子がこんなにいるなんて、本当に嬉しい。俺も、安心して逝ける……大希。母さんに、『愛してました。迷惑かけるけど、許してくれ』って、伝えるのを忘れないで、くれ……」

竜将は目を閉じ、崩れた。涙をこらえた四人の少年少女、そして勝は、父として、警察として散った亡骸に向かい、静かに敬礼を続けていた。

「こんな感じだよ、未成。んでもって、俺は堂々と約束破って、こんな目に遭ったってことさ」

大希はこともなげに話を終えたが、未成は真つ暗な表情でうつむいていた。さくらや健が心配そうにその表情を窺う中で、彼はぼそぼそと呟いた。

「知らなかった……父親を亡くしたとは聞いてたけど、まさかそんな事があつたなんて……」

大希は首を捻った。親友とはいえ、彼女ではないのだから親に挨拶しに行ったことはないし、父を亡くしたと話した覚えが一切なかった。だが、酔った拍子にぼんと飛び出したのだろうと納得する。

「言っただけ？ まあいいや。未成まで気に病む必要はないんだって。俺達だって、もう悲しんでない。多少暗いけど、俺達の人生を決めた大切な出来事だって、この事件に関わった人間みんなが共通して納得してるんだ。だから、みんな前見て生きてるんだし」

健が力強く頷いた。そこに十三年前のおどおどした姿はなく、事ある毎におどける飄々とした姿を存分に見せていた。

「そうそう。苦労したんだぜ？ 最初は『なにこいつ張り切ってん

の?』なあって目で見られたしさ。みんな必死に努力したんだよ」

大声で話す健が、すでに諦めの眼差しを向けられていることに気が付き、さくらはくすくすと笑いながら頷いた。

「そうね。私も元は国語や音楽が得意だったんだけど、習ってたピアノとか茶道とか、全部やめて機械いじりの勉強して、今じゃ警察が扱う機器の技術顧問になったし。あ、ソフトの方ね? ……とにかく、みんなちゃんと頑張ったんだよね」

剣人は笑いあう健とさくらを見ながら、小さく微笑んだ。

「ああ。これからも頑張っていくんだよね」

大希も強く頷き、白い天井を見上げた。

「そう。四人で父さんの何倍も頑張っていくんだ」

大希は強く握り拳を作り、同じく拳を作った他の三人と突き合わせた。

「よし。みんな頑張るぞ!」

「おう!」

四人の絆は、永遠に切れることはないだろう。

一ヶ月が経った。その頃には大希の傷も平癒し、衰えた体力を取り戻すために早朝からランニングに勤しむ毎日を送っていた。その頃には彼の周囲を騒がせた殺人事件の音沙汰もとんとなくなり、大希は頭の隅にその出来事を押しやっていた。今も殺人鬼がこの街をうろついている。今度会った時は確実に捕まえてみせる。それくらいにしか考えないようになっていた。

そんなわけで、大希はいつものように河川敷を走っていた。疾走感のある曲を聞きながら、そのテンポに合わせて調子よく足を踏み出していく。聞いている曲も大分早いものになり、来週からはちゃんと出勤できそうな様子である。そうなると気分も良くなり、大希はますます張り切った。足取り軽やかに、彼は河川敷の曲がった道を駆け始める。

彼を見て、道行く人誰もが振り返る。皆一様に不思議そうな顔をして、中には怪訝な顔をする者もいた。大希も気が付かないわけにいかず、横目で気にするようになり始めた。犬を連れた一人の中年女性と目が合う。犬は大希に歯を剥いて吼える。女性はそんな犬を引っ張り、慌てて大希とは反対の方向に走って行ってしまった。

「なんだ……？」

その動作に不審を覚えないわけにいかず、大希は思わず立ち止まった。顔を上げれば、川にまたがる橋が目の前に見えた。ときおり浮浪者が現れる場所でもあり、近づく人はあまり多くない。橋の下に目を凝らすと、身なりがボロボロの人間が歩いている。大希はため息をつく。浮浪者に気を払いながら歩き出す。徐々にその様子がわかってくる。男性だということ、そうそう年は取っていないということ。もう数歩近づいてみた時、ついに大希は人々が不思議がっていた理由に気がついた。

「そんなばかな」

大希は思わず呟いた。目を呆然と瞬かせ、頭の整理が全くつけられないまま浮浪者の顔を見つめ続けた。

『大希』だったのだ。生きているのか死んでいるのか全くわからないような表情をしている事以外は、完全に大希そのものだったのだ。何を目指しているわけでもなく、それはただ歩いていた。もう一人が硬直し、恐怖にも似た視線を送り続けていることには全く気付かない。そのまま『大希』は大希の側を横切り、行ってしまった。「おいおい……夢か。また夢なんだろう」

大希はうわ言を呟いて、必死に腕や頬をつねってみた。しかし、その行動は確かな痛みとして帰ってきた。今大希が置かれていたのは、全くの現実だったのだ。

大希は冷や汗がどつと吹き出してくるのを感じた。これが紛うことなき現実だとしても、大希は受け入れられなかった。

「帰ろう。さつさと帰って、家で筋トレしよう。ああ。それがいい」  
大希は現実から目を反らすことに決めた。遅いテンポの曲に変え、彼はただらと走り出した。河川敷の上に登り、自宅を目指した。今も心臓が引っくり返りそうだが、さすがにもう何事も起きないはずだ。大希はそう自分に言い聞かせ、のんびりと歩き始めた。秋も暮れ頃の早朝、空気は寒々としていたが、混乱した頭を冷やすにはぴったりだ。

大抵はこれで終わりになる。しかし、大希に降りかかる出来事の重大さたるや、これだけでは収まらなかった。まずは、目の前からおしゃべりで有名なおばさんが、サンバイザーにウエストポーチという、いかにもな外見でウォーキングしてくるのだ。絡まれたらさつさと帰れないからと、大希はうつむきがちになってその場をやり過ごそうとする。しかし、やっぱりおばさんに抜け目はない。

「ねえ、ちよつと？ 大希君！？」

「へ？ な、何でしょうか」

大希は唇を噛み、眉間にしわを寄せておばさんの顔を凝視する。



その顔はいかにも心配そうだ。大方怪我の心配でもしているのだろう。さつさと話を終わらせてほしい。大希は心の中で何度も唱えた。だが、おしゃべりおばさんの口から放たれたのは、その予想を遙かに外れた一言だった。

「さつき大希君、向こうにいなかった？ どうしてこっちにいるの？」

おばさんの指さした方角は、明らかに大希の進行方向だった。彼は真っ青になった。後ろを振り向き、そして目を凝らす。そこには黒い影が今もいる。先ほどすれ違った、彼の生き写しに間違いない。「ねえ、ちよつと大丈夫？ さつきも変だったけど……」

大希は何かを振り払うかのように首を振った。それからまっすぐおばさんを見据え、丁寧に尋ねる。

「あの、僕は向こうにいたんですよね？」

それを聞いた途端に、おばさんは怪訝な顔をした。間抜け、と目で訴えているようでもある。

「大希君、ちよつと何言ってるの？ いたに決まってるじゃない！」

私がこの目で見ただから」

「ありがとうございます。それじゃ！」

これ以上関わる必要はない。大希はおばさんの言葉をこれ以上聞かずに走りだした。心臓が早鐘を打っているのは、走っているからというだけではない。想像を絶する事態がこの世で起きていることに気がついてしまったのだ。大希は素直に恐れ、戸惑っていた。

「嘘だ。そんな事があるなんて……」

思わずそう呟いた時、大希は河川敷公園の真ん中に佇んでいる人影を認めた。間違いであってくれと願いながら、坂を半ば滑るようにして下った。その下った勢いそのままに、大希は人影の隣まで駆け寄った。息を整えながら、大希は恐る恐るボロボロの装いの男に尋ねる。

「あの、すみません」

しかし、男からの反応はない。ふと、脳裏に先ほどの無機質な表

情が蘇ってきた。大希は唇まで青くして、いきなり男の肩を掴んで振り向かせた。

「うわぁ！」

大樹は情けなく上ずった悲鳴を上げ、思わずその男のことを突き飛ばしてしまった。だが、それにすら何の反応も示さず、男は放心して打ち倒されたままになっている。不気味という言葉がこれ以上にしっくりくる状況はなく、大希は足どりおぼつかない状態で後退りを始めた。

「こんな、こんなことなんて……」

おばさんが言っていたことは真実だったのだ。唇をわなわなと震わせ、大希は脱兎の如く駆け出した。

「何だ？ 何が起きてるんだ！」

叫ばずには心の平衡を保てなかった。これで、この街には四人も自分に似た人物がいたことになった。これをただの偶然として片付けられるだろうか。大希にはできなかった。今の状況をこの世のものとは認められず、とにかく逃げ出したのだ。

しかし、彼はきつと不幸に違いない。河川敷の道を逸れ、住宅街に足を踏み入れた大希。まさにその時、一人の男がこちらに近づいているのを認めた。そして、よせばまだ一日が楽に過ぎたものを、大希はその顔を確認してしまったのだ。

もはや大希は言葉も出ない。そこにいたのはまた『大希』。ついに自分の気が狂ったのかと思い、前後不覚になった大希はとにかく走りだした。

「嘘だ！ 何かの幻だ！ 何かの冗談だ！」

喚き散らし、大希はあてもなく走り続けた。彼はあくまで家に向かっているつもりだったが、全く見当違いの方向に走っていた。視界の向こうに時計塔が見えても、彼は全く気が付かなかった。気が付かなかった。そんな状態では、目の前すらもよく見えない。前を横切ろうとごめく一つの影を避けられず、勢い良く衝突してしまった。きれいに尻餅をついた大希は、そのまま這って目の前の人物

に近づく。

「す、すみませんでした！」

気が動転したまま、大希は土下座する。していたが、自分が今何をしているのかはよくわかっていなかった。だが運命は容赦無い。最早ポロポロの大希に、さらなる追い討ちをかけたのだ。

「ああ！ どうして、どうして！」

大希は半ば悲鳴を上げた。ぶつかっただのも、また『大希』だったのだ。何とか立ち上がった大希は、もう夢中で走りだした。ぶつかった時の痛みで、とうにこの世界が夢だという希望は持てなくなっていた。あちこちに躓き、そのたびにふらつきながら、大希はとにかく走った。

一分ほどして、大希は時計塔前の広場に辿り着いた。その開けた空間を前にして、彼はようやく自分が家に向かっていないことに気付いた。

「あれ……家に向かってたつもりだったのに……」

疲れきった大希は、時計塔の下でようやく立ち止まる。どっと疲れが押し寄せ、腹の底からため息をついてしまった。全く、今日は朝からとんでもない目に遭ったものだ。大希はとにかく家に帰り、一度寝てしまうことに決めた。幸いまだ休んでいるように言われている。朝から不可思議な出来事に遭って、誰がまともに一日生活できるだろう。心のなかで何度も言い訳した大希は、時間を確認しようとして時計塔を見上げた。

「……もう、驚けないな」

そして大希は肩を落とした。時計塔の真下に、またしても『大希』が立っていたのだ。虚ろな顔で、時計塔を見上げている。相変わらずわけがわからなかったが、大希はついに慣れてきてしまい、驚くことも無かった。ふと、これは何かの陰謀ではないかと思った。何か大変な事件が起きて、その罪を自分に被せるために、たくさんの偽者が影で行動しているのではないかと。大希はすぐに首を横に振った。よくよく考えてみれば、それは最近読んだ物語の展開にそっ

くりだった。ため息をまたついて、大希は『自分』に背を向けた。

「これを誰に話せるかな……誰に話して信じてもらえるだろう……」  
大希はまず未成の顔を思い浮かべた。元はと言えば、未成から始まったのだ。何を話してもバカにされるといふことはあるまい。ついでに、三人の親友の姿を思い浮かべてみた。剣人はぶつきらぼうな雰囲気のある外見に反して、おそろくはさくらの影響だろうファンタジーやSF系の本も好んで読んでいる。しかし、現実に関しては話が別だ。まともに聞いてすらくれないだろう。さくらなら大丈夫かもしれない。完全に信じてくれるということはないにしても、面白がって耳を貸してくれそうだ。

大希は強く頷いた。とにかく、明日辺りにでもさくらや未成に話を聞いてもらおうと決めた。誰かに話を聞いてもらわなければ、彼を苦しめる心のもやは晴れないだろう。

気分を仕切り直そうと、大希はとびきり明るい曲をかけ、ゆつくりと家に向かって走り出した。

大希が部屋に帰ってくると、健はまだ出勤の準備を整えているところだった。一旦唇を噛み、大希はおそろのおそろ話しかけてみた。

「なあ健？」

健はあくびを噛み殺し、眠たそうな顔のまま首を傾げた。

「なんだ？」

「俺さあ、さつきランニングしてたんだけど、不思議なことがあったんだよ」

「ふむ？」

「これがさ、四人の自分に会ったんだよ。不思議だと思わないか？」

健は一瞬大希を見つめたが、すぐ荷物に目を落としてしまった。

「なあ大希」

「なんだ？」

「俺にも今朝不思議なことがあったんだよ」

「ふむ？」

「起きたまんまで夢を見てる奴がいたんだ。不思議だと思わないか？」

大希は口を尖らせたが、やがてため息交じりに呟いた。

「ああ。そうだね……」

やはり健は論外だった。

仕事中の皆が昼食をとっているであろう時間帯、大希は耳に携帯を押し当て、呼び出し音を三回、四回と数えていた。さくらのお気楽な声が待ち遠しく、ちゃぶ台を指でせわしなく叩いた。だが、さくらはなかなか出てくれず、結局呼び出し音が途切れたのは十回ほど数えてからだった。

『はあい。どしたの？』

このあけすけした声は、彼女の素晴らしい点の一つに違いない。

大希はほっと息をつきつつ、そんなことを思った。

「いきなりごめん。さくら、仕事終わったら、どこかで会えないかな」

『ん？ ……じゃあ、ファミレスでご馳走してくれるんなら、付き合ってあげる』

電話の向こうでは、彼女がにつこり笑っているに違いない。その声色はとにかく明るく、楽しそうだった。心底疲れきった表情をしている大希とは大違いだ。そんな彼は重たい動作で財布を取り、中身を調べ始めた。

「……ああ。まあいいか。それくらいなら安いもんさ」

『ねえ、剣人はどうするの？ 私が引つ張ってく？』

大希はため息をついた。さくらを誘えばおまけがついてくることはわかっていたし、彼女も当たり前のように話している。だがもちろん、大希はきっぱりおまけを断った。

「いらない。今日はさくらに話したいんだ。剣人には話したくない。さくらが電話の向こうで笑い声を上げた。思わずそうしてしまうくらい、大希の口調は深刻めいていたのだ。彼に起きた大変な出来事など知る由もなく、さくらはくすくす笑いをしながら喋った。

『何？ 剣人と別れて、俺と付き合わないか、とか？』

「馬鹿な事言うなよ。そんな事言ったら、俺剣人にボコボコにされるよ。絶交間違いなしだ」

大希がうんざりした声を上げると、さくらはだらしなく間延びした調子ではいはいと応えた。机に突っ伏したような音も聞こえてくる。見た目はやはり淑やかなお嬢様なのだが、油断するところなるのだ。大希はときおりもつたいたいと思ったことさえある。彼氏がいるわけだから、気にするまでもないのだろうが。

「わかってるって。まあ、どんな話でも、私がしっかり聞いてあげる。なんか疲れてるみたいだし」

「ありがとう。さくらみたいな聞き上手が親友にいと、何かいいもんだな」

さくらはしばし嬉しそうに笑っていたが、いきなり思い出したような声を上げた。

「そうそう。未成くんも呼ぶんでしょ？」

「え？ 何で知ってるんだよ？」

大希は目を丸くした。一切彼女に話していないが、まさにその通りだ。それを話すと、さくらはふふんと鼻を鳴らした。きつと向こうではしたり顔をしているだろう。

「ちよつと考えればわかるって。大希の友達で聞き上手って言ったら、未成くんだもん」

「ふうん。まあ、未成は何となく話しやすいんだよな。聞いてもらうと何だか安心する」

聞いているのかいないのか、さくらは電話の向こうであくびを噛み殺した。食事を終えて、眠たくなったというところだろう。

「じゃあ、駅前のオブジェに午後八時集合ね。未成くんにもそう伝えておいて」

「ああ。了解」

「はい。じゃあねえ」

電話が切れた。大希は携帯に向かって頷くと、すぐさま未成に向かって電話を始める。

「あ、もしもし？」

一方、電話を切ったさくらは、ゆっくりと伸びをして、弁当箱を丁寧にしまった。まだ昼食の時間だが、できる仕事はしておいた方が、午後から楽になれる。さくらは気合いを入れ直し、そばに置いていた眼鏡をかけなおした。それを見ていた唯一の女性同僚が、感嘆のため息をついた。

「眼鏡をかけたさくらもいいねえ。かわいいし、やっぱり頭良さそう」

さくらは照れたように微笑んだ。視力は全くもって悪くないが、彼女は仕事中に伊達眼鏡をかけているのだ。それは同僚が言った通り、また彼女に違った雰囲気を与えていた。

「そんな。理加<sup>りか</sup>なんか、もっと知的に見えるよ。インテリに見える」  
「えへへ。そうかなあ」

理加が頬を染めると、さくらは何度も頷いた。そして、ちらちらと周囲の同僚にも目を配った。さくらの職場は、誰もが眼鏡をかけている。さくらが伊達で眼鏡をかけているのは、その影響だった。

「さて、頑張らないと。ファミレスでお食事が待ってるもの」  
握り拳をつくって気合いをさらに入れると、さくらは鑑識課奥のパソコン前に腰を据え、再び向かい合った。

午後八時。大希とさくら、それから未成はとあるファミレスを訪れていた。スーツ姿のままできてきたさくらは、何やらご機嫌の様子だ。席につくなり、嬉しそうに声を弾ませる。

「いやあ、ファミレスなんて久しぶり！」

こうした理由だった。大希は不思議そうに首を傾げる。今いるファミレスは値段が安く、給料日前のデートは、ここで食事というカップルも少なくないからだ。一年前の大希もそうだった。

「なんだ。剣人とは来ないのか？」

「うん。これから二人でファミレスに行くのはファミリーになって



から、って一年前に決めたからね」

さっそくのろけたさくらの表情に、未成は静かに微笑んだ。

「アツアツですねえ。何だかこっちまで幸せになります」

「まあね。山あり谷ありだったし。うん！ どれも美味しそう」

話している間にも、さくらはメニュー表を取り出し、中に目を通して輝かせている。大希は財布の中を覗きつつ、さくらの方を見やっただ。

「あんまり高いもの頼むなよ？ 金下ろしてないから余裕ないんだ」

「大丈夫だって。私の胃の大きさなんか知れたもんだから。よし。

やっぱりこれかな……はい、未成くん」

「僕も決めました。はい、大希」

未成もさくらの横からメニューを覗いていたようで、手渡されたメニューをそのまま大希へ渡す。なぜか、彼は受け取った瞬間に真剣な顔をした。そのままの表情でちらりとどこかを窺い、急いでメニューを開く。その窺った方から、ウェイトレスが水やメニューを携えやってきた。形整ったスマイルを見せながら、手際よく水やおしぼりを配っていく。そして、最後にメニューを置いた。

「ごゆっくりどうぞ！」

マニュアル通りの行動を終え、ウェイトレスはそのまま立ち去ろうとする。そこを、大希はすぐさま呼び止めた。

「あ、もう決まったんで、注文させて下さい」

ウェイトレスはきよんとした。確かに、メニューを置きに来たらずで注文が決まっているなどそうはない。頭が回らず、少し戸惑った様子の彼女に大希は声をかけ直した。

「あの、注文してよろしいですか？」

「あ、ああ。はい。大丈夫ですよ」

どこか固まった表情のまま、彼女はタブレットを取り出し、ペンを構えた。大希は改めてメニューを見つめ、選んだメニューを指差した。

「オムライスとシーザーサラダ一つ、お願いします」

「私はカルボナーラで」

「僕はナポリタンお願いします」

三人の余りに早い決断に戸惑っていたものの、ウエイトレスは笑顔で応答し、その場を後にした。

「今日は特に早いね。決断力を鍛える訓練だっけ？」

おしほりで丹念に手を拭きながら、さくらは感心したような声を上げる。メニューを戻しつつ、大希は満足げに頷いた。メニューを開いて五秒。今日は最速だった。

「ああ。父さんの教えの一つだからな。『こんなくだらないことで迷っていたら、いつまでも強い剣士にはなれない』ってね。母さんは適当なだけじゃんって言うけど。でも、さくらだって早かったじゃないか」

「今日とはとにかくカルボナーラが食べたかったから、あるかどうか確かめただけだし。未成くんも早かったね」

「ええ。僕も今日はナポリタンが食べたかったので」

ふうん、とさくらがテーブルに肘をついた時、いきなり陽気なメロディがさくらのポケットから鳴り始めた。弾かれたように立ち上がり、ポケットから桜色の携帯を取り出す。未成に謝りながら席を抜けたすと、さくらは大希に会釈した。

「ごめん。ちょっと電話かかってきたから、出るね」

「え？ ここで話せばいいじゃ」

「私としては、そういうのって御行儀よくないと思ってるからさ。料理来たら、先に食べてて」

さくらは大希の言葉を遮ると、そのままファミレスの外に出てしまった。大希は首を傾げ、不思議そうな顔をする。

「あいつが気にするとは思わなかったんだけどな……」

未成は指を立てた。

「女性は食卓のマナーが気になるってテレビを見た。さくらさんもそうなんだよ」

「ふうん……」

大希が腑に落ちない様子で口を尖らせると共に、今度は未成の携帯が鳴った。覗いた彼は、急に席を立ち、大希に向かって手を合わせた。

「ごめん。僕もちよつと中座する」

当然大希は驚いた。

「は？ お前も？」

「うん。僕も電話は周りに迷惑だと思っから」

それだけ言い残すと、未成は大希が何も言えないうちに入り口へと走っていった。後に残された大希は、頭を押さえてため息をつく。

「何なんだよ、一体……」

未成が外に出ると、さくらはちよつと携帯を閉じたところだった。彼女らしく優しい微笑みを浮かべ、くすりと笑う。

「来たね。未成くん」

未成は戸惑った顔で自分の携帯を振る。さっきのメールはさくらから来たものだったのだ。

「どうしたんですか。僕をいきなり呼び出して、ついでに大希くんには内緒って……」

「まあ、ちよつと仕事関係のお話だからね。……これは未成くんも、あんまり多くの人には知られたくないと思うし」

さくらは胸ポケットから銀縁の伊達眼鏡を取り出し、静かにかけた。彼女が仕事モードに入った時の合図だ。先ほどまでの呑気で陽気な雰囲気は薄れ、静かで鋭い雰囲気が立ち現れる。不敵な笑みを浮かべ、さくらは腕組みをした。

「ねえ。今日は鑑識課のパソコンのセキュリティチェックを行ってたんだけど、未成くん、入り口から一番奥のパソコン使ってるよね」

未成はどきりとした。だが、すぐに心のなかで不安を打ち消す。

大丈夫。痕跡は全て消したはず。

「え、ええ。はい」

彼女はため息をついた。深く、深くため息をついた。失望してい

る、という雰囲気ではないが、やはりどこかがっかりしているようだ。口を尖らせ、少々強い口調で迫る。

「ねえ。パソコンをあんまり私的に使用しないでほしいのはもちろんだけど、何だか変なサイトに繋げてない？」

「へ、変なサイト？」

「うん。セキユリティチェックにクッキーが引つかかったの。それで調べてみたら、コマンドプロンプト画面が出てきて、いきなりパスワード提示を要求されて……ねえ。深くは聞くんもり無いけど、そのサイトって情報流出の可能性、あるの？ ウィニーみたいに」

いつの間にもやら、未成の心臓は早鐘を打っていた。全て消したはずなのに。さくらの視線が、まるで矢のように突き刺さってくる。

表情は柔らかいものだったが、その奥に、伶俐で鋭い光が透けて見えた。下手なことを言ったら墓穴を掘る。未成は慎重になった。

「大丈夫です。捜査情報漏えいなど、あつてはならないことはきちんと理解しています。それだけの矜持は持ちあわせてますから」

つとめて真面目な表情をした未成の瞳を、さくらはじっと覗き込む。未成はつばを呑んだ。気まずい静寂が落ち込んでくる。未成は口が乾いてくるのを感じ、早く離れて欲しいと願った。その願いを汲み取ってくれたのか、さくらはようやく離れてくれた。困ったような微笑を浮かべ、彼女は肩を竦める。

「ま、いかがわしいサイトに繋いでたら失望の一つや二つしたけど、まあ、今回だけは内緒にしといてあげる。……バレたら首飛んじやうかもだけど、友達だし」

さくらは眼鏡を外した。再び呑気モードに戻って、腕をぶらぶらさせたりしながら、彼女は屈託なく笑う。

「一度だけよ？ もう一度こんな事あったら、今度こそ報告するし、パスワードも解析するからね」

「は、はい」

戸惑ったままで未成が頷くと、さくらはにっこり笑って頷き返した。

「そうそう、素直が肝心。じゃ、戻ろっか」

それだけ言うと、さくらはさっさとファミレスのドアを押し開き、中へと引っ込んでしまった。その背中を追いながら、未成は震える唇を噛む。

「どうして、あんなに聡明で、優しいのに……」

未成は頬を伝う涙を拭かなかった。

時計塔広場前の交差点。曇り空の下で、大希はその横断歩道の近くに立っていた。その目の前には小学校低学年くらいだろうか、小さな子ども達が五人ほどいた。にっこり笑いかけた大希は、かつての父が自分たちにそうしてくれたように、子ども達に明るい声で呼びかける。

「はい、青になりましたね。ちゃんと右を見て、左を見て、もう一度右を見てから渡るんですよ！」

「はい！」

子ども達と一緒に、大希は右を見て、左を見て、もう一度右を見る。けれど、もう一度右を見ないで渡っていく子が一人いた。ランドセルの肩紐を持ったまま、すました顔で正面を見て歩いている。それに気がついた大希は、笑顔を一瞬曇らせた。ひとまず青なのでみんなを渡らせ、自分は渡ってしまった子どもを追いかけた。

「ねえ。ちゃんともう一度右を確認しないと駄目だよ？」

大希が呼び止めると、子どもはつまらなそうな顔をして口を尖らす。

「だって。父さんも母さんも、そんな事してないよ」

しゃがみ込み、大希は子どもにも視線を合わせる。確かに、丁寧に左右確認をする大人など中々いない。彼自身も中学生の頃に左右確認を真面目にしていたかという点、疑問である。だが、警察になつてからはしっかりと左右を確かめるようにしていた。交通マナーを指導する立場なのに、自分が守らないでは仕方ない。子どもの肩をポンと叩き、大希は静かに笑いかけた。

「そうかもしれないね。でも、しなくちゃいけないことだから言うんだよ。右から来る車の方がぶつかりやすいから、右はしっかりと確かめないとだめなんだよ」

「ふうん。そうなの？」

あまり興味がない顔をしているのが残念だったが、大希は辛抱強く話しかける。

「そう。事故が起きてからだと遅いんだ。だから、これからはちゃんと確認してね」

「はあい。もう行くね」

子どもは結局つまらなそうな顔をしたままで、よそ見ばかりしている。これ以上は話を聞いてくれなさそうだ。諦め、大希はため息混じりに送り出す。

「そっか。じゃあまたね。気をつけて帰るんだよ」

まだまだ大希は若いつもりだったが、このように冷めた子どもが増えたように最近感じてしまう。やはり時代なのかと悲しい思いに浸りつつ、大希はぼんやりと子ども達の集団に戻っていくその一人の背中を見送っていた。

こんなようにして、大希は学校帰りの小さな子どもたちがやってくる、一緒に横断してやったり、交通ルールを教えてやる、という事をずっと繰り返していた。機動隊というハードな仕事に就いている大希がどうしてこんな事をしているかというと、今日が交通安全強化週間だからだ。違法駐車、スピード違反の取り締まりなども強化するため、署だけでは人手が足りず、手が空きやすい機動隊に白羽の矢が立ったのだ。ときおり寂しい思いをしながらも、大希はいつもとはまた違う充実感をもって仕事をしていた。

そんな時だった。微かだが、大希は広場の方角から悲鳴を聞いた気がした。訝しむような顔で振り向くと、細々と見える人々の動きがやたらと慌ただしい。とても紅葉並木の景觀に浸っている雰囲気ではなかった。それぞれころか、人々はこちらに向かってきているようだ。大希は目を細め、こちらにやってくる人々の表情を窺った。

「何だか怖い顔してるな……」

大希が呟いた通り、人々は何かに恐怖しているような顔をしてい

た。腕をめちやくちやに振り、何かから逃げ惑っているようだ。いよいよ不審に思い、大希はスーツを着た男性にかけ寄せた。

「どうしたんです？ 一体何がありました？」

「どうしたも何も、人が殺されてんだよ！ お前警察だろ？ 何とかしろよ！」

男はほとんど恐慌状態だった。目は飛び出してきそうなほどに見開かれ、今にも殴りかかってきそうな雰囲気もあった。気圧された大希は、帽子を目深にかぶり、まともにその顔を見ないようにする。

「り、了解です」  
「ならさっさと行けよ！」

男はそう吐き捨て、逃げる群衆の中へと戻っていった。それを見送った大希は、踵を返して時計塔を見据える。

「多分、あいつだ……」

無意識のうちに大希は横腹を押さえる。あの夜、自分が一敗地に塗れた男に違いない。大希は一気に走りだした。「あれ」が生きている意味も、「あれ」を殺そうとする意味もよくわからない。しかし、この街を恐怖に陥れるような輩は、是が非でも許すつもりはなかった。大希は素早く携帯を取り出し、剣人に電話をかける。

「はい、どうした？」

運よく剣人はすぐに出てきた。大希の荒い息遣いに気づいたのか、彼は間を置かずに付け足す。

「おい、何かあったのか」

「ああ、あったよ。殺人だ。まだ犯人が暴れてるだろうから、なるべく早く応援に来てくれないか」

電話の向こうで、剣人が息を詰めた。いつにも増して真剣な声色が帰ってくる。

「わかった。すぐに向かう。……この前みたいなヘマはすんなよ」  
「身にしてみてわかってるよ」

それだけ言い残すと、大希は携帯を切って塔の下に急いだ。風に乗って血なまぐさい臭いが流れてくる。灰色の雲が重くのしかかっ



てくるようだ。白い鉄塔が、今日は何やら不気味に見えた。しかし、大希は恐れず駆けていく。今度こそは取り押さえるという決意が、彼の疾走を支えていた。

鉄塔へ近づくとつれ、その下で起きている惨劇が明らかになってきた。二人がすでに倒れ、一人が今まさに男の凶刃に倒れたところだった。大希は思い切り男の顔を睨み、拳銃を抜いて叫んだ。

「そこまでだ！ 大人しくしろ！」

男は血の滴るナイフをぶら下げ、ひどく緩慢な動作で大希と正対した。ボサボサの黒い長髪に切れ長の目。返り血で怪しく光るその黒い服は、軍服のようなシルエツトをしていた。ニヤリと笑った男は、拳銃を取り出し大希に向ける。

「しつこい奴だな。俺の好きにさせるよ」

「好きに？ 人殺しを放っておけるような立場じゃないんだよ。俺は！」

大希の一切揺るがない視線を受け、男は笑顔をひそめた。目を反らし、手の内で銃を弄び始める。大希がその真意を探りかねていると、男は静かに口を開いた。

「なあ。お前には、俺がただの殺人鬼に見えるのか」

大希はうつむいた。言われると、確かに『ただの』殺人鬼には見えないのだ。殺されたのは、皆自分に瓜二つの男。何か意味があるようにしか思えなかった。

「確かに、お前には何らかの意図があるんだろうな。それは俺も認める」

途端に男は冷酷な笑みを浮かべた。一步一步と大希の方へと歩み寄りながら、不自然なほどに落ち着いた口調で話し始める。

「そうだ。思ったよりは話が通じてよかった。なら聞け。俺はこの世界を守るために、こいつらを殺しているんだ」

「何だと？」

大希は眉根にしわを寄せた。

「この世界は停滞し続けている。究極の停滞だ。そこに未来はない。」

ただ無駄に同じ日々を繰り返しているだけだ」

ふと男は笑みを消し、刃のように眼を光らせて大希を睨みつけた。「俺は時間を無駄にするのが大っ嫌いなんだ。だから俺は世界を変える。揺るがす。その変化は、この世界にきつと未来をもたらす……だから俺はこの存在を消し去るんだよ」

男は倒れている死体を蹴りつけた。大希は銃口を持ち上げ、再び男の心臓に的を定める。その握る手に力を込め、ありったけの敵意を込めて男を睨み返した。

「それは、俺に似た人間が、この世界に閉ってるってことか？」

「ああ。時間のロスが少なくて助かるよ」

大希は鼻を鳴らした。人殺しに褒められたところで、ちっとも嬉しくない。

「そうか？ この話自体が時間の無駄だったと俺は思うね。世界がどうか言われたところで、俺のお前を捕まえようという気持ちは変わらないからな」

男は顔に手を当てた。その間から、震えた異様な笑い声が洩れってくる。大希にはもう、目の前の男がまともだとは到底思えなかった。「くくつ。そうかそうか。確かにそうだったなあ？ ならもう話すのは止めだ。もう一度お前に大怪我くれてやる。二度と俺の邪魔ができないようになあ」

蛇が絡み付いてくるような口調に、大希は思わず身震いした。しかし、すぐに父から受け継いだ誇りを取り戻す。姿勢が治り、銃口の僅かな震えも止まり、自然と足の踏ん張りも利き始めた。大希は怒りの表情を消し去り、ただただ使命感を帯びた真っ直ぐな瞳で男を見据える。

「いつか、父さんが言っていた。人殺しの上に築かれた平和は、すぐに壊れるってな。未来も一緒だ。人殺しの上に生まれた未来なんか、すぐに壊れる」

大希の言葉を黙って聞いていた男。彼が言い終わってもしばし黙り続けていたが、突如目を剥き吼えた。

「綺麗事を！」

男は弄んでいた銃を突き出す。その瞬間に大希は撃った。その銃弾は見事に男の銃を捉え、弾き飛ばした。右手にかかった衝撃の大きさに呻き、男は反射的にその手を押さえる。すかさず大希は走りだした。全ては男を捕らえるため。しかし、男も易々とは捕まらな

い。左手に握っていたナイフを持ち替え、袈裟がけに斬りつけた。大希はすんでのところで足を止め、後ろに飛び退きナイフをかわす。「大人しくしろ！」

大希は警棒を腰から引き抜き、男の右手に向かって振り下ろす。当然黙って当たらずがなく、男は右腕を引いてかわした。そこに大希はさらに詰め寄り、警棒で心臓あたりを突いた。男はさらに飛びすさつてかわそうとしたが、それよりも早く大希の警棒が男の胸を捉えた。男は呻き、僅かによるめく。

「お前、この短期間でどうして強くなれた？」

歯を食いしばり、拳をきつく握り締めながら男は大希を睨みつける。警棒をくるりと回し、大希は口の端にわずかな笑みを作る。

「今がしらふなだけだ」

「……ふん」

男は目を見開いて大希を見据え、ナイフを握り直す。一方の大希も左足を引いて半身になり、警棒の先端を男の眉間に持つていく。その佇まいは、やはり剣士だった。今にも飛び出さんばかりの体勢をしている男だったが、大希の放つ無言の圧力を前に中々飛び出すことができない。その圧力をかわそうと、男は右へと足を擦らせる。大希はそれに動きを合わせ、あくまで正対を保ち続ける。

「どうした？ 来ないのか？」

大希は軽く挑発したが、男も真剣だった。ほんの少しの反応も見せず、やはり正対の状態から外れようとするばかりだ。大希も再び黙りこみ、二人は静寂の中、円を描いて動き続けた。

ついに大希が動いた。すり足で一步進み出る。そこからさらにもう一步踏み出すかに見えた時、男も動きだす。一息に飛び出し、そ

の勢いを乗せてナイフを大希の腹めがけて突き出した。

しかし、大希はそれを狙っていたのだ。突き出されたナイフを警棒で外に払い、無防備になった男の右腕を鷲掴みにする。そのまま流れるように男を引き寄せると、大希は警棒を男の胸元に突き付けたのだ。剣道型が染み付いていたからこそできる、鮮やかな動きだった。

自分の動きを手玉に取られ、男は悔しそうに舌打ちした。大希は振りほどかれないよう力を手に込め、警棒を男の胸に押し当てる。

「お前の負けだ。もう観念するんだな」

男は黙り込んで目を閉じていた。その神妙な表情は、ついに年貢の納め時を実感したように見える。大希はしばしその表情を見つめていたのだが、いきなり男は開いていた懐に左手を突っ込んだ。虚を突かれ、大希はわずかに固まってしまった。男はにやりと笑い、何かを掴んだ左手を引き抜いた。

「何だこれ？」

大希はそう口走った。男が懐から取り出したのは、銃でもなければナイフでもなく、化学の教科書だった。

「これを受け取れ。そして読め。きつとお前の信じていた世界が引っくり返るぞ」

単なる脅しには聞こえなかった。見た瞬間から、大希はその教科書に何かを感じたのだ。男の手から離れ、教科書は地に落ちる。大希はしばらくの間それから目を離すことができなかった。

「大希！」

遠くから剣人の声が聞こえてくる。大希は大人しくなった男に手錠をかけ、自分は落ちた教科書を拾い上げた。その時、男はふと思い出したように声を上げた。

「言い忘れてた。俺の名前を、俺を捕まえられた記念に教えてやる。

工藤征尚だ」

「……何が記念だ。黙って、自分のしたことをゆっくり考えるんだな」

大希は男を尻目に向け、殺された命を思って目を閉じた。

## 13th Period 事件後

翌日の夜八時、剣人は健のいる部屋を訪れた。先刻『一緒に飲まないか』ともちかけられたのだ。呼び鈴を押すと、まもなく健がドアを開け、そつとその顔を出した。彼らしくない、静かな微笑みを浮かべていた。

「お、来たか。じゃあ入れよ」

いつもと違って振る舞いが大人しくなっている健を見て、剣人は思わず笑ってしまう。靴まで丁寧に揃えて、本当にしおれた様子だ。「何だよ。やっぱり昨日の事引きずってたのか」

靴を脱ぎ捨て、剣人は健の後に従い大股で居間に足を踏み入れる。健はゆっくりとちゃぶ台の前に座り、チューハイの缶を開けて頷く。ぐいと缶を傾けると、健は深々とため息をついてしまった。

「引きずるに決まってるんだろ。大希の言うことが本当だったなんて……」

連続殺人犯『工藤征尚』を捕まえた時、健と剣人はうつ伏せに倒れている死体を仰向けに起こした。目の当たりにしたのは、隣で本を見つめている大希と寸分違わない顔立ちだった。健は言葉を失い、もう一人倒れている死体に駆け寄ってみた。そして、その死体も大希と同じ顔をしていることをしつかり確認させられたのだ。開いた口が塞がらない健に、大希は一言こう言った。

「俺は夢なんか見てないぞ」

「ああ……かんっぜんに冷たい目をしてた。あれは！俺、どうして大希の言う事信じてやれなかったんだろ……」

健は頭をかきむしり、上ずった調子で呻いた。とにかく落ち込んでいる様子をどこか楽しそうな表情で見つめ、剣人もチューハイを開ける。

「まあ、お前はそういうファンタジー全開な話題に関しては頭固いしな。大希だって、元々信じてもらえらと思つてないだろ」

剣人は健の苦悩など何も考えていない口調だった。つれない友人に苛立ち、健はちやぶ台を手のひらで何度も叩く。

「うるせえや。そういう事が問題じゃないんだよ。俺達四人は、竜将さんの遺志を継ぐつて決めてから、ずっと親友としてやってきたじゃないか。それなのに、俺は大希の言うことを信じようとしなかつたんだ。自分が情けねえよ、俺」

最早酔いが回ってきたのか、健はいきなりちやぶ台に突つ伏してぐずぐずと鼻をすすり始めた。剣人は目を細めてその様子を眺める。小学生時代の健は、気弱で泣き虫という扱だったが、中学以降の健は熱血で涙もろいという扱いに変わった。結局泣きやすいには違いない。だからこそ、健の涙は変化の象徴なのだ。昔を思い出しながら、剣人は健の肩を叩いてやった。

「まあまあ。誰だってそういう事はあるつて。『これからどうするか考える』つて、お前よく言つたじゃないか」

「それ、全然かつこよくないからな。夏休みの宿題がたくさん残つてて、俺がやばいんじゃないかって剣人やさくらが言うから、苦しくて『過ぎた日々を考えたつてしょうがない、これからどうするか考える』つて言つただけだからな」

目を赤くして起き上がり、健は剣人の鼻先に人差し指を突きつけた。剣人はその人差し指を掴むと、健が痛がるのも気にせず勢い良く天井に向けた。

「健。小さいことでも落ち込むつて。話を聞いてもらえなかつたくらいで大希が怒るか？ 全然大丈夫だつて。ぐだぐだ引きずつてないで、『これからどうするか』考えろよ」

健は大げさに痛がりながら剣人を睨みつけた。その目の前で、剣人は腕組みをして笑っている。何か言つてやろうと思つていた健だったが、彼の自信たつぷりな笑みを見ているうちに忘れてしまった。静かに缶を持ち、健は小さな声で呟いた。

「なあ、今から大希の言うことを信じてやっても大丈夫かな」  
「何が？」

何の気もなさそうに台所へ赴き、剣人は冷蔵庫を漁り始めた。そんな様子を見て首を振り、健は缶を握りしめて必死に尋ねる。

「親友として、大希の助けにやってなれるかな。俺、何だかこの事件には裏がある気がしてきたんだよ」

チーズを取り出してきた剣人は、鼻を鳴らしてどつかりと腰を下ろした。そして健の質問には答えなのまま、床に置かれていたりモコンに手を伸ばす。健は口を尖らせる。

「なあ、人の話聞いてくれよ」

剣人は首を鳴らしながらチャンネルを回していく。ニュースを見定めながら、彼はようやく口を開いた。

「聞いてるさ。ただ、答えてやるまでも無いかと思うんだよな。健。それは自分自身で答えが出るんじゃないのか？」

健は黙り込み、握った缶に目を落とす。中々言葉を発しないから、剣人は斜に構えるのを止め、ようやく健に向き合うことにした。

「お前にだって色々あるのはわかるさ。今まで信じてた世界が、きつと昨日崩れたんだろ？ でもな、お前だってわかってるじゃないか。今一番大変なの、きつと大希だと思うぜ。殺されたのが、自分とおんなじ顔の四人ときたら、俺達以上に何がなんだかわからないはずだ。だろ？」

「ああ。そんな事はわかってるよ」

缶が照り返す光を見つめながら、健はぼそぼそ呟いた。剣人はため息をつき、彼の肩にゆつくりと手を置いた。

「なら、いいだろ。これからあいつにしてやることはたくさんあるはずだ。こんな言葉があるぞ。『後ろを向いている暇があったら前に進め』って言葉が」

健は顔を上げる。剣人は満面の笑みを浮かべ、彼の不安そうな顔に向かってゆつくりと頷いた。健は涙を拭いた。頬を二回叩き、歯を見せてにやっと笑う。彼らしい、憂いの無い笑顔だった。



「いい言葉だな、それ」  
「お前の受け売りだよ」

その頃の大希はというと、例の小さな居酒屋を未成と共に訪れていた。とはいっても、口にするのは烏龍茶で、テーブルにあるのはおつまみではなく教科書だ。店の雰囲気こそぐわぬ真剣な表情を浮かべ、未成は大希が差し出した化学の教科書を見つめる。声を潜めて尋ねた。

「これを、大希は連続殺人犯から貰ったのかい？」

大希は頷いた。今でも、これを出した時の男の表情はよく覚えていた。後顧の憂いを断ち切ったような、そんな満面の笑みを浮かべていた。

「ああ。『これを読んだら世界が変わるぞ』、なんて言われてな。

まあ、この事件には色々怪しいこともあったし、もしかしたら、と思っただ。そして、ついでに未成にも見てもらおうと思っただよ。未成は目を閉じてうつつむいた。眉根にしわが寄って、少し苦しそうな表情をしている。ついでに低く唸り始め、一向に話さだそうとしない。大希は少し首を傾げ、未成の前で手を振った。

「おい、どうした？　なんか言ってくれよ」

「え？　ああ。うん。どうして僕に？」

はっとなった未成は、すぐに笑顔を取り繕った。ぱっとしない未成の反応に、大希は顔を少ししかめてしまう。

「何だ？　ぼーっとして。未成はこういう系の話、好きなんだろう？　この前家に入れてくれたけど、たくさん化学に関する本があったじゃないか。丁寧に教科書まで買ってさ」

「うん。まあね……教科書はわかりやすいし」

大希の言う通りだった。未成が暮らしている狭いアパートの一室は、本棚が一つ化学にまつわる本で埋まっていた。大希はその知識を見込んで、自分は履修しなかった『化学ⅠⅡ』の教科書を一緒に見てもらおうと思ったのだった。教科書を持ち上げ、大希は表紙を

未成に見せつける。

「さ、見てみようぜ？」

うつむいたり、こめかみを搔いたり、どこか気乗りしない雰囲気を見せつつも、未成はようやく頷いた。

「うん。そうしようか」

未成は大希から教科書を受け取ると、震える手で教科書の表紙をめくった。大体化学の教科書の裏には原子の周期表が乗っているもので、この教科書も例外ではなかった。ただ、上からのぞき込んでいた大希は一つおかしい点に気がついた。

「あれ？ 原子の周期表って、こんなじゃないよな」

大希は訝しんで、周期表を指でなぞっていく。本来、周期表はラントノイド、アクチノイドという元素群が独立して二列並べられている。しかし、この周期表は、さらに一列独立しているのだ。かと言って、何か名前がついているわけでもない。ただ「ウンビなんたら」が並べられているだけだ。大希は首を傾げた。

「何でこんなに似た名前ばかりなんだ？ 名前考えるの面倒くさかったのか」

未成は烏龍茶を呷り、重たい動作で首を振った。

「そういうわけじゃないんだ。それは未発見元素。『ウン』とか『ビ』っていうのは、『一』とか『二』とかに対応してるんだ。たとえば、『ウンビクアジウム』って、そこにあるじゃないか。それは単に『一二四番』って意味なんだよ」

「へえ。やっぱり詳しいな。未成を連れてきてよかったよ」

未成は照れくさそうに笑い、それから再び伏し目がちにして頭を掻いた。

「ちよつと勉強すればすぐにわかるよ」

「ふうん。じゃあ、この百二十六番、『ヴィンソンマシフィウム』

は、発見された元素ってことか。なっがい名前だなあ」

「ああ。そういう事になるね」

未成が微笑むと、大希は納得したように何度も頷き、列の末端に

ある最後の元素を指差した。

「じゃあ、これもか。この『ギャラクシウム』ってやつも」

大希が指差したのは、百三十七番目の元素だった。一瞬未成の笑顔が凍りつく。すぐに溶かして、未成は言葉にならない声を上げながら頷いた。

すると、大希は唸りながら首を傾げた。ふと、一ヶ月辺り前の二ユースが蘇ったのだ。その疑問のままに大希は呟く。

「それにしても、ニユースでやってたけど、一三七番の元素って、一ヶ月前に開発研究が始まったばかりだよな。なんでこの教科書には載ってるんだ？」

心底不思議そうに『Gx』の文字を大希は見つめる。未成はどこか疲れたような笑顔を浮かべ、気の抜けた声色で応じた。

「そうだね。どうしてだろ」

大希はもう一枚ページをめくり、目次に目を通す。教科書の目次になどほとんど目を通したことのなかった大希は新鮮な気分だったが、その気分を打ち消し、驚愕させられてしまうような一文が目飛び込んできた。

「ギャラクシウムの……性質？ 開発研究が始まったばかりなのに、性質なんかわかるのか？ 一五〇ページ……」

大希はブツブツ呟きながらページをめくっていく。一方未成は関節が白く浮き出すほどコップをきつく握りながらその手の動きを見開いた目で追っていた。そんな様子には全くもって気付かず、大希は小さな声で、一五〇ページの文を読み上げ始めた。

「ギャラクシウムは、現在判明している最後の元素である。人工元素は寿命の短いものがほとんどだが、ギャラクシウムは安定している。それは、このギャラクシウムが時空間に歪みを作ることから自ら安定な状態を作り出し、核分裂をしないからである。また、その強力なエネルギーを我々は利用し、枯渇した化石燃料に変わるエネルギーの筆頭となっている……なんだこれ」

大希は言葉を失いかけた。この教科書が根本的におかしいことに

気がついた。この教科書は、すでに百三十七番元素が使われているような扱いになっている。しかも、化石燃料は枯渇したというおまけの設定付きだ。未成は蒼白な顔で首を振り、教科書に手を伸ばそうとした。

「なあ、その本なにかおかしいよ。もう見るのを止めないかい」

「いや、とりあえず最後まで読ませてくれ」

未成の手をかわし、大希は最後の一文を読んだ。そして、彼も目を見開き、口を震わせた。

「また、その性質を利用したタイムマシンの計画も持ち上がったものの、失敗に終わっている……だって？」

いくらなんでもおかしい。大希は心にそう叫ばれ、巻末の発行日時を確かめた。

「……二一五年……だって。おいおい」

大希はしかめっ面で本を裏向きに閉じた。鼻を鳴らして首を振る。「ちよつと世界が変わる気がしたけど、さすがに眉唾ものだな。手の込んだ作り物にも見える」

未成は顔を上げた。きよとん、としたような表情で、しきりに瞬きしている。

「信じないのかい？」

「まあ、ここまで手の込んだ本の出処がわからないし、ここまでやる手間を考えた時、偽物とするのも怪しいさ。でも、俺は健に鍛えられてるから、自分自身でも疑ってかかっちゃう部分はあるんだよな。俺の偽者みたいなやつだって、最初はどうにも納得いかなかったし……で、結論としては、これは手の込んだ偽物だと思うんだ」

腕組みしながら教科書をぼんぼんと叩いている大希に、未成は呆然としたままで尋ねた。すると、大希はにやりとしながら、空中で本をばらばらめくるような仕草をしてみせた。

「本当に未来のものだったら、あれだ。『ユビキタス』になってるだろ。電子書籍。今も実験的に使われている所があるっていうし、

今から百年以上も後だったら……もしかしたら紙の本はほとんど廃れていたっておかしくない。と、俺は思う」

未成はため息をついた。どこかほっとしたようで、彼の表情は柔らくなっていた。

「そう単純なものじゃないと思うけど……まあ、そうかもね」

「うん？ 何か書いてあるな……」

大希は教科書の隅にある文字に気がついた。記名欄に、『K・M』と書かれていたのだ。大希がそれに気がついた途端、未成は大希がその教科書を取ろうとする前に取り上げた。

「ね、ねえ。ちよつとこれを僕に預からせてもらえないかな」

「え、あ？ ああ……まあ、別にいいけど」

大希が目を瞬かせると、未成はいきなり時計を見た。大げさに驚いてみせ、未成はポケットから財布を取り出し、千円札を一枚乱暴に取り出した。

「あ、こんな時間だ。明日少し忙しくなるから、僕はこれで失礼するよ。ごめんね。会計、これで払っておいて」

「へ？ あ、おい。ちよつと待ってっ」

大希の言葉は無視された。未成は靴を突っかけるようにして履くと、そのまま店の主人に頭を下げ、慌ただしくその場を後にしてしまった。取り残された大希は、主人にちらりと目を合わせる。

「急に忙しそうになりましたねえ……」

「ええ。はい……」

二人は、開けっ放しの戸を見つめ続けていた。

## 14th Period 年の瀬の足音は強く

交通安全強化週間も終わった。明日は非番、大希や健はご当地番組を見ながらのんびりと過ごしていた。

『はい、こちらはナデシコの地下食品売り場にやってきております。現在ここではハロウィンセールが行われておりまして、たくさんのお買い物客で賑わっています……』

橙色に彩られた店舗の中を、リポーターは様々にコメントを口にしながら練り歩いていく。家族やカップル、色々な人々が店に集まり、笑顔で品物を見つめている。二〇一二年もあと二ヶ月だが、久宇慈の街並みは今日も平和だった。大希はサラミをつまみに発泡酒を空けながら呷く。

「知ってるか健。今年は二〇一二年だつて。平和だよな」

健はうつんと唸りながら天井を見上げた。二〇一二年といえば話題は一つ。マヤ暦の終了、そして世界の存亡だ。だが、リアリストの傾向がある健にしてみれば、やはり馬鹿らしい。サラミを一枚一枚つまんで口に運びながら、欠伸混じりに首を振る。

「二〇一二年つて、あれだろ？ 地殻大変動が起きて、地球が滅亡するつてやつだろ？ ないない。世界がそう簡単に変わつてたまるかよ」

大希は健の横顔を見つめた。すました顔をして、つまらなそうな目でテレビを見つめている。そのつつけんどんな口調に、大希は何かに閃いた。

「ん？ 健。もしかして、映画見た？ しかもあの時の彼女と」  
にやにやしている大希と目を合わせるのは気分が良くなかった。

健は目の遣りどころをテレビに求め、そのまま頷いた。

「ああ。見たよ。確かに迫力はあったけど、何だか心に迫るものを感じられなくてさ……あいつに『こんな風になっても、守ってくれる？』つて尋ねられて、『こんな事起きないから大丈夫』つて言っ

ちまつて……まあ、それつきりさ」

「ははあん。お前らしい『最期』だな」

「うるせえや。お前はとうなんだよ」

すっかり健をからかってやるつもりになっていた大希に、健がお返しとばかりに噛み付いた。すると、今度は大希がつっけんどんな口調で話す番となつてしまった。

「俺は……あれだ。仮面ライダーが最終回でさ、よかつたなあ、つて言つた瞬間に引かれた。『ガキかお前は』、だつてさ」

頬を赤くしながら言い終えた途端、健はちやぶ台を何度も叩き、甲高い声を上げて笑い始めた。

「ハハハハッ！ ああ、そうかそうだな。お前にはそういう弱点があつたな！ そうだよなあ。二十歳過ぎても仮面ライダーが好きつて、そりゃあバカにもされるかもな」

大希は缶を一気に傾け、ちやぶ台を強く叩いた。

「何だよ！ いいだろ？ 俺はいつでも童心を忘れないつもりだからな」

酒の入つた健は、腹を抱えたまま中々笑い終わらない。結局落ちて着いたのは、駅地下のレポートが終了した頃だった。

「はあ、腹痛くなつちまつた。まあ、お互い様だな。女探しには難儀しそうだ」

「ああ。俺は特撮趣味に理解ある人じゃないと。……これからは初めて話した時から話題を振っていくか……」

新しく始まつたニュースを見つめ、健は腕組みした。

「俺は、ちゃんとフィクションと現実を区別してくれる人がいい。あんまりぶつ飛んだ話されても、俺困つちまうし」

「現実的すぎるのも、困りものだと思つけどなあ……」

大希が首を傾げると、健はわかつていないとでも言つかのようによ首を振り、ちやぶ台越しに詰め寄つた。

「そつという意味じゃないつて。たとえば、幸せな家庭を築くとか、どんな暮らしがしたいとか、そういう夢はいいんだよ。大好きさ。」

困るのは、もしも魔法が使えたらとか、『もしも』の話ばかりしてくる奴。もしドラえもんがいたらとか、考えたって仕方ないじゃないか」

大きな手振りを交え、大げさに話す健を見て大希は笑ってしまった。

「まあまあ。お互いががんばろうぜ」

缶の中身を飲み干し、健は小さく頷いた。

「おう」

その頃、剣人はさくらの住むマンションを訪れ、彼女と一緒に秋の夜長を過ごしているところだった。彼女は映画が、特にファンタジーの映画が好きだ。だから、自宅デートなんかをする時には、決まってDVDを鑑賞するのが常だった。そして今日見たのは、ファンタジー映画の金字塔、『ロード・オブ・ザ・リング』だった。

「はあ、やっぱり最高。これは『ホビット』も見なきゃだめね」

さくらのすっかり満足げな表情に、剣人は思わず顔をほころばせた。もちろん映画も楽しかったが、このあどけなさの残る純粋な笑顔も、剣人にとっては楽しみだった。

「そうだな。今年だっけ？」

「そうそう。今から読み直して予習しようかなあ」

剣人は頷きで応えてやり、適当にチャンネルを合わせる。ニュースが入っていて、アナウンサーの淡々とした声が映像と共に流されていた。普段ならば、さくらが映画にまつわる蘊蓄うんちくを一つや二つ披露するところなのだが、この映画を見たのは三回目、すでに話し切っていた。

二人は黙りこみ、寄り添ったままでニュースを見つめていた。お互い、この沈黙を重苦しいとは考えない。間を持たせるために、適当なことを話そうとか、野暮よぼろつたいことも一切考えない。言葉 exchanged わさなくても、お互い繋がっていることくらい承知なのだ。証拠に、二人は安らかな表情でテレビを見つめていた。



アナウンサーがいた画面が切り替わり、若い女優が映った。彼女は何かのインタビューに笑顔で応じている。さくらはその女優を指差した。

「剣人、女優の伊坂美代いさか みよが結婚だって。一般人男性と」

さくらは膝を抱え、そつと剣人に肩を預けた。その柔らかい感触を感じ取り、剣人は静かに目を閉じた。

「それはつまり、いつもの話か？」

「そう。一月前、大希の前で剣人も言ったじゃん。そろそろ結婚考えてもいい頃か、ってね」

「まあな。確かにそうだな……」

別に独身でいたい理由もない。働き始めた直後から生活費を極力切り詰め、さくらと一緒に暮らしていくための資金も貯めている。色々と考えているうちに、剣人は結局自分次第なのだという事に気がついた。

「ああ。そうだな。そろそろ籍入れたり、式挙げたりしてもいい頃だな」

剣人は頷き、そつとさくらの肩に手を回した。隣で小さく丸まっていた彼女は、猫がいつもそうするように、気持ちよさそうに目を閉じ、そつと剣人にすり寄った。

「そつか。ついにその気になってくれたかあ。本当に待ってたんだからねえ？」

さくらは急に体育座りを解いた。ジーンズが似合うすらりと伸びた足を投げ出すと、しなやかな腕を伸ばして剣人の首筋に絡ませていく。そつと顔を近づけて、彼の耳元でそつと囁いた。

「ねえ。今日は私の家に泊まって行かない？ 私たちの家庭づくりの計画、じっくり話し合おうよ……」

彼女の声色が急に熱っぽく、そして艶ちやっぽくなった。剣人は生唾を飲み込み、さくらの表情を食い入るように見つめた。映画に目を輝かせていた、少女とも見紛う笑顔は消えていた。代わりにあったのは、愛を求める、妖艶さを秘めた女の顔だった。剣人は目を泳が

せ、ポケットから携帯を取り出し、時刻を確かめた。

「うーん……どうしたもんかな」

「いいじゃない剣人。最近ご無沙汰なんだし……どーせ明日は休みなんでしょ？ 知ってるんだから」

「そうだなあ。確かにさくらの言う通りだしなあ」

剣人は頬を掻きながら、目をさらに泳がせてみせる。さくらは一瞬口を尖らせた。しかし、すぐにとろけた視線を送り、さらに体を密着させた。

「焦れたいなあ。女にねだらせないでよ……」

さくらの手が剣人の頬に触れた時、剣人はふとため息をついた。

さくらの肩に載っていた手を、そっと腰の方へと回していく。

「今日はさくらの言う通りにするか。たまには完徹も悪くないな」

「何だあ。渋ってた割には乗り気じゃない？」

剣人はさくらの問いかけに口付けで応えると、歯を剥き出し獣のような笑みを見せた。

「ご無沙汰なのは俺も同じだ」

さくらは剣人の表情を見て愉悦を覚えながら、しなを作って微笑む。

「剣人。私、新婚旅行はパリがいいなあ。ねえ、どう？」

「そうだな。お洒落なさくらにはぴったり……か、も」

剣人はちらりとテレビの方に目を向け、そして固まった。さくらは再びキスを交わすつもりが、すっかり当てが外れてしまった。女の子の顔に戻ったさくらは、頬をぷくりと膨らませて剣人の横っ面を指で突っついた。

「ねえ。ムードが壊れるんだけど」

さくらが怒ったように語気を強めても、剣人は一向にテレビから目を離そうとしなかった。消しておけばよかったとさくらが後悔すると、ようやく剣人は静かに声を絞り出した。

「悪い。さくら、やっぱり明日の夜早いうちにしないか？ こんなもん見ちまったら……」

剣人の様子は明らかにおかしかった。さくらは顔をしかめ、テレビを半ば睨むように見た。見て、さくらは驚きのあまり色々な文句が飛んでいってしまった。

「情報が入ってまいりました。パリ直下を震源とした地震のマグニチュードは7.0を記録し、停電で都市機能が停止し、現在パリは混乱状態に陥っています。また住宅も多数倒壊し、現在被害状況は確認できない状況です……」

そんな言葉と共に、テレビには被災してひび割れたパリの道路、未曾有の大地震に耐え切れず、無残に崩れてしまった町並みが映される。また、次の瞬間には、今にも崩れそうな凱旋門もアップで映し出されていた。

「嘘……こんな事って有り得るの？」

さくらはすっかりこの事態に戸惑っているようだった。剣人は唸って頭を掻いた。

「現実に、こうして起きているとしか言いようがない……」

それきり二人は言葉を失い、茫然と混迷を極めるパリの様子を眺めていた。

華の都の混乱をテレビ越しに眺めつつ、未成は教科書を裏向きに閉じた。そこには、細い文字で『K・M』と記されている。未成はその文字とテレビを交互に見つめ、そつと目頭を押さえた。

「何が、世界が変わる、なのさ。全然変わらないじゃないか……」

未成は目を閉じる。クラクションや怒号が強く聞こえ、まるでその現場にいるようだ。

「こちらはパリ市街地です！ 現在交通機関が麻痺し、何とか帰宅しようとする人々で大混乱が巻き起こっております！」

「ただ今凱旋門の上空の映像が届きました。右側が大きくひび割れ、再び余震が起きれば崩落も免れない状況です」

彫像のように動かなくなっていた未成は、急に頬を叩いて立ち上がった。

「こんな事してる場合じゃない。僕にはやらなきゃならないことが……」

未成は教科書を取り、きつく握りしめた。

翌日。来栖未成は、留置場の接見室にいた。目的はあの男だ。首筋を搔いたり、手元に視線を落としたりしながら待ち構えていると、看守に連れられ工藤征尚は現れた。相変わらず暗い笑顔で、未成の前にすんと軽い調子で座り込んだ。その目を一睨みすると、未成は二人の看守に尋ねた。

「すみません。五分だけでいいです。一瞬この場を外してもらえませんか」

「何故です？ 私どもに聞かれて困るようなことはあるんですか？」未成は口をつぐんで考え込んだ。困る、といえば困るし、困らないといえれば困らないかもしれない。聞かれないに越したことはないが、怪しまれるのも嫌な話だと、未成は考えを改めた。

「いえ。やっぱりそちらの裁量にお任せします」

「ならばこの場にいることにします。一応規則ですから、従っておいた方が、後々面倒が起きないので」

「了解しました」

未成はため息をついた。折れた時点で予想はついていたが、彼はやはり気難しい顔をしていた。腕組みをして足を組み、ふてぶてしい態度で征尚は未成のしかめっ面を見据える。

「何だ。俺に話があるならさっさと話せよ。暇じゃないんだ。俺も看守も」

未成は征尚の馬鹿にしたような笑みを一瞥し、鋭い口調で切り返した。

「あんたが看守さんの心配までする必要はない。黙って僕の質問に答えればいいんだ」

征尚は口笛を吹いた。眉を持ち上げ、小さな拍手まで始める。

「なるほど。人畜無害そうな顔して、そういう口を利くだけの度胸

はあるのか」

「黙れ」

未成は低い声で迫ると、懐から例の教科書を取り出した。眠たそうにあくびをしている征尚に白い目を向け、未成はさらに抑えた声を出す。

「あなた、一体誰なんだ。誰の命令を受けた？」

征尚はあくびを噛み殺し、首を回す。未成の問い詰めなど、全く意にも介しないという様子だ。頼杖ついて、どこまでも面倒そうな様子で鼻を鳴らす。

「俺は他人から命令を受けるような立場にない。そうだなあ。強いて言うなら、俺は提案して、そのまま頼まれたんだよ」

「頼まれた？ まさか。『マザー』に？」

未成は蚊の鳴くような声で呟いた。目は見開かれ、その表情は固まっていた。戸惑いを隠し切れない様子の未成を見つめ、急に征尚は笑い声を洩らした。その表情からは、全く反省の色は窺えなかった。それどころか、自分が今置かれた現状さえ滑稽に思っているように見える。

「そうだ。全ては世界を変えるためにしたことだ。むしろ褒めてもらいたいもんだなあ」

未成は机を叩いた。たとえ見てくれは優男でも、その中には警察らしい正義感がある。釣り上がった目、食いしばった口元がそれを証明していた。

「ふざけるな。世界を変える？ たとえそんな事のためでも、人を殺していい理由になるもんか！」

勢い良く立ち上がり、未成は呻き、下を見つめた。

「お前がどれだけのことを知ってる？ 人が一人や二人死んだって世界は変わらないんだよ！ 全く変わってないじゃないか！」

ふと顔を上げたとき、アクリル板越しに征尚の拳が飛んできた。

鋭く弾けるような音が部屋いっぱいに響き渡る。あまりの気迫に未成は思わず尻込みしてしまった。

「違う。お前がいつまでもそうだから世界は変わらない。世界はいつでも決断だ。思い切らなきゃ世界はまるで動かない。気づいてないのか」

雷に撃たれたような顔をして、未成は硬直した。唇をわななかせ、震える声でうわ言のように呟く。

「どうしてそれを。どうして……」

征尚はアクリル板にぎりぎりまで顔を近づけ、恐れとも戸惑いともつかない未成の表情を見つめて歪んだ笑みを浮かべた。

「俺は全てを知ってるんだよ」

未成はすっかり気圧された表情で征尚の顔を見ていた。最初の威勢はどこかへと消え、今にも膝を折って崩れ落ちそうである。すっかり血の気を失い、首を振りながら、一步、また一步と後ずさりを始めた。さも愉快そうにその様子を征尚は見つめ、腕時計を天井にかざすようにして見つめた。

「まさか。どうして僕の事を……」

「後、十秒だな」

はっとして、未成は自分の腕時計に目を落とす。部屋の隅に立つ看守が、二人の間に行われる不可思議なやり取りに首を傾げた、まさにその時だった。

部屋全体が突き上げられたような感触の後、いきなり横に揺すぶられた。天井の電球が明滅する。未成が立っていた椅子が倒れる。未成も尻餅をついてしまって、中々立ち上がることができない。彼は這々の体で征尚と自分を分かつ壁に身を寄せた。看守二人も、何もないこの場所では身を守るものが用意できず、ひどく心細そうな顔で壁に引っ付いている。そんな様子とは対照的に、椅子に深く腰掛けたまま、征尚は欠伸を繰り返す。

「おいおい。悪いようにはならねえだろうに……」

数十秒ほどして、静かに揺れは収まった。終わってみれば、結局椅子が倒れたくらいの出来事しか起きていなかった。溢れた冷や汗を拭いながら、壁に背を付けて座っていた看守二人は立ち上がった。

征尚を連れてきた看守は、再び彼を拘束し、未成の側に立っていた看守は戸を開ける。

「すまないが、面会はこれで終わりだ。状況を把握しないとならぬいから、付き合っている時間がない」

「え、ええ。そうですよね」

未成はズボンに付いた埃を払い、看守の後に従って部屋を後にしようとする。その時、ふと反対側を見ると、征尚と目が合った。

「見てろ。世界はこれから変わっていく。それをどうするかはお前が考えるんだな」

ため息をつき、未成はすっかりやつれた様子で、征尚の自信に満ち溢れた瞳から目を反らした。

「あんたは何なんだ。工藤征尚……」

「俺はただのスタートキーだ。世界の変化はこれから加速されるぞ。振り落とされるなよ？」

未成は答えられなかった。肩を落とし、まだ地震に揺られ続けているような足取りで接見室を後にした。ドアを閉めた看守は、やれやれと肩をすくめ、同情の眼差しを未成に送った。

「どうやら、まともな話はできなかったようですね。ずっとあんな調子なんだそうです。精神鑑定が必要かも知れませんが、いやいや、困ったものです」

看守は同意を求めるとな視線を送ってきた。未成は教科書を取り出し、その表紙を見つめる。原子核を中心に、百以上はある電子が飛び回っているその絵。未成は静かに目を伏せた。

「ええ。そうですよね」

その頃、大希は健と共に散らばった本や食器を片付けていた。速報によれば震度は四。おんぼろ官舎もガラスを激しく鳴かせながら耐えたが、棚の中身まではどうにもそうはいかなかった。元々粗野な男所帯、本のしまい方も、食器のしまい方も雑だったのだ。

「あーあ。さくらが言った通りにしとけば、こんなに皿を無駄にし



なくてすんだんだよ」

本を棚に突っ込みながら、健はうんざりした調子で呟く。前に四人でこの部屋に集まった時、さくらが耐震対策だの何だのと口うるさく大希達に『指導』したのだ。棚や冷蔵庫のつかい棒にはそれが生かされているが、あと一歩意識が足りなかったようだ。掃除機をかけながら、大希はため息をついた。

「俺たちはまだこんなもんですむから良かったさ。フランスなんてぼろぼろじゃないか。もともと地震に強い家じゃないし……」

「まあ、そもそも強くある必要なんてないしな」

本をちゃぶ台において、健はふと思いついたように呟いた。その目には、無残に崩れ去ったパリの街並みを黙々と片付ける重機の映像が映っていた。掃除機の電源を切り、大希は腕を組んだ。

「そうだよな。日本と違って、パリはほとんど地震が起きないはずなのに」

健は大希の方を振り向いた。唇を噛みしめてうつむき、何か言うのを躊躇っているように見えた。だが、健は首を強く振り、頬を何度か叩いて、ついに顔を上げた。

「なあ、やっぱりおかしいと思わないか。去年や今年を見たら、地震がなんか多い気がするんだ。去年は大変だったし、その前にニューヨークでも地震が起きてる。ついでにトルコでも地震が起きたし、ほとんど起きないと思われてたニューヨークも、小さいけどあった。極めつけがパリだ。起こりっこないところで地震が起きるなんて、絶対おかしい。……ほんとにこんな事認めたくないんだけど、説明のつかない変化が、この世界に起きてるような気がしてきたんだ」

大希は健の思いつめた表情を見つめた。そして目を閉じると、何故だか自分の偽者が脳裏をよぎってきた。ひどく個人的だが、不可思議な現象といえばこの事だっけそうだな。あの存在は、一体どこから現れたのか。大希には予想もつかなかった。

「俺もそう思う。……二〇一二年、本当になにか起きるのかもな」

大希は目を細くして、窓の向こうに見える時計塔を見つめていた。

久宇慈の時計塔は、相変わらず同じ時を刻み続けて、都市が今日も平凡平和なことを周囲に教えている。未成はその足元に立ち、すっかり塞いだ表情で塔の文字盤あたりを見つめていた。目を閉じると、瞼の裏側にとある姿が過ぎる。自分の運命を、世界の運命を縛るその姿が。深々とため息をついた未成は、腕時計のカレンダーに目を下ろし、固く拳を握りしめた。

『違う。お前がいつまでもそうだから世界は変わらない。世界はいつでも決断だ。思い切らなきゃ世界はまるで動かない』

目を赤くして、未成は時計塔を睨みつけた。

「そんな事、もうずっとわかってるんだよ……でも、僕は弱いんだ。とても弱い……」

世界の運命は、刻一刻と動き始めようとしていた。

「走れ！ もつと早くだ！」

スピーカーから井上中隊長の音が響く。その声に応じて、大希、健、剣人の三人はさらに蹴り出す足の力を強めた。かなり厳しい。集団警備の訓練で、三人はフル装備なのだ。透明なシールドを左手に、銀色の警棒を右手に携え、剣道の防具にも並ぶ重さの防弾チョッキを身にまとっているのだ。並々ならぬ訓練をしていなければ、とても全力疾走などできないだろう。目的地には白線が引かれ、揃った者から盾を構え、前方を威嚇するように警棒を振り上げる。大希もすぐに辿り着き、同じように構えた。すぐ後に辿りついた健と剣人は、大希の背を支えるように陣を組む。

こうして、七十人の機動隊員は密集陣形を組み、デモや暴動の突撃に対抗するのだ。その行動には迅速さが求められる。事件は待つてくれない。それが、第二中隊長である井上勝がいつも口酸っぱくして言い続けていることであつた。

笛がなり、隊員達は陣を解いた。それぞれ軽い私語をしながら小休止する中、盾を地面に立て、大希は警棒を腰に収めた。それから、こちらに向かつて悠然と歩いてくる井上の顔を見た。誰が見ても、厳しい鉄仮面に見えるその表情だが、大希はそこにほんの少しの緩みを感じ取つた。

「集合！」

「はい！」

井上の声で隊員はすぐに隊列を整える。彼の厳しい訓練の賜物だつた。その様子を見て、井上は頷いた。

「よし。今日は中々満足できる結果だつた。これから一時間の休憩を与えるから、次の訓練も精力的に臨め！ いいな！」

「了解！」

「じゃあ、解散だ」

場の空気が一気に緩んだ。いつもは僅かな乱れも見逃さない井上からの説教があるのだが、今日は無かったことも大きかった。大希もきよんとした。今日に限って、なぜ井上は怒らなかったのだろう。数度瞬きすると、どこかへ立ち去ろうとしている井上の背中を追いかけた。

「井上さん！」

「ん？ ああ、大希か。どうした」

例の件で大黒柱を失って以来、元々付き合いのあった井上家と今村家はさらに結束を強くしたのだ。大希は井上のことを第二の父として尊敬していたし、井上も、親友の遺児として大希のことは気にかけていた。

「いえ……どうして今日はお説教が無かったのかと思って……」

井上は鼻を鳴らした。

「たまにはいいだろう。今日はみんな真剣に取り組んでいたし、特別に言うこともあまりなかったんだよ。それとも何だ？ お前だけ特別に説教して欲しいのか」

真顔で尋ねられ、大希は慌てて首を振った。個人的な説教など、ひと月前の一件だけで十分だった。すぐさま気をつけをする。

「い、いえ。とんでもないです！」

「そつだろ？ ならそんな事聞くなよ」

口元に笑みを浮かべ、井上は大希に目配せした。

「あ、はは……そうですね」

大希は愛想笑いをするしか出来なかった。大手を振って歩き去っていく井上の背中を目で追いながら、大希はため息をついた。

「今日は雪が降るかもなあ……」

呟いた瞬間、いきなり訓練場へと向けられたスピーカーから大声が鳴り響いて大希は飛び上がった。

「緊急事態だ！ 第二中隊、すぐに集合しろ！」

「え、あ、ええ？」

雪が降るところか、とんでもないことがどこかで起きたようだ。

大希は戸惑いを隠せず、二言三言意味のない言葉を口走った。咄嗟に井上の方を向くと、彼は目を細めてスピーカーの方角を見つめていた。ふと彼が大希の視線に気が付き、二人の視線がぶつかる。目を怒らせ、井上は手を大きく振って庁舎を指し示した。

「聞いたか。早く行くぞ！」

「了解です！」

大希は頷き、井上の背中を慌てて追いかけていった。

十一月の三日。国民の休日ということもあって、憩いの場である時計塔南広場には、十数人が集まっていた。木枯らしが吹く秋晴れの中、ベンチに座って話し込んでいる若いカップルもいるし、赤く色づいた紅葉をのんびりと楽しんでいる老人もいる。通りに並べられた様々な彫刻をスケッチしている人もいた。地震から立ち直り、すっかり平凡な生活が戻ってきていた。だが、そんなところに脅威は忍び寄っていく。

「なあ、あの時計おかしくないか？」

とあるカップルの男の方が、訝しげに時計塔を見て彼女に話しかける。彼女は時計塔を見上げ、そして自分の時計に目を降ろした。どちらも共に正午。全く違いは無かった。いきなり不思議なことを言い出した彼氏に、思い切り不思議そうな視線を送る。

「別に、ずれてないと思うけど……」

「よく考えるよ。一秒が、あんなに長いわけ無いだろ？」

彼氏は時計塔の文字盤を指差した。彼女は口を尖らせながら、時々その指先が示すものを見る。文字盤のコロンは点滅しており、常に一秒を刻んでいるのだ。彼女はぼんやりとそのコロンを見つめてみた。そして、彼女も次第に疑念を抱き始めた。

「おかしい。段々遅くなってる」

彼女の言う通り、コロンの点滅する間隔は遅くなりつつあった。

「だろ？ やっぱり変だ」

彼氏は我が意を得たりという調子に言う。そのうちにも文字盤の

明滅は遅れ続け、ほとんど付きっぱなしになってきた。不審を覚える人間も増えてきて、周囲と話を交えるようになってきた。一体どうなっている、何が起きているんだ、と。

そして、不可思議な出来事が起きた。急に時計塔の像が歪んだかと思うと、それは深い霧に包まれその姿は隠れてしまう。同時に人々は時計塔に向かって、見えない力に引き倒された。そのままずらずると、強い力で引きずられていく。

「うわわ！ どうなってるんだよ？」

何とかその力に歯向かって立ち上がるうとする例の彼氏だが、虚しい抵抗に終わる。彼女も戸惑いの色を隠さない。

「なんか、引つ張られてるみたい……！」

広場は、見えない力に小さな恐怖を抱く人々の声で満たされていた。引力からもがくその姿は、蟻地獄にはまった蟻のように無力だった。霧の中に引きずり込まれ、いよいよ人々は心細くなる。その時、潮が満ちれば引くのと同じく、再び変化が起きた。一瞬人々にかかる引力が緩んだ途端、今度は斥力に突き飛ばされた。腹から突き上げられるようにして宙を舞い、人々は地面に投げ出される。同時に霧も吹き飛んで、その中に隠されていたものをあらわにした。

人々は元通りの姿となった時計塔の下を見た。そこにいたのは、正体不明の十人だ。俗に言えばビームライフルのような、メカニカルな装飾の施された白を貴重とした色彩の銃をぶら下げ、黒みがかった迷彩服の上に白いプロテクターをまとっていた。その姿は、どこかに近未来を思わせるものだった。

何とか立ち上がった人々を、銃を携えた不思議な兵士が見た。黒いサングラスをかけていて、その表情はうかがい知れない。突如現れた十人を、人々は困惑の眼差しで見つめる。公園を走っていた、ジャージ姿の中年男が呟く。

「い、一体……」

静寂が過ぎる。風が吹いて紅葉が散っていった。わずかに人々がそれに気を取られた瞬間だった。

「ここから立ち去れ」

いきなり住人のうちの一人が、銃口をジャージ男に向けた。兵士達の目も、市民達の目も、一気にそのジャージ男に注がれた。男は一瞬固まったが、どこかおもちゃじみても見えるその銃の危険性がよく伝わらず、男はただただ困惑して自分の胸を指さすだけだった。「え？ い、一体何を……？」

兵士の口元が真一文字に結ばれた。いきなり銃口を並木の一つに向けたかと思うと、その引き金を引いた。銃身の中ほどにある、赤い三角模様が光った。

広場中に響き渡る高い音。燃え上がる炎にもうもうと上がる白煙。焦げ付く臭い。人々は悲鳴を上げて腰を抜かしたり、固まったりした。銃から放たれた光が、いきなり木を発破して炎上させたのだ。震え上がっている人々に顔を向け、十人の兵士は銃を構えた。

「さあ。早くここから立ち去れ！」

人々は震える体で立ち上がると、どうにかこうにか走りだした。足がもつれて何度も転びそうになる。その背後で次々に木が爆ぜる音が響き渡った。閑散とした並木道が、一気に火の海へと変わる。恐慌状態の人々は、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「始末しなくてもよかったですか？」

転んだり、つまづいたりしながら必死に逃げていく市民達を見送りながら、小柄な兵士が銀色の腕章を着けた上官に尋ねる。炎上させた木々を見つめながら、彼は静かに頷いた。

「『干渉』による影響はまだはつきりしない。無用な殺害は避けたほうがいい。それに、我々はいち早く『サイバー隊』がこちらへこられるように整備するのが役目だ。その意味でも行き過ぎた行動は厳禁だ。いいな」

「了解です」部下は敬礼で応えた。

「ならばいい。さっさとこの広場を更地にすろぞ。迅速な行動が第一だ」

「はい！」

二人は背負っていたバックパックからメガホンのように見えるものを取り出し、銃口に取り付けた。

異様な沈黙を保ち、緊急車両が通る。鉄の箱がそのまま動いているような警備車が先頭をいき、バス型の輸送車が続き、さらに消防車に似た姿をした放水車が追いかけていく。そしてしんがりは照明をくつつけた投光車だ。目的地はもちろん、今も武装集団が破壊を続ける時計塔南広場だ。その空にはヘリが飛んでいる。大方、マスコミが乗り込んで、破壊の様子を俯瞰しているのだろう。

「あいつらの根性にも頭が下がるよな。わけのわかんない武器持った奴を見下ろすなんてさ」

輸送車からへりを見上げ、健が呟いた。隣で剣人は真剣な顔をし、プロテクターの留め金と、拳銃の自身も確認していた。

「他人事じゃないぞ。その、『わけのわかんない武器持った奴』を俺達は取り押さえようっていうんだからな」

「まあ、それもそうだな……一発で木を爆発させるって、どんな兵器だよ」

「木どころか、彫刻も全部やられたらしいな」

「おかしいぜ。そんな武器がこの世にあつていいのかよ」

うつむいたままつぶつぶつしゃべり続けている二人を、大希は後ろから小突いた。

「文句ばかり言うなよ。俺たちが止めないで誰が止めるんだ。自衛隊だってまだ着かないし、せめて時間稼ぎだけでもするしかないだろ」

「おう。悪い悪い」

健は頭を掻きつつ再び外を見た。久宇慈の白い塔も目の前だ。その様子を見て、すでにヘルメットを被っている部下がさかさず口を開いた。

「健さん。そろそろ着きますよ」



「わかってるって」

数分後、広場からほんの少し離れた位置に車両を止め、第二中隊は速やかに降り立った。井上の判断で、敢えて盾は持たないことになった。現場を見ている巡査からの報告を聞く限りは、盾など持っていないも仕方がなさそうなのだ。

「説明した通りだ。気取られないよう素早く南広場を囲め。武装を見るに危険が伴うが、ここで働かなかつたら、俺達はただの穀潰しだ！ 何としても取り押さえるぞ！ 行け！」

井上の発破を合図に、中隊は散らばって走り始めた。尻込みするような奴は一人もいなかった。

大希達も、ビルの路地を縫うように南広場を目指してひた走る。直接取り囲んでも仕方がない。警備車と投光車で気を引いた瞬間、ビルの際から一気に飛び出し包囲する。井上の朗々とした作戦説明の音が蘇ってきた。

「大希。相手は何が目的なんだと思う？」

剣人が大希の背後で尋ねる。大希は目を泳がせ、少し唸った。しかし、すぐに首を横に振ってしまう。

「今考えたって仕方ないだろ。それに、よりによって広場を選んで壊す目的なんか、本人に聞いたって理解できないと思うぜ」

剣人はため息をついた。思い通りの言葉ではない、といった調子だ。

「まあ、それも一理あるか……よし」

切り替えの早さが剣人の美德だ。すぐに真剣そのものの表情へと立ち返り、すでにビルの壁に張り付いている健の隣に身を寄せた。すでに彼は銃を抜き、ちよくちよく広場の様子を眺めていた。剣人を一瞥すると、そつと広場の集団を指さす。

「見るよあれ。なんだかもう、きれいさっぱりしてるぜ」

言う通り、武装集団はきれいに南広場を更地と変えていた。そして、向こうからはどうにも殺伐とした雰囲気伝わってこない。ど

ちらかといえ、もうすでに一仕事終えたかのような雰囲気だ。驚異と思われた謎の武装も、やたらと膨らんだ銃口から風が出ているだけだ。破壊しつくした彫刻や、並木の燃えかすを吹き飛ばすためだけに使っているらしい。その様子といったら、まるでお掃除だ。切羽詰まった雰囲気などかけらもない。拍子抜けで、大希は拳銃を握りしめたまま苦笑いした。

「マスコミは何て取材してんだろうな」

「冗談いいから集中するぞ。奴らの作戦かもしれない」

剣人があまりに大真面目な調子で言うので、大希も段々そんな気がしてきた。何はともあれ、彼らの武器が彫刻から何から破壊したのは事実なのだ。

「ああ。そうだな」

大希は胸ポケットから無線を取り出し、早口で吹き込んだ。

「こちら今村。位置につきました」

「わかった。サイレンの音を待て」

周囲の十人に緊張が走る。勝負は一瞬、しくじればどうなるかわからない。誰もが息を殺し、緊張の糸をびんと張り詰めた。

けたたましいサイレンが耳に鳴り響いた。青い箱が凄まじい勢いで南広場に押しかける。それに気がついた兵士達は、慌てて銃口の先からラッパの口を外した。その様子を見た大希達十人は頷き合い、一気に走り出した。やや遅れて、灰色の身なりをした投光車が兵士に向かつて眩い光を放ち、ついでにクラクションを鳴らす。兵士たちは落ち着いていたが、いきなり数十人も警察が銃を構えて現れたのだ。的を定められず銃口がふらふらしている。

「抵抗は止める！ 大人しくするのがお互いのためだ！」

警備車から降り立った井上が、ゆつくりとメガホンを構えて兵士達を睨みつける。その手は汗ばんでいた。いくらこちらが優位を取ったといえど、相手が死に物狂いに反抗すれば、甚大な被害が出るだろう。様々に場数を踏んできた井上にとっても、この作戦は一か

八かだった。その目の前で、兵士達は顔を見合わせた。どこから突破しようかとか、そんな事を考えているのかもしれない。井上はうつすらと体が汗ばむのを感じた。

しかし、顛末はあまりに呆気なかった。兵士達は頷き合うつと、銃をいきなり下に放り投げてしまったのだ。戸惑う数十人の目の前で、高く持ち上げられた彼らの両手。閑散とした広場の中、無抵抗を静かに表明していた。

不可解な点を多く残したまま、南広場破壊事件はひとまず終結した。そんな状態だから、大希達も、マスコミも、市民も万々歳では終われないでいた。市井では木を炎上させた瞬間の恐怖が盛んに囁かれたし、マスコミはマスコミで、未知の武装を盛んに取り上げ、いつの間にもやら全国規模での話に変わっていた。世間がそうになっている中では、大希達もやれやれと腰を落ち着けることはできない。まるでデモ活動の警備を控えているような有様で、缶ビールさえ空けることもできなかった。

大希の部屋に集まった幼馴染の四人は、お酒の代わりに麦茶を飲み、真剣な顔であちこちのニュースを見つめていた。

『彼らが持っていた武装を再現してみました。入ってきました情報によりますと、現在全く解析が出来ていない状況にあります』

キャスターがスタジオの中央に現れたCG画像を手で指し示す。やはり機械的な外見をしていて、SF作品にでも出てきそうだ。スーツに身を包んで髪を固めた、どこかで見たことのあるコメントーターが緊張の面持ちで話す。

『この武装については解析を急いでおります。ですが、ある程度の予測は我々理研の方で出ています』

『それは一体？』

『まず、この兵器の主武装はレーザーであろうということです。木が弾け飛んだということですが、おそらくレーザーによって内部の水分が急速に水蒸気に変化したことによるでしょう』

汗を拭いながらも流暢に言い切ると、キャスターはさらに質問を浴びせかけた。

『では、彫刻の破壊方法について、何かわかることは？』

『あちらは目撃情報が少ないので何とも言えませんが、削盤機によ

うなものは使っていないということなので、もしかすると、衝撃波を用いたのではないかという推測が出ています』

『なるほど……』

じつと二人のやり取りを見つめていた健が、ちらりとさくらの横顔に目を向けた。

「なあさくら、レーザーで本当に今言ったみたいなきんのか？」

さくらは口を真一文字に引き延ばし、いかにも困ったような顔で健を見た。首を傾げて目をくりくりさせながら、健の目を上目遣いで覗き込む。

「どうして私に聞くの？」

「だって、大学に行ったのさくらだけだし……」

「大学に行ったからって、勉強してないことは知らないからね？ 私工学部だったけど、そっち方面は関わってないし」

ああ、と健は納得したように手を叩いた。

「そっか、わりい」

健が手を合わせると、さくらは急に頬を緩め、にやにやしながら健の肩を叩いた。

「でもね、レーザーで溶接とかできるらしいし、レーザーで戦闘機を撃ち落とす兵器の研究とかまであるらしいよ。できるはずよ」

そう言って、さくらは知らん顔で麦茶をすする。健は納得していたが、そのうちさくらに一杯食わされたことに気がついた。口を尖らせると、いきなり彼女の頬をつまんで引っ張った。

「いたた！」

鈍い痛みを感じたさくらは、大げさにじたばたして健の右手を引き剥がそうと躍起になる。しかし、それくらいでは健の握力から逃れることはできなかった。引いたり緩めたりを繰り返しながら、健は口角の釣り上がった笑みを浮かべてさくらに詰め寄る。

「お前、結局知ってんじゃないか。からかったな？」

「ふええ。剣人、ヘルプー！」

たまらずさくらは剣人に助けを求めた。彼はため息をつき、情け

ない顔になっているさくらと、楽しそうに彼女の頬を引っ張り回している健を見比べた。中学生の頃から変わらない一幕の一つだったし、特に介入しようとは思わなかった。当然、この剣人の反応も含めて一連の流れである。

「お前が悪い」

「えー。それが一生涯のパートナーに向かって言う言葉？ うげえっ」

さくらは首に腕をかけられ、そのまま頭をげんこつでぐりぐりやられ始めた。特に嫌そうな顔はしていなかったが、自分の首を固めている健の腕を何度も叩き、ついでに口を尖らせた。

「これってセクハラよ。純然たるセクハラだってば」

「うるせえよ。その前に言うことあんだろ」

「何よ。何を言えがいいの？」

他愛もない二人のケンカを一通り見つめた後、大希はテレビに目を戻した。チャンネルを回して、違う局に合わせる。ニュース番組のスタジオの中、緊急検証と左上にテロップされ、誰かがアップとなっていた。どこかで見たひげ面だ。得意満面、水を得た魚のように話している。その顔を見て大希は顔をしかめた。

「これは間違いなくクラリオン星人でしょう」

眼鏡をかけたキャスターは、間違いなくバカにしたような表情を浮かべた。しかし、彼はそれをすぐに隠して尋ねる。

「それは何を根拠に？」

「目撃者の証言によれば、間違いなくワープ装置が使われたに違いありません」

これにはキャスターも仏頂面になってしまった。しかし、時計塔が歪んで見えたとか、霧がいきなり立ち込めたとか、ついでに人が引っ張られたりふっ飛ばされたり、不思議なことばかり起きていた現状を見ると、一つの可能性としては考えられる。それはそのキャスターもわかったのか、重苦しい動作で頷いた。

「そうですね。その可能性も考えられると思います。では、何故そ

の宇宙人は、わざわざ久宇慈市を襲ったのだと思いますか」

「それは、久宇慈市が一三七番元素の研究を始めたからです。クラリオン星人のワープ装置には百三十七番元素が用いられており、地球が同じ技術を獲得することを恐れた」

大希は見るに堪えず、チャンネルを変えてしまった。あのようないくつかのチャンネルがニュー番組でまかり通るなど、甚だおかしい話だ。それだけ世間も浮き足立っているのか、それとも対岸の火事とおもしろがっているのか。大希はあることないこと考えてしまった。

「全く。デタラメもあそこまで来ると笑えてくるな」

剣人も頷いた。白髪や白い髭をぼさぼさに伸ばして、一昔前の映画にかぶれているとしか思えなかった。

「何だかSFの設定で出てきそうな話だったな。宇宙人とか、ワープ装置とか」

「ああ。まだ人死にも出てないからな。向こうはまだまだ平和な気分なんだろ。ついでに……」

大希はさくらと健の方に振り向く。いつのまにか立場が入れ替わり、健の方がヘッドロックをかけられ頬を引っ張られていた。親子仲にも礼儀ありでしょ、だとか、くすぐりはもうなしだとか言われている。大希はため息をつき、いたずら盛りの子を見る親の目で二人を見つめた。

「お前らも随分平和だよな」

「え？」

二人はケンカの手を休めて顔を上げた。大希は頬杖をつき、眉根にしわを寄せながら呟く。

「広場一つまっさらにされたのは事実なのに、さくらも健も気楽そうにしてるからさ」

さくらと健は顔を見合わせた。真剣な顔で二人はお互い見つめあい、正座した膝に置く手にも力を込める。だが、二人は堪えきれずに笑いだしてしまった。姿勢を崩し、肩を叩き合って声を弾けさせた。その屈託のない笑顔のまま、さくらは大希に向き直る。

「今日呼ばれた時から思ってたんだけど、やっぱり私達に辛気臭い顔なんか似合わないって」

大希は目を瞬かせた。テレビでは、武装の予測できる破壊力が検証され、その結果に対して様々な憶測が飛び交っていた。さくらはそんなテレビの電源を消してしまい、再びにこりと笑った。

「だってそうじゃん。私達は親友でしょ？ いつも言ってるけど、親友って、一緒にいて楽しくなれる、明るくなれる、そんな関係じゃない。少なくとも私達はそんな関係だと思ってる。大希と剣人もにらめっこしてみなよ」

言われるがまま、大希と剣人は睨み合った。しのぎを削り合っているつもりで、喉を攻めるつもりで、二人はじつと睨み合った。最初はお互いに視線が刺さるのを感じていた。全ての感情を打ち消し、お互いを圧して倒そうとする視線だ。居丈高である剣人に視線で押されかけ、大希は負けじと目をつり上げて眼光を強くした。それに合わせ、剣人もさらに強く睨む。

三十秒もすると、視線での戦いが膠着した。お互いに攻めかね、心に空白が生まれる。すかさずその隙間に、バカバカしさが入り込んできた。お互い切磋琢磨し剣を交えているわけでもない。お互い憎しみなどあるはずもない。なら、何故自分たちは睨み合っているのだろうか。そんな事を考え始めると止まらない。大希はとうとう嘔き出してしまった。

「ほんとだ。稽古じゃないと馬鹿馬鹿しくて睨み合えねえ」

「俺達には、笑顔が似合うってことか？」

剣人は肩をすくめながら微笑んだ。さくらは大きく頷くと、いきなり剣人を右手で抱き寄せた。もう片方で健を抱き寄せた。

「そういうこと。剣人といれば百人味方がいるくらい安心するし、健もいればまた百人くらい増えた気分だし……」

さくらは目で剣人を促した。慌てて剣人は大希の肩を持って引き寄せた。

「四人でいればもっと、か？」



剣人が片方の眉を持ち上げると、さくらはくすりと照れくさそうに笑った。

「そういうこと。私はあんなのが攻めてきても怖くない。みんながいてくれればそれで」

大希はふと、四人で誘拐された日の事を思い出した。四人バラバラでいたときは、絶望してしまいそうなほど辛かったのに、こうして肩を寄せ合うと平気になれた。さくらの言う通りだ。きっと、自分たちはいつまでもそうなのだろう。少し暗くなっても、みんなで励ましあっていくに違いない。

「ああ。みんなそうさ」

時同じくして、未成は疲れきった表情で自宅に帰ってきた。機動隊が兵士を取り押さえた後、未成は他の同僚と共に広場後に駆り出され、不思議な事象の残滓を探させられたのだ。だが、そんなものは残っておらず、鑑識課の努力はただの徒労に終わってしまった。電気も付けずにソファーに倒れこみ、未成は深いため息をつく。

「見つかるはずなんかないのにな……」

話す相手が欲しかったが、今ごろ大希は幼馴染と過ごしているはずだ。そこに自分の入り込む余地はないだろう。未成は再びため息をつき、肩を落としてうずくまった。その時、背後で携帯が鳴った。未成は反射的に携帯を取り上げる。

「はい。来栖です」

「もしもし。今村です。未成、今何してる？」

電話の向こう側にいたのは、紛れも無く大希だった。呆気に取られた未成は、一瞬声も出せずに固まってしまふ。

「未成？ おい？」

「あ。ごめん。今帰ってきたところだよ。どうしたの？」

「そっか。未成、今さ、剣人達と集まってるんだけど、お前も来いよ」

大希は明るい声だった。未成ははっとして、再び声が出せなくな

ってしまった。彼の不審な様子に大希は戸惑ったのか、困ったような声が飛んでくる。

『おい。未成、さつきからお前はどしたんだよ?』

「い、いや。ごめん。何でもないんだ。でも、疲れてるから僕は遠慮するよ。ごめんね」

『なんだ……そうか。それなら強要しないさ。それじゃあな』

「うん。じゃあね」

切れた携帯を見つめ、未成は静かにそれを胸に押し当てる。どうして断ってしまったのか、自分にもよくわからなかった。だが、自分を気にかけてくれたというだけで、未成は少し満足していた。

「あいつの言う通り、世界も、少し変わったのかな……」

そして、未成は顔を暗くした。携帯を再び開くと、そのカレンダーは十一月の十日を示している。

「でも、変わってほしいことは、やっぱり変わってくれないんだ……」

微かに、未成の目には涙が浮かんでいた。

十一月十一日。世間では、あるお菓子のコマーシャルみたいな日だ。安易な考えだが、それにうつかり乗ってしまうのが悲しき大衆の性というやつである。さくらの友人である理加は、自宅近くの、そして南広場跡近くのコンビニを訪れていた。仕事前の食料調達だったが、やはり彼女も流行に乗せられていた。

「ポツキンナベイバー。つてか。甘い甘い。さくらはどうしてこっちの良さがわかんないかなあ？」

ハーフフレームの眼鏡を持ち上げるような仕草を見ると、理加はプリッツの品定めを始めた。ポツキーのようにデコレーションが派手な商品はないが、その素朴さが妙に理加は好きだった。ふと顔を上げると、鏡のように磨き上げられた窓に一瞬自分の顔が映った。教科書のイラストにでも出てきそうだ。不細工なわけでもなく、美人でもない。印象にも残らない。さくらのように満面の笑みを作ってみるが、さくらのような華は無かった。わずかに肩を落とし、理加はプリッツをサンドイッチが入ったかごに落とす。

「ま、私もポツキーは好きなんだけどね……」

踵を返し、理加はレジへと向かう。再び窓の外に目を向けると、今度は南広場の跡が目に入った。今では全くの更地となっており、警戒テープがそこを囲っていた。昨日活躍した機動隊もあり、いたずらに入る者がいないか見張っている。理加はため息をついた。昨日の出来事は、彼女にも深い影を落としていた。

「嘘みたい……あんな出来事……」

店を出た理加は、うつむきがちになり、小さくなってその向かいを通った。

「どうして私、こんな所にマンション借りちゃったんだろ……」

最初は広場が一望できて小洒落ているからと、多少の出費は我慢

して借りた自宅だったが、今となってみればおちおち眠ることもできない。今にも何かが出てきそうなので、理加は少々怯えていた。やや小走りになって、角に曲がる。そして、南広場から離れられたことに安堵してほっと息をついた。その時だった。

理加の体が急に南広場の方角へ引つ張られた。大の男に無理やり引つ張られたような感覚で、抗おうとしても抗えない。理加はふらつきながら広場の方へと歩かせられていく。

「な、何？ 何がどうしたの？」

理加は蒼白な顔で振り向いた。そこに広がっていたのは、昨日の目撃者がニュースで語っていたのと同じ白い霧。だが、規模が彼らの言っていたものとは全く違っていた。広場の周囲を取り囲んでいた警官が、霧に包まれて全く見えなくなっていた。ついでに、理加は何かが震えてぶつかり合っている音を耳にした。胸の中で激しく警鐘が鳴り響くのを聞き、理加は何とかホテルの軒を支える柱に掴まった。目の前で、人々がどんどん霧の中へと飲み込まれていく。

「これって……もしかして……」

理加は恐怖を何とか押しとどめ、柱を伝って、働く引力の方向とは反対側の場所に移る。そして、携帯の在り処を探った。動ける人が動かないと。理加は心を決めたのだ。スーツのポケットを探り、ついに携帯の感触を指で確かめた時、今度はいきなり何かで突き飛ばされたかのような衝撃が襲いかかってきた。理加は簡単に吹っ飛ばす。床、広場、天井、通りと視界が激しく移り変わる中、自動ドアが確実に近づいてくるのがわかった。

「うそ。ちよ、ちよっと待って！」

理加は頭を庇う時間しか残されていなかった。全身をドアに打ち付けられる。火花が散りそうなほどの痛みを感じたが、幸いドアが強化ガラスだったのと、理加が痩せっぽちだったお陰でお陀仏は免れた。ふらつきながら立ち上がり、理加は広場へと歩いていく。霧は晴れていた。そこに広がる光景を見て、理加は呆然としてしまった。何よあれ。思わずそんな言葉が漏れ、携帯のカメラを向けるこ

とも忘れかけていた。

そこにいたのは、巨大なカマキリのようなだった。ざっと見ても十メートル以上はある。白銀に光る金属の体を持ち、顔の輪郭に沿うように青白い点状の光が並んで灯っていた。不規則に明滅するそれは、周囲に倒れて呻いている人々を無慈悲に見つめている。そして、カマキリの中で最も目立っていたのは、銀色に光る前腕の刃だった。「と、撮らなきゃ。情報を得ないと……」

最も情報と密に関わっている彼女は、それがいかに大切なものかを理解しているつもりだった。身の毛がよだち、心も必死に『逃げろ』と叫んでいる。しかし、理加はそれを理性で抑えこみ、携帯のカメラで必死にカマキリを写した。その威圧的な風貌を、全体像一枚、そして部位ごとに十枚。理加は撮った。そして、理加はそのカマキリの恐怖を知ることになった。

「Follow the given command……」

無機質の電子音を発した後、カマキリはその大きな鎌で、理加とは反対側のビルを殴りつけた。ガラスが碎ける甲高い音が通りを満たし、鉄が擦じ切れていく、耳を塞ぎたくなるような音がその後が続いていく。そして、阿鼻叫喚の叫びが最後に通りを占めた。恐慌した人々は、蜘蛛の子を散らすようにカマキリから逃げ出す。

「Follow the given command!」

理加もまた同じだった。狂ったように 元々その姿に常識など存在しないが ビルの破壊を始めたカマキリを見て、理性など吹き飛んでしまった。本能で安全な場所を求め、理加はホテルの中に飛び込んでしまった。理加は恐怖で口をぱくぱくさせることしかできず、元々ホテルにいた数人の人々が必死にどこかを目指して逃げ出す中、ただただ魂が抜けたようにカマキリを見つめていた。

ビルの瓦礫に混じって、何かうごめくものが地面に叩きつけられたのが見えた。五体満足のまま、絶望に顔を凍りつかせた人もいれば、カマキリの攻撃によって語るに堪えない有様になっているものもあった。どちらにせよ、早くに出勤して、仕事の準備を整えてい

た不幸な人々の末路だった。まっとうに生きる人々が割を食うことがあるこの世。その理不尽を究極に表していた。そして、その刃は理加にも迫ってくるのだ。

「いや……来ないで」

ひと通りビルを破壊しつくしたカマキリは、重く胸に響く音をさせながらホテルの方に振り返った。その目が全て光りだす。理加は呆然と眩き、その驚異から逃れようとフロントへと向けて走りだした。そこにはもう誰もいない。元々いたはずの受付嬢は、あてもなくホテルのどこかへ逃げ出してしまったらしい。理加はもたつきながらそのカウンターを乗り越え、その狭いスペースの中で身を縮める。

「やだよ……さくら、さくらあ……」

親友の名を呼んで、理加は顔をくしゃくしゃに歪めて泣きじゃくっていた。体は震え上がっており、もうどこにも動けない。カマキリの甲高い動作音だけが強く耳に焼き付いていた。そして、カマキリはホテルの前でその歩を止める。

「Follow the given command……」

カマキリは鎌を振り上げ、ホテルを切り裂いた。蛍光灯が弾け飛び、天井が砕けた。そして、カウンターの角に身を寄せていた理加の頭上に、彼女の体の数倍はある大きな瓦礫が降り注ぐ。彼女の悲鳴がこだました。

大希達がそこに出場したのは、その十分後だった。間を置かずに訪れた真の恐怖。それは、広場の周囲のビルをすでに破壊し尽くそうとしていた。血なまぐさい臭いが鼻につき、毛布を片手に降り立った大希は顔をしかめた。剣人や健達も続々と降り立ち、そして一様に顔を歪ませていた。

「これは……」

剣人は鼻を押さえ、顔を曇らせた。建物が崩れ、瓦礫に混じって遺体が転がっているその有様。昨年、被災者の捜索で派遣された時

以来のシヨックだった。しかし、シヨックを感じている暇もない。カマキリとの戦闘は自衛隊に任せるより他にないが、まだ生存者がいるなら、何とか避難させてやらなければならぬ。大希も健も苦しい顔をしていたが、その目にはしかと決意が宿っていた。

「奴はまだビルを壊すのにつきつきりだ。何とか生存者を見つけて、助けてやれ」

鬼と言われる井上の声も、僅かに震えていた。彼を打ち振るわせているのは、怒りか、悲しみか。どちらにせよ、その声で隊員は奮い立った。

「了解！」

足音を立てないよう、かつ素早く隊員たちは三人一組にばらけて走った。もちろん大希は剣人や健と一緒にいる。カマキリへの恐怖と闘いながら、大希は瓦礫となった広場を必死に見渡した。しかし、見つかるのは目を背けたくなるような惨状ばかり、少し歩いたたびに絶望も一歩一歩心に歩み寄っていた。

「待ってくれ」

うつむいていた剣人は蒼白な顔で唇を噛みしめ、急に二人を呼び止めた。そしてその場に屈み込む。そこにいたのは、目を飛び出しそうなほどに見開いたままで死んでいた、スーツ姿の男だった。その下半身にはその体の二回りは大きな瓦礫がのしかかっていた。震える手を伸ばし、剣人はその目を閉じてやる。その冷たくなった感触に、剣人は思わず唇を震わせた。

「ひどい……助かった奴なんているのか？」

「止める！ それだけは言うな！」

剣人の弱音を叱咤したものの、健に希望があったわけではなかった。周囲を探すことをやめ、健もうつむいてしまった。そんな二人を見つめ、大希は体をわななかせながら首を強く振る。

……誰か。誰かいないのか！

大希は心の中で叫んだ。その時、カマキリの放つ金属音に混じって、小さな小さな声が聞こえてきた。大希達は一斉にその方角に目

を向ける。そこにいたのは、右足を血溜まりに浸した女性だった。真つ青な顔で、すでに一步も動けぬほどに弱っていた。彼女はわずかに微笑み、こちらに手を差し伸べようとしていた。

「助けに、来て、くれたんですか？」

「は、はい！」

大希が叫んだ時、カマキリがビルに最後の一撃を見舞った。鈍い音と共に瓦礫が弾け飛び、一際大きなコンクリート塊が大希達と女性の間で落下して砕けた。石つぶてが三人に降り掛かってくる。三人は慌てて顔を庇う。それでも数えきれない礫が全身を襲ったが、そんな事は些事に過ぎなかった。

「大丈夫ですか！ 無事ですよね！」

健は大声で呼びかけながら瓦礫を乗り越えて女性の姿を探した。

「は、はい……私は何とか……」

「よかったです！ 今助けます！」

大希達は女性の元に駆け寄った。顔色は悪いが、今すぐ助け出しさえすれば何とかかなりそうではある。背負っていた毛布を下ろして広げ、右足の怪我に気をつけながら彼女を載せた。そのまま三人で毛布を担架代わりに持ち上げ、彼女を急いで担ぎ出そうとした。

「Follow the given command！」

大希は反射的に背後を見上げた。そこにいたのは、紛れも無くカマキリの化物だった。銀色の鎌を振り上げ、今まさに四人を始末せんとしていた。

「ま、まずい！」

大希は飛び出した。何も考える余裕もなかった。このままでは仲間が危ない。その思いが彼を突き動かし、カマキリの前に立ちはだからせた。その刹那、誰もが思いもよらぬ出来事が起きた。

「Follow…… the giveen…… command  
d……」

急にカマキリの電子声が歪み、動きも固まった。鎌を振り上げたまま、カマキリは急に痙攣を始めた。必死に鎌を振り下ろそうとし



ているのか、亀のような動きで鎌が大希の方に向かっていった。しかし、その鎌は永遠に大希の元へと届くことはなかった。

「E-cord No.000. I cannot follow  
with the given command」

最後に小さく言葉を呟いた後、金属のこすれ合う音と共にカマキリはその場に崩れ落ちた。鎌が大希の側を掠めて落ち、カマキリはその場に伸びてしまう。目の光も消え、それは物言わぬ金属の塊となっていた。

「な、どうしたんだ……一体……」

不意に訪れた出来事に、大希はただただ驚くより他に無かった。

瓦礫の中に崩れ落ちて動かなくなった機械のカマキリ。初めのうちは、我も忘れてただただそれを見つめていることしか大希にはできなかった。周囲で駆け回っていた仲間たちも、微動だにせずその機械を見守っている。

「なあ、どうしたんだ？ これ……」

健は一旦負傷した女性を下ろし、そつとカマキリの方へ歩み寄った。眼の光どころか、白銀に輝いていたその体の光も失せ、鈍色に濁っていた。健はその有様をまじまじと見つめると、目に恐怖の色を浮かべながら鎌に手を伸ばした。

「やめる！ 下手に触って、何かあったらどうするんだよ」

大希は慌てて健の腕をはたき落とした。健は眉にしわを寄せて大希を見たが、文句は言わずに腕を引っ込めた。代わりに、大希は手頃なコンクリート片を掴み、そつとカマキリの頭に向かって投げつけた。鈍い金属音が周囲に響き、コンクリートはカマキリの前にころりと転がる。カマキリは微かな起動音すら立てなかった。

「どうした！ 何がどうなってる！」

呆然と立ち尽くす大希達の背後から、井上の声が飛んできた。本人も身軽に瓦礫を乗り越えながら駆けつけようとしていた。

「い、井上さん。それが……このような状態で……」

井上は顔をしかめて首を振る。彼だって、カマキリが倒れたのは見ていたのだ。

「そんなことは来るまでにわかる！ 何かカマキリにしたのか？」

「いえ……せいぜい僕がこの女性の盾になったことくらいですが……」

大希はカマキリと倒れている女性との間に再び立ってみせた。にわかには信じられず、井上は開いた口が塞がらなかつた。周りを見渡すと、自分と同じようになっていく部下ばかりであった。職務が

頭から吹っ飛び、ただ呆然として動かなくなっている。誰もが戸惑い息を潜めて、鉄屑と化したカマキリを見つめていた。

ようやく現実を飲み込んだのは、間近で女性の呻き声を聞いた剣人だった。踵を返して井上に振り向き、気をつけをして訴えた。

「……いけない。怪我人はまだこの場にいます。呆然としてはいけません！」

その言葉で、ようやく井上は我に帰った。乾いた目をこすり、咳払いをして周囲を鬼の目で見渡した。

「剣人の言う通りだ。我々の職務を忘れるな！ 生存者を探せ！ 重機も呼ぶ。鑑識の犬も呼ぶ！ 全力を尽くして探せ！」

隊員は我を取り戻した。地を高らかに踏み鳴らし、揃って敬礼した。

「了解！」

大希達はすぐさま女性に駆け寄り、頭を下げた。

「申し訳ありませんでした。どうかお許しください」

「いいですよ。助けてくださるんですから……」

「すみません」

大希達は一斉に女性を持ち上げ、警備車の方角へ向けて走った。

二十分ほどして、奮闘する大希達の元にシヨベルカーが二台と、鑑識課が辿りついた。輸送車に乗った自衛隊もだ。援軍によって、膠着していた救出戦線も息を吹き返し、全身全霊でもって生存者の捜索にあたった。

警察犬が、血なまぐさい臭いの中、わずかな命の匂いをかぎ分け、重機が動き回る騒音の中の微かな身動きを聞き付けて駆け回った。

その後を必死に救助隊が追い、手でどけられる瓦礫は全力でどかし、シヨベルカーにも頼って瓦礫という瓦礫を探った。もちろん、見つかるのは遺体ばかりだ。瓦礫と瓦礫の間に、などという幸運な人は中々いない。

「そっちはどうだ！」

「だめだ。一人も見つからない」

「諦めるな！ 今にも助けを待っている人がきつといる！」

こんなやり取りが、廃墟の中にずっと響いていた。

そこには未成もいた。鉛色の空の下、未成も周囲に混じって救助を手伝っていた。下水と血の臭い、そして死臭が入り交じった臭いに彼はたまらず吐きそうになったが、どこもかしこも無事な自分が休む気にはなれなかった。そして、その思いがついに実を結ぼうとしていた。

「生きてる。生きてるぞ！」

誰かが嗚咽混じりの叫びを上げた。瓦礫の下では、年端もいない男の子が、母親に抱かれたまま泣きじゃくっていた。その母親は、我が子を瓦礫から庇って死んでいた。

「今助けるぞ！」

細身の機動隊員が素早く瓦礫の隙間に潜り込み、子供の手を掴んで無事に引き上げた。

「ママ！ ママがあ！」

「ああ。ママもあそこから出してやるからな」

未成は生き残った男の子に安堵と同情の眼差しを送り、その姿を見送った。その心の中に、小さく刺さるものがあった。ホテルの方を見やり、それから腕時計に目を下ろす。時は十二時の四十五分を指していた。未成はもう一度だけホテルを一瞥してうつむいた。

「やっぱり無理だ。時間が……」

未成の呟きを打ち消し、向かい側から声が飛んでくる。

「みんな！ こつちを手伝ってくれ！」

周囲は返事をしながら声のする方角へと走っていく。後ろ髪を引かれるようにしながら、未成もその後に従おうとした。

『お前がそうだから世界は全く変わらない』

だがその時、未成の胸に響く声が彼の足を引き止めた。目を閉じると、あの男の狂った笑顔が甦ってくる。

『世界はいつでも決断だ』

未成は再びうつむき、小さく肩を震わせた。思い出せば出すほど、未成の目は潤み、顔は赤くなっていく。

『お前だって、気づいているんじゃないのか』

未成は歯を食いしばった。悔しかった。曲がりなりにも、自分は今あの男に叱咤されている。恥ずかしかった。諦めようとした自分が。だが、もう未成は迷わなかった。目の前を通ろうとしていた大希達に気が付くと、未成は大声で呼び止めた。

「大希！ みんな！」

「うおっ。未成、どうしたんだよ」

「説明してる時間なんかじゃない！ とにかくこつちに来てくれ！」

早口でまくし立てると、未成は瓦礫を足早に乗り越えてホテルの廃墟を目指す。顔を見合わせた三人は、未成の目にあつた凄まじい気力を見たことを確かめあい、その後をすぐに追いかけた。

「未成！ どうしたんだよ！」

「こつちにだってまだ生存者がいるんだ！ この中だよ！」

未成は瓦礫の山の中腹で立ち止まると、自分の足元を何度も指差した。今まで見たことのない剣幕に戸惑い、大希は恐る恐るという調子で尋ねた。

「ど、どうしてわかるんだよ」

「そんなこと言ってる暇は無いんだよ！ 手伝いを呼んでくれ！」

そう言つて、未成はいきなり瓦礫をどかしはじめた。コンクリートを掴み、ふもとの方へ必死に転がす。大希は目をすっかり丸くし、半信半疑で未成の行動を見つめていた。だが、やがて親友として彼の事は信じなければならぬという思いに至る。気を入れ直し、大希は新たにやってきたシヨベルカーにこちらに來いと合図を送った。

理加はぼんやりと目の前を見つめていた。最初は真っ暗で、とうとう華の無い人生も終わりを告げたのかと思つた。だが、時が経つにつれてどうやらそうでは無いことがわかつてきたのだ。床についた左手が絨毯の感触を教えてくれるし、右手の感触がカバンの存在

を教えてくれる。背中には固い感触もあった。何より、少し息苦しい。息苦しさを生を実感するというのも変な話ではあるが、人は死を意識するからこそ生を実感する、と誰かが言ったのも事実だ。とにかく、理加は生きていたのだ。だが、理加はちつとも嬉しくなかった。

「どうせなら、一思いに殺してよ……」

理加は運命の神を恨んだ。大きな瓦礫とカウンターに守られ、彼女は確かに無傷だ。だが、こんなところまで誰が助けに来てくれるだろう。自身の体が朽ち果てていくのを実感し、絶望しながら死んでいく。そんな末路しか見えなかった。理加はすっかり消沈して右手のカバンを引っ張った。しかし、カバンは全く動かない。手で探ってみると、カバンは半分が潰されていた。中身を確かめると、財布に筆記用具、そしてプリッツだけが無事だった。理加はため息をついた。

「どうせ私はプリッツみたいな女ですよ……」

四苦八苦しなながら箱と袋を開けて、理加は一本、また一本とかけた。その度に思い出されるのは、山も谷もない人生だった。平々凡々の家に生まれ、平々凡々な友達をつくり、それなりに恋の駆け引きを学び、それなりに勉強して、ぼちぼち今年に仕事を始めた。たったこれだけで人生の振り返りが終わってしまった。なんとつまらない人生だったろう。理加は涙が浮かんできた。ポッキーを探る手を止め、理加は眼鏡を外して涙を拭った。

「あ……」

その時、理加はたった一つ出来事を思い出した。ある時、理加はコンタクトをしていた。引っ込み思案なこの性格ではなく、見た目を『可愛い』と褒めてくれた、たった一人の男のために。

『眼鏡は止めなくて。泣きぼくろが目立たなくなるだろ』

あの男は確かそう言った。熱いくせに、妙に現実的なところもあるあの男。ある映画を見てから、自分との決定的な違いを感じて疎遠になってしまった。いつしかコンタクトがなくなり、理加はまた

眼鏡をかけるようになっていた。眼鏡をかけ直し、理加はため息をついた。

「元気なのかな……このことに巻き込まれて無かったらいいけど……」

その時だ。何やら急に明るくなった。どこからか人の叫び声も聞こえてくる。

「誰か！ いるんでしょ！ 返事をしてください！」

理加はにわかには心臓が湧き、冷えかけていた体に熱が蘇ったのを感じた。細い手で必死にカウンターを叩き、声を限りに叫んだ。

「ここ！ 誰か、誰か助けて！」

気づいてくれたらしい。外が急に沸き立った。

「いる！ いるぞ！」

「慎重に行けよ。こっからが勝負だぞ！」

光がわずかに差す穴が、徐々に広がり始めた。助かる。これからも生きていられる。理加の心に希望が帰ってきた。そして、ついに大きな瓦礫が一つどかされ、理加にまぶしい光が降り注いだ。その光を背に、一人の影が身を乗り出す。

「り、理加？」

その声には間違いない聞き覚えがあった。顔を上げ、理加は戸惑った声で尋ねた。

「健？ 健なの？」

影は大きく頷いた。

「ああ。そうだよ。ちよつと待ってる」

健は後ろを向いて何事かやり取りすると、いきなり穴に潜り込んできた。そして、その右手をぎりぎりまで伸ばす。

「理加！ 何とか掴まれるか！」

「う、うん！」

理加が懸命に伸ばした右手は、しっかりと健と繋がった。そのまま力強く理加は引き上げられた。

決して、外の空気はよくなかった。具合悪くなりそうなほどの臭

いだ。しかし、理加は天にも昇る気持ちだった。

「健。まさか健に助けてもらえるなんて」

健は肩を竦め、頭を掻く。

「俺だつて、生き埋めなのが理加だとは思わなかったよ」

二人が数奇な運命に驚いていると、未成の鋭い声が広場の真ん中から聞こえてきた。

「健さん！ 早くそこから離れて！」

「え？ 何？」

健と理加が同時に問い返した時、急に足元が揺らぎ始めた。その小刻みな震えは強く、その場に立っているのも難しくなってきた。

「わわわ！ 理加、とりあえず言うこと聞いておこつ」

「う、うん！」

二人が瓦礫を下り終えた途端、先日とは比べ物にならない揺れが襲いかかってきた。そして、ホテルの瓦礫が再び揺らぎ始めた。



揺れが収まり、立ち上がった大希達はホテルの残骸を見つめていた。ただ一人、未成だけが真剣な顔をしている以外は、呆気に取られて言葉も見つからない、という調子だった。だが、やがて大希がはっと気づく。

「こんなことしてる場合じゃない！ 再開しましょう！」  
「は、はい！」

大地震の呪縛が解け、大希達は再び瓦礫との格闘に赴いていった。後には、健、理加、未成の三人が残される。

「もしかして、少しでも助けが遅れていたら、私、死んでたの？」  
理加がか細い声で呟くと、未成はホテルの瓦礫を見据えたまま頷いた。

「ええ。きつと」  
理加は言葉を失い、一気に血の気を失った。足の力が抜けて、ふらふらとその場に崩れ落ちそうになった。気づいた健が慌てて彼女を支える。

「大丈夫か？」  
「ごめん。ちよつとダメかも……」

健に寄りかかり、理加は今にも消えてしまいそうな声で呟く。ため息をつく、健は理加を横抱きにして、救助活動の本部まで歩き始めた。

「仕方ないやつだな、お前は……」  
「ごめん……健」

瓦礫を乗り越えながら健は頷く。その目は、理加の顔をしっかりと捉えていた。

「ああ。……で、結局眼鏡に戻したのか。それじゃダメだって言うたろ」

曇っていた表情をほんの少しだけ和らげると、理加は眼鏡を外し

て胸ポケットにおさめた。

「うん……ごめん」

震度五弱の地震により、少々の停電が発生したり、断水も起きた。そのために救助活動は滞ってしまうかにもえたが、有志が現れたことで作業の効率は何とか維持された。そして、夜までに十人の命を救ったのだった。

「大希！ 理加はどこなの！」

時計塔広場に設置された救助本部。さくらはそこに現れるなり、鬼も縮こまるような形相で大希に迫った。

「ま、待ってくれよ。理加さんは無事だから」

腫れ物にでも触るような顔で大希がそう言うと、いよいよさくらは大希の胸ぐらを掴んで揺すぶった。

「なら早く会わせてよ。どこ？ 一体どこなのよ！」

「わかった！ わかったから俺を離してくれ！」

大希は半ば突き飛ばすようにしてさくらを自分から引き剥がすところりと踵を返して一つの天幕を目指した。救助隊が交代で休むためのものだ。さくらの思いつめたような視線を背中に感じながら、大希はその天幕をくぐった。

その瞬間、さくらは嗚咽で息を詰まらせた。目の前にいたのは、健の隣で毛布を被った理加その人。紙コップを両手に、健と控えめに談笑していた。

「理加！」

さくらは天幕いっぱい響く声で叫んだ。飛び上がった理加はさくらに気がついた。震える唇を噛んで押さえ、彼女は必死に泣くまいとしていた。泣くほど心配してくれたさくらに心を打たれ、理加は一気に喉が詰まり、目頭が熱くなった。配給してもらったココアを取り落としてしまいながら、理加はゆっくりと立ち上がった。

「さくら」

「理加！」

「さくらあー！」

こらえられなくなった理加は、勢いよくさくらに飛びついた。その胸にすがって、彼女は少女のように泣きじゃくった。

「さくらあ。怖かったよお。も少しで、私死んじゃうところだった…」

さくらはきつく理加を抱きしめ、自分自身も大粒の涙をこぼした。  
「うん。よかった…ほんとによかった」

二人の女性がひしと抱き合って号泣する様子は、周囲で休んでいた人々の心に勇気を与えた。絶対諦めずに人々を助けようと、人々は決意を新たにした。

嗚咽が緩んだのを見計らい、健はココアの入っていた紙コップを拾い上げ、二人の方へと歩み寄った。

「感謝しろよ？ 一応俺が助けてやったんだから」

「そうだったんだ。私もお礼するわ。ありがとう」

半べそかいたままで笑ったさくらに肩を竦めてみせると、健はそのままの方へと片足を踏み出した。

「理加。代わりのココア持ってくるか？ ついでにさくらも」

「あ、うん。ありがとう」

「わかった。私にもよろしくね」

二人が頷くと、健は軽く手を挙げて応えその場を後にした。健の背中をずっと見送っていたさくらだが、あることに気がついて振り返り向いた。

「あれ。理加と健って、何か関係あったっけ。一度も会ったこと無いような気がしたんだけど……」

さくらの腕の中で、理加は小さく肩を竦めた。

「私、大学生の時に友達に引きずり出された合コンで、おんなじように引き出されたあの人に会ったの。付き合ってたこともあるんだ。一応」

聞いた途端、さくらは鳩が豆鉄砲を食らったような顔になった。

「嘘だあ！ 私が健の話しても、全く知らない体で聞いてたじゃん

！」

「……失恋した話なんか好きでしないよ」

「……まあね」

さくらと理加は困ったような笑顔で見つめ合い、それから吹き出した。

大希は安堵に満たされた表情でさくら達を見た後、その横を抜けて未成と剣人が座っているベンチに腰を下ろした。

「何はともあれ、助かってよかったよな」

座るなり、大希は未成と剣人に話しかける。目の前の床几に置かれた小さなラジオを見つめながら、剣人は頷く。

「ああ。本当に間一髪だった。もう少し未成の判断が遅れていたら……」

未成は目を伏せた。遺体を安置している天幕の中、変わり果てた姿になった理加を前にして泣き叫ぶさくらの姿。そうだっただろう。目頭を押さえ、未成は呟く。

「ああ。無事で本当によかった……」

「しつつかし、本当に不思議だよなあ」

温かいお茶を飲みながら、大希はふと思い出したように呟いた。

剣人は首を傾げ、大希の方を見た。

「何だ？ あのカマキリの事か？」

大希はお茶の缶を見つめたまま首を振る。

「それもそうだけどさ、俺が言いたいのは未成のことだよ」

「ぼ、僕？」

未成は自分の胸を指差した。いかにも意外そうにしている。

「ああ。あの時、どうして理加さんがあんな深くにいるってわかったんだ？ ついでに、まるで地震が来ることを予知してたみたいだし」

引きつった笑みを浮かべ、未成は反対側にいる剣人の方に振り返った。今まで気楽そうな表情をしていたくせに、いつの間にか真剣

な表情に化けている。気の抜けた笑い声を漏らし、未成は愛想笑いした。

「やだなあ。そんなに真剣な顔しないでくださいよ。勘です。勘」  
大希と剣人の顔が一気に歪んだ。

「勘？」

「ええ。それにちよつとしたテレビの噂を信じてみたんです。段々警察犬の落ち着きが無くなってきてたじゃないですか。地震が起きる数分前は、もう犬は使い物にならないほど慌てていて……これって、地震の前触れかな？ って思ったんです」

未成の背中越しに、大希と剣人は目を合わせる。疑おうと思えばいくらでも疑えるが、彼の結論でよしとした。

「まあ、そういうことにしとく。でも、まだ理加さんの謎が残ってるぞ」

未成は舌を巻き、顔をしかめた。

「それは……恥ずかしい話、本当に勘なんだよ。ホテルはまだあまり手が回ってないようだったし、探せば一人くらい助かってる人がいるかな、って思ったんだ」

未成の引きつった愛想笑いを覗き込むように見つめ、大希はため息をついた。

「お前……きつと勘で油田も掘り当てられるぞ」

未成は大希の言葉が皮肉だということには気づいていたが、わざと気が付かないふりをした。

「はは。そうかもね」

大希と剣人は再び顔を見合わせた。未成がそう言い張るのでは仕方がない。二人は、変に『私は未来が見える』などと言われるよりはましだと思っておくことにした。

「まあ、お前がそう言うんなら、そうなんだろうけどさ……」

それきり三人は黙り、ラジオの声に耳を傾けた。まず、昼の地震の被害状況が小さく伝えられた。震度は五弱、この地震によって崩壊した建物はなし。だが、沿岸部付近で古い水道管が破損し、断水

に陥ったし、北部で一部が停電した。そして、謎のロボットによって倒壊したビルからの救助活動に深刻な影響を及ぼした。そう伝えられた。そして、今日の朝に起きた事件に話が移った。剣人はラジオをじっと見つめてため息をつく。

「さあ、ラジオは今日のトピックスをどう伝えるつもりだ」

『本日午前七時頃、南広場にカマキリに似た姿のロボットが突如出現、そして周囲のビルを襲撃しました。これによってビル四棟が全壊、現在判明しているだけで百二名が死亡、五名が重体、二十三名が重軽傷を負っています。現在はロボットも起動を停止して自衛隊に回収されており、現場では懸命の捜索活動が続けられています。今後も襲撃の可能性は懸念されておりますが、現在対策は検討中の事です。以上、久宇慈市のニュースでした』

キャスターは一気に事実を並べ立てるに終始して、そのままニュース自体が終わってしまった。しばしばんやりとしていた大希だったが、ニュースの内容が飲み込めてくるにつれゆっくりと頷き始めた。

「そうだよな。ラジオだし、コメンテーターを呼ぶことは少ないか」  
「変な憶測吹きこまれて不安になるよりずっといいさ」

聞くことは聞いたと、剣人は手を伸ばしてラジオの電源を切ろうとする。その時、戸惑ったように上ずり気味の声で、キャスターがいきなり話し始めた。

『全国のニュースの前に、速報です。現地時間で午後一時、ドイツのベルリンでマグニチュード6.0の地震が発生しました。多くの建物が半壊または全壊し、多くの死傷者が出ております。また、他にも中国の上海、インドのムンバイ、ロシア連邦のモスクワなど、各国の大都市にて、それぞれの現地時間午後一時にマグニチュードが6.0付近の地震が発生しており、不可解な規則性に気象庁は首を傾げております』

「おいおい。どういうことだ？ 世界はどうなってんだ」

大希はラジオを揺すぶった。未成は冷や汗を垂らしながら唇を噛

み、剣人は戸惑って目を瞬かせた。

「中国やインドはともかく、ロシアやドイツじゃそんなに大きな地震は起きないだろ。パリの時もそうだったし、やっぱり地球は少しおかしくなってきたんじゃないか」

「二〇一二年。地殻大変動が起きて世界は危機に晒される」

三人の横で、ココアを健から手渡された理加がうつむいたまま呟く。大希達も、さくらも、健も、一斉に理加の方を見た。健は彼女の手元を見つめたまま、静かに呟いた。

「それって、あの映画だよな」

理加はこくりと頷いた。

「……ほんとは、私もあんな話ばかり話だと思ってた。でもさくらが肩を叩き、その話を遮った。顔を上げた理加に、さくらはそつと微笑んでみせる。

「だめ。この先を変に捉えたらだめだよ。来るものは来るかもしれないし、来ないかもしれない。どんと構えて、来たものに対処しよな？」

「うん。そうだね」

さくらに励まされ、理加は小さく微笑んだ。二人の友情の暖かさに、周りもわずかに顔を綻ばせた。しかし、そんな彼らにいきなり次の試練が振りかかってくる。

『ニュースです。現在、沖縄に上陸した台風二十五号が、さらに勢力を強めて北上しております。このままの速度で北上すれば、明日未明に本土へ上陸するものと見られています。非常に強い大型の台風で、沖縄では現在毎時百ミリの大雨を記録しています……』

地震の次は季節はずれの台風。六人は呆然としてラジオを見つめていた。

風が鳴り、あられ混じりの雨が天幕を襲う。炊き出しを買って出ていたさくらと理加は、天幕の中で豚汁の様子を見ながら、不安そうに天幕に雨あられが当たる低い音を聞いていた。手を休め、理加ははためく天幕の壁を見つめた。

「こんな状態で、みんなは救助活動しているのね……まだ暴風域に入っていないし、これからもっと強くなるのに……」

さくらも理加と同じ方角を向いて頷いた。常に微笑みを絶やさない彼女も、この日はかりは少し表情が曇っていた。

「そうだね。この天幕だって、いつまで持つか……」

さくらが、天井の骨組みを見上げると、いきなり入り口が開き、ずぶ濡れになった大希と剣人が姿を現した。さくらと理加に気付くなり、入り口の方を指差しながら大希は大股で二人に近づく。

「さくら、佐藤。救急救命センターに本部を移す。撤収だ」

さくらと理加（苗字は佐藤といった）は顔を見合わせ、納得した顔で頷きあった。救急救命センターは、ここから一キロと少し離れたところにある。少し現場から離れてしまいが、新たな本部には適任だろう。

「この豚汁はどうするの？」

「それはそのまま蓋をして運ぶつもりだ。重いだろっから俺達が持つ」

そう言って密封用のプラスチックの蓋を取った剣人に、さくらは両手を胸の高さに上げながら尋ねた。

「ねえ、じゃあ私達はもうしたらいい？」

「ん？ ああ、火の始末と、そこら辺の物を片付けてくれ。終わったら、天幕の撤去を手伝え」

剣人は天幕の中央に寄せられた段ボール箱を指差す。調理道具などが入っていた。さくらはにっこり笑って頷いた。



「わかった。じゃあ、救命センターで会おうね」

「お、おう」

彼女の笑顔に思わず見とれた後、剣人はぎこちなく頷き返した。

外では、透明な合羽かっほに身を包んだ健と未成が必死に負傷者を車の中に運んでいた。

「大丈夫ですか？ 肩貸しますよ？」

健は、昨日助けた女性に声をかける。右足のふくらはぎが縦に裂けていた彼女は、全く歩行不能というわけではないようだ。が、それでも顔に血の気はないし、立っているだけでも相当苦しそうだ。それでも、彼女は気丈に首を振った。

「気にしないで下さい。私は大丈夫ですから。それより、動けない人を助けてあげてください……」

だが、その消え入りそうな声は、雨が地を叩く音と風鳴りに阻まれ健に届かない。戸惑った顔で女性に歩み寄る。

「今、何と……」

女性は深く息を吸い込み、声を張り上げた。

「私に構わず！ 行ってください！」

その勢いに押されて健は飛び上がり、慌てて敬礼した。

「り、了解！」

途端、天幕の中から未成の声が飛んできた。

「健！ こつちを手伝って！」

「今行く！」

右足を引きずりながら警備車に向かう女性を見送り、健は天幕に飛び込んだ。未成は、頭に包帯が巻かれた男性の足元にひざまずき、担架の片一方を握っていた。

「健、早くこつち持って！」

「あ、ああ」

健はすぐさま負傷者の頭側に膝まずき、未成と一緒に担架を持ち上げ、天幕を出た。間を置かず、激しい雨、身を切る寒さが健達を

襲った。

「さつさと運ぼう。この寒さは体に毒だ！」

あられの激しさに目を開けていることができず、健は顔をしかめながら未成に叫んだ。

「わかつてる！」

未成も大声で答え、いそいそと二人は救急車を目指していった。

そして、井上は一人の部下と共に遺体を青ビニールシートで包み、トラックに積み込んでいた。

「井上さん。この人達はどこに運ぶつもりですか」

雨除けに警帽を目深に被った部下は、その視線を下に向けたまま尋ねる。井上は遺体を丁寧に降ろし、押し殺した声で答えた。

「体育館に協力をもらった。救命センターにはスペースがないからそつちに運ぶ」

「了解しました。……すみません」

冷静に受け答えしようとした彼だったが、急に喉をつまらせ、さらに警帽を目深にかぶってその場を後にした。井上は沈痛な面持ちでその背中を見送り、わずかに死臭が漂う荷台の中を見回した。その中には、変わり果ててしまった彼の妻もいるのだ。警帽を深く被ったのは、雨除けのためだけではないだろう。

「あいつには、少しそつとしてやる時間をやらないとな……」

呟きながら、井上はそつと遺体達に手を合わせ、静かにトラックを後にした。すると、大希が水たまりを踏みながら駆け寄ってきた。後に剣人も従えている。

「井上さん！」

「ああ。大希か。炊き出しの天幕は片付け終わったのか？」

「ええ。今荷物を救命センターの方へ向かわせました」

「そうか……佐藤理加、とか言ったか。彼女自身も大変な目にあつたのに、よく働いてくれる……さくらもだ」

「ええ。私達にできることはこれくらいだからって、ずっと言っ

います」

井上は長いため息をついた。普段の強気な表情が失せ、その肩も少し小さく見えた。

「あの兵士達はいまだに黙秘権を行使し、何も口を割らないそうだが、何か隠しているのは自明なのに、その正体を知ることができないとなると、これほどもしかしい事はないな」

剣人は頷き、重たくなった帽子のつばに触れる。

「ええ……僕達には情報が少なすぎます。ただでさえ天災が断続的に襲ってきているのに、あんな訳のわからない兵器にも襲われている、たまったもんじゃありません」

井上は黙り込んだ。うつむき拳を握りしめ、どこかを凝視するよくな顔をしていた。対応は後手に回り、それをどうにかすることもできない。その悔しさがにじみ出ていた。大希も無表情で井上の目を見つめていたが、やがて顔を上げた。

「でも、守り続けましょう。ここで頑張らなかつたら、僕達はただの給料泥棒です。井上さん、あなたには鬼でいてもらわないと困ります」

井上は顔を上げ、微かに笑った。

「……そうか。覚悟しとけよ」

救命センターの一階は、設備が一変した。待ち合い用のベンチは並べられて簡易なベッドと変わり、安静が求められる患者が寝た。病棟のベッドの空きが少なく、重体患者しか寝せられなかったのだ。そして、床には毛布が敷かれ、軽傷の人々が雑魚寝した。勤務中の医師が総出で手当てに回り、ロビーは戦地のようになっていた。それでも、屋内というだけでかなり気が楽になったのは確かだった。

「何とかなつたな。この先もこの調子の対応ができりゃいいけど」

さくら達が作った豚汁で体を暖めながら、健は呟く。いつもの三人が集まって、病院の隅に設置されたテレビを見つめていたのだ。

今回の事件は深刻に取り上げられていた。曲がりなりにも久宇慈は東京のお膝元であるし、緊張するのも当然だった。レポーターが合羽を着込んで現場中継していたが、そのレポーター以外にも、カメラの前で喋っているらしい人影が映っていた。

「見てないで手伝え！ って感じよね」

いきなりつつけんどんな声がして、三人は思わず振り返った。いつの間にかさくらが隣にやってきて、腕組みをしながらテレビを見つめていた。彼女の目には、カメラの脇で必死に動いている自衛隊員しか映っていない。大希も頷いた。

「まあな。……後一時間遅かったら、俺はあいつらにつつかかってたかもしれない」

大希の言葉を聞き、健や剣人はテレビに向かって鼻を鳴らして笑った。一時間後には、大希達が捜索・瓦礫撤去をしている手はずになっっていたのだ。

「まあ、適当に報道させといてやれ。手伝ってくれたところで、足手まといかもしれないしな」

剣人が含み笑いをしながらさくらに目配せしてやると、さくらも小さく肩を竦めた。

「そっか。その可能性もあったわね。なら、ちよつと見届けてやるとしますか……」

そう言っただけで彼女がため息をついた時、急に映像がおかしくなった。何かもやのようなものが映り込み、さらに映像が歪んだのだ。四人が戸惑っている、いきなり私語がテレビに飛び込んできた。『引っ張られてる』『逃げるべきだ』と。そうはなしているうちに、スタジオからの問いかけも聞かずに呆然としていたレポーターが悲鳴と共に地面に倒れた。急にカメラの映像が霧に包まれたかと思うと大きく揺らいで下に落ち、何かが割れるような音と共に映像がブラツクアウトした。

四人どころか、テレビを見ていた人々は皆息を呑み、にわかに口ビーが騒がしくなった。四人も目の前で起きた奇々怪々の事態に戸

惑いを隠しきれずにおろおろしていると、背後に理加がのっそりと現れ、独り言のように口にした。

「カマキリが出たの、この後なの……」

「何だつて！」

大希はテレビを注視した。突如起きた事態に動揺しながら、スタジオのアナウンサーは決して時計塔広場には近づかぬよう久宇慈の市民に呼びかけている。大希は周囲で恐怖に怯える人々を見つめた。青い顔をしてただただ黙りこんだり、自衛隊員の安否を気遣う人もいた。テレビの音が遠くなり、大気の耳には豪雨の音がよく聞こえるようになっていった。そして、大希は目の前でカマキリが崩れ落ちていく光景を思い出した。それは、とある記憶とリンクする。以前に見た夢だ。あの時も、カマキリは眼前で崩れた。時計塔の前から霧のように立ち現れ、そして自分に襲いかかってきたのだ。デジヤルヴユ。頭の中に、何かが閃いた。

「おい、大希？」

健の声が、大希を思案の海から引き上げた。大希はしばしばんやりとして目の前を見つめた。心配そうに顔を曇らせ、さくらと理加がしきりに手を振っていた。大希は一瞬目を閉じた。心臓の鼓動が聞こえた。冷や汗がうなじを伝うのもわかった。けれど、大希はさくら達の手を退け、出口の方へと足を踏み出した。

「ちよつと、俺行くよ」

「行くつて、一体どこに？」

大希はさくらが伸ばした手を軽くいなし、脇目も振らずに出口へ向かって駆け出した。

「おい、待て！」

剣人が叫んだが、それは通り抜けた影が鎮めていった空間に、虚しく響くだけだった。

街に重く響き渡る豪雨の中、大希は南広場を目指してひた走った。

大粒の雨は、もはや雹ヒョウのように冷たく、突き刺さった。合羽は最早役に立たず、身を切るような寒さが徐々に大希の体を侵し始めていた。それを振り払うかのように、大希はさらに疾く走った。夢と現にまたがるものを確かめるために。

次第に、広場の方から雨の音も凌ぐ喧騒が聞こえてきた。何かが破裂するような音。大希はそれが銃声だと気が付いた。息を潜め、一応腰のホルスターに手を伸ばす。しかし、その手は何度も宙を掻く。休憩中は武装を警備車に保管していたのだ。大希は丸腰のまま飛び出したことによく気がついたが、今更一キロの道を取って返すわけにもいかない。

「どうせ効きやしないよな」

大希は覚悟を固めた。水跳ねの音も出さないように気を払いながら、ビルの陰に身を潜め、南広場の周辺を窺った。

そこにいたのは、巨大なサソリとクモだった。白い体を持ったサソリは、二対の鋏はさを振り上げ、尾をあちこちに向けて、その攻撃的な様子を余すところ無くむき出しにしていた。右の鋏の間にはガトリング砲のような銃口が覗き、左のハサミの間には、以前現れた兵士達が持っていた武装と同じ、メガホンのようなものが備え付けられている。尾の先には、ひどく刺々しいパラボラアンテナが付いていたが、それがどんな武装なのか大希に知る由もなかった。夢でサソリはあの武器を使っていない。

サソリは瓦礫と化した建物を、今度こそ完膚なきまでに破壊しようとしていた。ガトリング砲を瓦礫に打ち込んで石ころのように砕き、メガホンを使い、ジェット機のような轟音をさせながら粉々に破碎する。大希は苦痛に顔を歪めた。まだあの中には助けを待っている人がいるかもしれない。その望みすらもサソリは壊そうとしていた。

自衛隊は、用意している兵器の全てを以てこれを阻止しようとしていた。しかし、それを銀色に輝くクモは嘲笑うかのように防ぎ止

め、無に帰っていた。サソリに向かつて放った戦車砲、手榴弾はクモの体の至るところから放たれる光線に打ち落とされる。マシンガンの弾は流石に撃ち落とせなかったが、そもそもサソリが受け付けない。『必要最小限』とされながら、世界でも有数と噂されていたはずの『実力』。それは、サイバー兵器の前には全くの無力だった。

大希は一瞬足が竦んだのを感じた。自衛隊が全く敵わない兵器に向かつていこうとする自分が、ひどくバカバカしくなった。だが、大希は予感してもいた。あのクモもサソリも夢に出てきたのだ。あの夢はただの幻じゃないはずだ。きつと何かを暗示しているのだ。……やってみるだけの価値はある。絶対に。

大希は駆け出した。瓦礫と一緒にたにされないよう、サソリの動向に気を配りながら走り、南側から近づいていった。銃を構えた自衛隊員の横を走り抜け、制止も聞かずに大希はサソリに向かつて叫んだ。

「止まれ！ このサソリの化け物！」

サソリは瓦礫に向ける手を止めた。その赤く光るライトで大希を一睨みすると、ゆっくりとその体を正面に向ける。

「Follow the given command！」

サソリは銃を開き、ガトリング砲の狙いを大希に定めた。大希はもう体が震えてどうしようもなかったが、それでも目を見開いて踏ん張る。来るなら来いという気分だった。レーザーポインターの赤い印が、大希の胸を捉える。自衛隊員達は思わず固まってしまった。助けに行こうと思っても、体が全く動かない。一人の警察官が蜂の巣にされてしまう光景を思い浮かべることしかできなかった。

しかし、当のサソリがおかしい。狙いを定めているはずなのに、中々撃とうとしないのだ。それどころか、いきなり胸を捉えていたはずのレーザーポインターが震え始める。大希はサソリの顔を見た。その目のライトが明滅し、よく見るとその体も震えていた。

「E-cord No.000. I cannot follow

W t h e g i v e n c o m m a n d . . . . .」

突然サソリがそう呟くと、目のライトから光が失せた。そのままサソリは、そしてクモまでも、いきなりその場に崩れ落ちた。大希は呆然としてガラクタになった兵器達を見つめる。

さんざん自衛隊を苦戦させていたサイバーの末路は、あまりに呆気ないものだった。



しばしの沈黙。大希は棒立ちになったまま、自衛隊員は撃ち方の姿勢のまま動かない。サイバー兵器は身じろぎ一つせず、不気味な雰囲気を保って黙り込んでいた。

高く鳴る風に巻かれ、大希はふいに自分の今ある状況に気がついた。いつの間にか雨は止み、雲の切れ間から覗く月が、サイバー兵器を青白く浮かび上がらせていた。

「やっぱりだ。やっぱり動けなくなった。……一体どういうことなんだ？」

大希は目の前の事実を訝しむばかりで、背後から近づく人影に気付かなかった。

「おい」

いきなり低い声がして、大希は思わず飛び上がってしまった。振り返ると、自衛隊の一人が目の前に立っていた。彼もまた戸惑ったような表情をしていた。大希より頭一つ背の高いその男が、大希の肩に手を置き、半ば詰め寄るような口調で尋ねた。

「お前、奴に何かしたのか？ このわけのわからない兵器が一瞬で黙り込むようなこと」

「僕は何もしてません。ただ石を投げただけです」

大希がのけぞりながら首を振ると、その男はため息をつき、周囲で固まっている同僚達を見つめた。未だに謎の兵器を警戒して銃を向けているものもいれば、粉々にされてしまったビルの瓦礫を見つめ、呆然としているものもいた。男は大希に向き直り、責任感に溢れたその目を見つめた。

「ともかく、何て無謀な事をしたんだ。死んでもおかしくなかったんだから、わかってるのか？」

大希は不気味なガラクタとなった兵器を見つめる。夢で同じくこうなったから、と言えるはずもなく、男に向かつてただ頷くことし

かできなかった。

「ええ。十分に承知しておりましたよ。でも、なんかこう、まだ生存者がいるかもしれないって望みをこのサソリに壊された気がして、黙っていられなかったんです」

自衛隊の男は一旦目を閉じ、それからゆっくりと見開いた。口元に疲れの見える小さな笑みを浮かべ、帽子を取って頭を搔いた。

「俺だって、あの山やこの山が壊されて、望みもまとめて壊された気分だ……確かに、俺がお前の立場だったら、おんなじ事をしてたかもな。人を助けるために動いてたら、やっぱりそうなっちゃうのかもしれない。面倒くさい性分だな。俺達は」

男はにやりとしてみせる。その様子に、大希は顔を綻ばせた。

「ええ、そうですね」

大希が頷くと同時に、呻き声がどこからか聞こえてきた。まだサソリの手が及んでいなかった瓦礫の方からだ。ふと大希が足元を見ると、カメラの残骸が転がっていた。大希は急にテレビの存在を思い出した。

「あ。そういえば、メディアの人達がいたじゃないですか！ あの人は？」

自衛隊の男はため息をついた。しかめっ面もして、どうやらメディアの人々にいい印象を持っていないようだ。

「メディアの奴ら？ 吹っ飛んできたから助け出してやったさ。いい迷惑だよ。手伝わないくせにピーチクパーチク……何だ。あそこにもいたのか」

「まあ、精々この街の『惨状』とやらを伝えてもらおうじゃないですか。希望を伝えるよりショックを与える方が、人気出るんですよ。大希はため息をつき、呻き声のする方へと全力で駆け出した。文句は言うが、やはり放っておけなかったのだ。男も鼻を鳴らすと、重い足取りで仕方なさそうに後に従っていった。

その様子を撮っているカメラが一つ。頭にべっとり血を付けたままのカメラマンが、じっと大希の姿に焦点を合わせ続けていた。

大希は、そのまま夜明けまで救助隊の交代時間を待つことにした。知り合った自衛隊の男曰く、これより自衛隊は付きつきりでの近辺の防衛に当たるつもりらしい。一式戦車だのなんだの、最新鋭の装備が時計塔広場に来るということで、時計塔の前は迷彩服が盛んに行き交うようになった。大希は、瓦礫の撤去を手伝いながらその様子を見つめていた。

「大希！」

そんな折、さくらの大声が、東雲の空を突き抜けるようにして飛んできた。日頃から大声には慣れていても、その気迫には参ってしまふ。大希は飛び上がって南の方を見る。そこには、剣人や健達の先頭に立ち、般若面のようにその目をつり上がらせたさくらがいた。大希はまともにその顔を見られず、視線は明後日の方に向いた。

「さ、さくら……」

さくらは舌打ちをした。ここまで態度が悪くなるということは、滅多になかったほどの怒りようだということだ。大希はつかつか歩いてくるさくらを見て震え上がった。彼女は大希の目の前で止まり、白い目で大希の瞳を射抜く。大希は息が詰まった。

「このバカあ！」

さくらの全霊を込めた平手打ちが大希の頬を鋭く捉えた。大希はよろめき、瓦礫に倒れ込んでしまった。頬に手を当てると、鈍い痛みが熱と共に感じられた。出端小手の名手が受けきれない一撃ではなかったが、受けないと失礼に値すると大希は思ったのだ。今の痛み以上にさくらが心を痛めたことは、そのつり上がった目に浮かんだ涙、そして声の裏返った悲痛な叫びですぐにわかった。大希は、体を起こして膝立ちになり、さくらに向かって頭を垂れた。

「ごめん。さくら、心配かけて」

さくらの頬を一筋涙が伝った。しかし、彼女はあくまで表情を改めずに腕組みする。

「みんなにも言ったら？」

「ああ。もちろんそうする」

大希はゆっくり立ち上がると、じつとこちらを見つめている五人の方に向かった。さくらのように怒りを全身から立ち上らせているようなのはいなかったが、皆一様に神妙な顔をしていた。

「みんな、ごめん」

大希は静かに頭を下げた。

「俺、夢中だったんだ。何とかしないと、何とかしないと、悪かっと思つたら、勝手に体が動いてたんだ。心配かけたと思う。悪かっ  
た」

剣人は肩を竦めてため息をついた。頭のとっぺんから足の先まで見つめて、そこに一分の怪我也無いとわかると、ようやく表情を緩める。悄然としている大希の肩を叩き、にやりとした。

「まあ、お前に怪我也ないことだし、さくらに一回きつい張られ  
たつてことで、とりあえず許してやるよ、な？」

剣人は健達の方を見た。健もまた表情を緩め、大希の肩にわざとぶつかりながら歩き出した。

「おう。そろそろ他も来るぜ。一足先に作業開始だ」

大希はぎこちなく健の姿を目で追い、途中でさくらの背中に視線を切り替えた。まだ彼女は肩を震わせている。下手なことは言えないぞ。大希は心のなかで独り言を呟いた。すっかり意気消沈した様子で瓦礫に向かおうとしていた大希を、未成はしっかりと見ていた。わずかに微笑むと、大希の隣に駆け寄り、そつとその肩を叩いた。

「大希。僕もさくらさんの機嫌を取つてあげるから、元気出しなよ」  
大希は首を傾げた。機嫌を取ると言つても、何か買つてあげたくらいであの機嫌が治ると思えないし、変なことを言えば火に油だ。一体未成はどうするつもりだろう。だが、やはりその気持ちはありがたかった。大希は微笑み返し、小さく頷いた。

「ああ。まあ、手伝つてくれよ」

二人は肩を並べ、黙々と瓦礫をかき集めはじめたさくらの方へと歩いていった。

言葉を尽くして、何とか二人はさくらをなだめた。つつけんどんな態度は相変わらずだったが、彼女も思いきりひっぱいたことである程度はすつきりしたと言って許してくれたのだ。ようやく安心した大希は、先日以上に気合いを入れて瓦礫の撤去作業に臨んでいた。まさに不幸中の幸い、サソリが瓦礫を粉碎したお陰で撤去の効率はかなり良くなっていたのである。

だが、土気の高まりを一気に冷ます輩が突然現れる。ワゴンや何やら、いきなり大きな車がやってきたのだ。何の気も無しにその車両を見た大希は、一気にその顔をしかめた。

「またかよ……変にジャーナリズム発揮して。来るだけ迷惑だったのに」

「怪我した人もいっぱいいるのに、よく頑張るね」

未成は時計をちらりと見ながら頷いた。ワゴンに目を向けると、慌ただしくマイクやカメラなどの機材を揃えている人々が見える。彼らは本当に手伝う気がないらしい。レポーターはスーツ、裏方はお洒落な私服だから一目でわかるというものだ。再び不機嫌な表情を取り戻し、白いウィンドブレーカーに身を包んでいるさくらが彼らを睨んだ。

「取材する前に手伝えって」

「まあ、変に足手まといなことされるより遙かにましだった」

大希が苦笑いしながら言うと、さくらは仏頂面で肩を竦め、剣人の方へとすたすた行ってしまった。その背中を目で追う未成の横でいきなり大希が表情を曇らせた。取材陣が、明らかに自分達のいるところを目指しているのだ。さくらは目ざとくそれに気づいて離脱していたのだ。右に倣えといきたいのは山々な大希だったが、それはもう無理だった。

「未成、お前も逃げれば？」

「いやいい。近くにいますよ」

二人がそんなやり取りを交わしているうちに、取材陣はとうとう

二人の前にやってきた。制服の襟をさり気なく整えた未成だったが、彼はいきなり裏方の一人に肩を掴まれた。未成は戸惑い、キャップを被った青年の顔を見た。

「え？ 一体これはどういうことですか？」

「あなたは少し向こうに行きましょう。カメラに映らないところで作業しててください」

脇に押しやられそうになり、未成は目を丸くして男を押し返そうとした。

「ちょっと待ってくださいよ。どういうことですか？ あなた方に作業を指図されても困ります」

「私達は『今村大希』さんに用事があるんです。彼を取材したいんです」

抵抗の意を示している未成に、唇を一字に引き締めた女性レポーターがにべもなく言い放った。未成は顔をしかめ、一層強く裏方の男を押し返す。

「無茶苦茶じゃないですか。自分の事情で復興作業を邪魔しないでくださいよ。また奴らだって来るのに」

大希は未成の口を手で制した。白い目をして、とことん嫌気の差した様子でレポーターを睨む。

「やめとけ。こいつらは俺に用事があるんだろ？ 未成が突っかかる必要は無いさ」

そう言っつて、大希はレポーターに詰め寄った。

「ここじゃ作業の邪魔だ。場所を移そうじゃないか。そしたら、どういっつもりかわからねえけど、取材受けるよ」

「そうですか。ならそうしましょう。『久宇慈の救世主』今村大希さん」

一本調子で答えたレポーターに向かって、大希は顔を歪めて思い切り怪訝な表情をした。

「何だよそれ」

レポーターはタブレットを取り出し、いきなり動画を再生した。

暗闇に映る影。白く輝くサソリに向かい合っている大希の姿だった。

「これは……俺？」

大希はタブレットを食い入るように見つめた。巨大な白サソリは自分に向けてガトリング砲を向けている。暗闇の中の大希は棒立ちでその姿を見つめていた。見る間にサソリは細かく震えだし、目のライトも激しく明滅する。そしてついにそのライトが消えて、サソリは死んだように崩れ落ちた。大希は眉根にしわを寄せ、レポーターの顔を見つめる。

「どこでこれを撮ったんですか」

「我が局のカメラマンが、突っ込んだ瓦礫の影から撮っていました。今は病院で寝込んでおりますが」

四角四面に答えられ、大希は肩を竦める。ロボットみたいだな、と思わず口をついて出てしまった。しかめっ面のままの大希に、赤いランプのついたカメラが向けられる。大希がそのランプを食い入るように見つめると、いきなりレポーターが踵を返し、カメラに目を向けた。

「こちらが久宇慈に現れたサイバー兵器を停止させたという、今村大希さんです」

「あ？」

大希はもう顔が歪みっぱなしだった。止まれと思いはしたが、停止したのは単なる偶然だろう。レポーターの腹の中が全くわからなくなってしまった。

「一体どのようにしてあの兵器を停止させたのですか？」

レポーターは真剣な顔で大希に迫る。圧倒的なサイバー兵器と、それを停止させた男。独占スクープにできるとなれば、取材陣達は興奮に鼻を膨らませずにはいられない。大希は目ざとくそれに気がついていて。改めてメディアの視聴率主義を知ると、ため息も思わずこぼれてしまう。



「俺が知るわけないだろ。勝手にあれが崩れたんだから」

「勝手に？ それでは困ります。何かしたのではありませんか？  
本当に何もしなかったんですか？」

しつこい問い返しに、大希はうんざりした。何もしていないのだから答えようもない。大希はいらいらと語気を強めた。

「だから、何もしてねえつて。石とか投げたぐらいだよ」

相変わらずレポーター達は退く気配が無く、その表情にも揺らぎがない。彼らの思考が読み取れず、大希はいらいらしている上に緊張までしてきた。レポーターは一瞬目を閉じ、それから大希の口元に向かってマイクを強く突き出した。

「あなたは何かを強く願ってはいませんか？ どうですか？」

「どうつて、そりゃ……」

あの兵器が止まって欲しいと願ったさ、と言いかけた。しかし、剣士として植え付けられた本能がすんでのところで口を止める。出小手を返される時と全く同じだ。心がぶれて、せつかちになってしまふ。そこを餌食にされるのだ。大希は深呼吸して、気を練り直した。

「待つてください。ずいぶん具体的な質問をなさるんですね。おかしくないですか？」

口調は丁寧になったが、その裏には大希の鋭い攻めがあった。その凄みに押され、レポーターの目が泳ぐ。

「おかしい？ どこかですか？」

「だって、サイバー兵器を倒したんですね。どうやったんですか、で普通済むじゃないですか。それなのに、根掘り葉掘り聞く必要があるんですか？」

大希はレポーターの心にできた空白を逃さない。さらに攻め、レポーターから隙を引き出しにかかった。彼女は唇を一瞬噛んだ。心なしに、顔色が少し悪くなったようにも見える。

「そ、それは……曖昧でなく、きちんと私達の質問に答えて欲しくて……」

しどろもどろになった彼女の言葉が浮いた。そこへ大希は一気に飛び込んだ。

「答えて欲しいって……あなた方が望むように、って事ですか？ 単なる偶然を無理やり必然に仕立てて、スクープしようってことですか？」

舌鋒鋭く迫った大希に押される一方で、取材陣は言葉をつけずにいた。そこを見逃す大希ではない。一気に決めにかかった。

「たとえば、僕が『止まって欲しいと思った』、と答えたとしましょう。もしたら、あなた方は僕が『超能力』を使ったとかなんとか、書くつもりだったんじゃないですか？」

取材陣の目が曇る。丁寧に攻める段階は終わった。後は一気に攻め立てて一本を取るだけだ。

「謎の武装集団の登場で、市井は今揺らいでいる。好きなだけ適当な事を抜かされても、それを信じてしまふ。去年もおんなじ事があったな。震災の混乱の中で、どれだけのデマが溢れたか。お前らはいやしくも公共の電波を使ってそれをしようとしたのか？ 俺を使つて、何が何だかわからないサイバー兵器を使つて、視聴率を掻き集めようともしてたのか？ どうなんだよ！」

とうとう彼らは大希の圧力に屈してうつむいた。だんまりを決め込み、これ以上は何も語ろうとしない。大希は舌打ちした。この世には黙秘権というものがある。これ以上詰め寄るのは無理だった。鼻を鳴らすと、大希は踵を返す。何はともあれ、これくらいこてんぱんにやり込めてやれば当分懲りるだろう。大希はゆっくりと止めを刺す。

「ほら。何もしないなら帰ってくれよ。道の真ん中にいられたら、瓦礫を運び出すトラックが動けないだろ」

まさに大希の言う通り、瓦礫を山のように積み込んだトラックが、出発を待ち構えていた。そろそろとメディアの人々は顔を見合わせ、少々青くなつた顔で頷きあつた。素早く機材を抱え、彼らはそそくさといなくなる。破壊された市街地の状況を映そうという気は無い

ようだ。自分もトラックの通る道を空けながら、大希はため息をついた。

「視聴率が大事か。これじゃあどうしようもないな……」

未成は重い足取りで戻ってきた大希に向かって微笑んだ。

「お帰り。何とかなつたみたいだね」

「何とかしたさ。危うくへんてこりんなヒーローに持ち上げられるところだった。あんなサイバー兵器、俺が倒せるわけないだろ」

いまだにしかめっ面でいる大希を、未成は神妙な顔つきで見た。

それからふと視線を時計に落とす。もうすぐ朝の八時、そろそろ差し入れが入る頃合いだった。

「まあね。でも、どうしてサイバー兵器はいつも最後には止まるんだろう？」

大希は時計塔の方角を見て目を細め、サイバーの崩れていく姿を思い浮かべた。奴らは動かなくなる寸前、何か言っていたのを思い出した。

「イーコードナンバーオーオー、って言ってたんだよ。多分一番初歩的なエラーが奴らに起きてると思うんだよな」

「初歩的なエラー？」

「ああ。バッテリー切れか燃料切れだな。俺にはそれくらいしか思い付かない」

未成は大希の後ろで感心の表情を見せた。

「へえ。なかなかいい線ついてるかもしれないね」

ひとまず無事に作業を交代し、大希達は正午に戻ってきた。食事をして仮眠して、次の活動に向けて鋭気を養おうというところだったが、そんな思いを忘れさせるような緊張感が、その頃病棟を包んでいた。

「どうかしたのか。みんなテレビに見入っちゃって」

ロビーに入るなり、健はさくらに尋ねた。彼女は昼食を作るため、一足先に病棟に戻ってきていたのである。皆一様にテレビを見つめ

ている怪我人達の真ん中に立ち、さくらは目を丸くして、眉を下げ、すっかり当惑した顔をしていた。

「ねえ。これ見てよ」

「あ？」

大希は先ほどの事もあって、著しく不機嫌になった。だが、一応幼馴染の言うことは聞いておくことにした。大希は横目でテレビを見つめる。そして、映っていたニュースは一気に大希を引き込んでしまった。

「アメリカ軍、日本全国から一時撤退？」

テレビの中では、防衛大臣がマスコミに対して汗をかきながら答弁していた。その顔にも驚きの色が浮かんでいる。この事は、やはり誰もが想定しない事態らしかった。

『撤退の理由は知らされておりませんが、十時間ほど前、神奈川県久宇慈市に出現したものに酷似した兵器がニューヨークにも出現したという情報がありますので、それが理由とみて間違いないと思います』

「日本全国からだけじゃないの。アフガンからも他からも、全部。それに、アメリカだけじゃないの」

さくらが付け加えて言うことには、先進国はもちろん、中国にもかのサイバー兵器が出現し、各国の市街を破壊したということだった。ニュースでも、各地の映像が絶えず報道されており、人々も不安な表情を隠せず、ぼそぼそと隣り合った人同士で小さく会話を交わしていた。テレビを見つめながら、未成はぼそりと呟く。

「まあ……他の街はこっちも広場だし……」

「え、なんか言った？」

大希が尋ねると、未成は慌てて首を振った。そして取り繕うように腕時計を見る。あと十分で十二時半だ。未成はふと広場の方角を見つめる。目を閉じ、手を強く握り締めた。骨が白く浮き出て、爪が深く手のひらに食い込む。未成は俯きがちで、何かに少し迷っているかのようだった。だが、やがて顔を上げて、まっすぐに広場の

方角を見据えた。

……僕は変えるって決めたんだ。もう迷わない。

未成は手を開いた。世界の緊張を伝えるテレビに背を向ける。怪訝な顔をした大希の手が、肩に伸びてくる。しかし、未成はそれを振りきって、陽の光が差し込んでくる出口の方へと走りだした。

時計塔南広場跡地。一体どれだけの人々が犠牲になっただろうか。オフィスビルはまだいい方だ。まだ朝方だったために、ホテルの瓦礫の下からはたくさんさんの遺体が見つかった。特にひどいのは、非常階段、エレベーターとおぼしき場所だ。折り重なるようになった数十人の遺体が見つかったのである。未知の恐怖から逃れる手段を見失い、とにかくその場を離れようとしていたのだろう。皆一様に顔を絶望に歪めていた。

それを見た人々は、やはり心をひどく痛めた。そして同時に、再びかの兵器が現れた時は、必ずこの場に食い止め被害を広げるまいと、決意を新たにしていた。

しかし、今まではほんの露払いに過ぎなかった事を、今まさに思い知らされるのだ。

「皆さん！ 一旦退避してください！」

未成が瓦礫の片付いた跡地に立ち、大声で叫んだ。作業に没入していた人々は、皆怪訝な顔をして彼の事を見る。一番近くにいたボランティアの男が首を傾げて未成の真剣な瞳を見つめた。

「退避？ 鑑識さん、どうして退避しないとならないんだ」

男の低い声に合わせて、周囲の人々も頷く。未成は頭を掻き、困ったような顔をした。そんな何気ない仕草だが、どこかに強い思いが感じられて、人々は何も言わずに未成の言葉を待った。

「……来るんです」

「え？」

「奴らが来るんですよ！」

未成は腹の底から叫んだ。その剣幕に、人々は思わずたじろぐ。よくよく考えてみれば、それらは前触れも無しに現れているような存在なのに、今の時点で登場を察知はできるはずもない。人々はそ

う思ったが、彼にはそんな考えを一掃してしまうような気迫があった。未成のすぐそばで彼の叫びを聞いた男は、おずおずと仲間達の方を向く。

「一旦下がりましょう。ここまで言われると、やっぱり何か起きそうな気がしませんか」

「は、はい。そうしましょう」

二人がその場を離れると、他の人々もそれに従って持ち場を離れ始めた。警察に自衛隊員も、不審な表情はしていたものの、やはりその場を離れようと遅れて動きだす。まさにその時だった。

急に重力が働き、人々の体を掴んで引き戻そうとはじめた。必死に広場から離れようとするのに、全く歩みが進まない。戦慄し、人々は今まで溜まっていた疲れも忘れて走り続けた。その背後に、身を切るような冷たさの霧が迫ってくる。足が滑り、宙に浮き上がった。そのまま霧の中へと引きずり込まれそうになる。その恐怖に人々が縮み上がった瞬間、今度はいきなり弾き飛ばされた。激しく地面に叩きつけられ、人々は苦しみに呻く。その背後には、にわかには信じがたい有様が広がっていた。

「来た……」

未成は立ち上がり、広場に現れた集団を見つめる。六体の巨大なサイバー兵器がいた。二体のカマキリ、二体のサソリ、二体のクモだがそれだけではない。上空にも、スズメバチのような姿をとったサイバーが浮いていた。

今回やってきたのはサイバー兵器ばかりではない。兵器の足元には、大きなバツクバツクを背負った兵士達の姿まであった。

「うわあ！ 来たあ！」

人々は悲鳴を上げ、散り散りになって逃げ出し始めた。脇目も振らず、とにかくサイバー兵器から離れようと走っていく。その真ん中に立ち尽くし、未成は不可思議な武装集団を見た。サイバーは、口々に任務開始の意を示し、近くの建物へと迫っていく。未成は様々な感情が入り交じった目でその姿を見つめ、それから時計塔の方

へと目を向けた。

戦車が火を吹いた。轟音と共に、その砲弾は一匹のサソリの長い尾を貫通した。尾は折れ地に落ち、異常を感じ取ったサソリが言葉にならない叫びを上げた。それを聞きつけた武装集団の一人が、タクトのようなものでクモを差し、サソリと自衛隊の間に振った。

クモは足早に動き、サソリの前に立ち塞がる。それと同時に二つ目の砲弾が尾のもげたサソリを追撃すべく放たれる。目にも止まらぬ速さの一撃は、今度こそサソリを貫いているはずだった。

だが、相手は人ではないのだ。クモの体の一点が光り、同時に乾いた破裂音が周囲を満たす。そして、爆せて原形を留めない程に歪んだ砲弾がサソリの足元に落ちた。クモは一番前の足を振り上げ、不気味な不協和音を立てて威嚇を始める。目の当たりにした隊員達は息を呑み、身体中の毛がそば立つのを感じた。だが、サイバー達の方にも動く気配は無く、双方睨み合う形になった。冷たい風が、二つの集団の間を吹き抜けていく。

そこにできた空白について、白銀のプロテクターを身に付けた兵士達が一気に散開した。サイバーに気を取られていた自衛隊員達はそれに気付くのが遅れ、何もすることができなかった。一人が悔しそうに歯を食いしばり、近くの隊員を指差して何事かを話す。了解の意を示して、彼は後方にある車両に向かって走りだした。それを見送り、男は一人頷いた。

「Follow the given command!」

自衛隊が攻撃の準備を整えたのと、サイバーがいつもの通りに叫んだのは同時だった。サソリが先手を切り、右手のガトリング砲を突き出し、狙いを定めにかかる。対して自衛隊は横一列にバズーカ砲を撃ち出した。十余の弾頭がサソリやクモに向かって一斉に襲いかかり、胸に響く轟音と共に炸裂した。巻き起こった灼熱の炎と眩い光に、隊員達は思わず目を背けて顔を手で庇う。



使い捨てのバズーカを地面に放り投げ、拳銃を腰から引き抜きながら、隊員達は静かに爆風が晴れるのを待った。一秒立ち、二秒立ち、次第に砂煙が薄れていく。その中で待ち構えていたのは、恐ろしい事態だった。

顔を上げた隊員達は、口さえきけなくなるほどの衝撃を受けた。その中に立っていたのは、紛れも無くクモのサイバー。ところどころに僅かな凹みがあるもの、ほとんど無傷のままだ。体の至る所から煙を漂わせ、目や体を光らせながら轟然と立ち尽くすクモは、すっかりとサソリのことを守り通していた。

自衛隊達は、動く要塞に苦悶の表情を浮かべたが、まだまだ諦めなかった。今度は二台の戦車が同時に砲撃する。しかし、それもクモは簡単に撃ち落としてしまう。鈍い音を立てて、ひしゃげた金属の塊が地面に転がる。その堅牢さに、隊員の一人が顔を青くした。遠くを見れば、カマキリとクモを相手に、他の隊の仲間が同じ事をしている。どんな攻撃もクモに飲み込まれ、全く有効な攻撃を与えられないでいた。男は天を仰ぐ。その視線の先では、スズメバチ型のサイバーが飛んでいた。見張りでもしているかのように、それは彼らの上空を行ったり来たりしていた。守らなければならぬ。そんな決意も、たった八体のサイバー兵器の前に揺らぎかけていた。

そして、自衛隊の猛攻を凌ぐクモの背中、ついにサソリが一步を踏み出し、ガトリング砲を突き出した。右の罅の間で、その銃口が銀に怪しく輝いた。

## 25th Period 死の運命

サソリのガトリング砲が火を噴く。その威力の前には防弾チョッキも普段着も同じだった。幾人もの隊員が、頭から地面に突き倒されたり、腹を突き上げられるように飛ばされたりした。生きている隊員達は、何とか戦車の背後に回って身を隠した。装甲は凹んだり、穴は開いたりするものの、致命傷を与えられることだけは免れていた。だが、戦車砲が通用しない以上、このままでは撃たれっぱなしで、どのみちやられてしまう。

「クモを何とかしろ！」

戦車の背後に寄りかかり、ある兵士が声を振り絞って叫んだ。その向こうでは、尾のある方のサソリがゆっくりとその尾の先端を戦車に向け始めていた。先端に備え付けられた銃口が怪しく光り、ぴたりと戦車に狙いを定めた。絶対に何かがある。無駄なことかもしれなくても、戦車はサソリを攻撃する他無かった。爆音と共に撃ち出された砲弾。やはりクモに弾かれてしまった。

「Follow the given command！」

サソリの目が一段と強く輝き、同時にその尾から眩い光が放たれた。その光線は、戦車の機関部を貫いた。鉄が弾ける鈍い音と共に戦車が爆発した。戦車の陰に隠れていた隊員達をも巻き込み、戦車は火の玉と化す。残された隊員達は、唇を震わせ、目を見開いてその光景を見つめていた。

誰もが今すぐ逃げ出したかった。こちらの攻撃は通用せず、サイバーの圧倒的な攻撃力の前にこちらは次々と倒されていく。だが、逃げるわけにはいかなかった。逃げればすなわち、久宇慈市の終わりを意味してしまうからだ。歯を食いしばり、一人が叫んだ。

「怯んだら駄目だ！俺達が逃げたらこの街はどうなる！」

隊員達は、静かに武器を握りしめ、サイバー兵器を見た。その目に確固たる意思を宿らせ、彼らは頷いた。

いきなり上空から耳をつんざくような轟音が飛んできた。隊員達も、サイバー兵器達も一瞬そちらに気を取られる。その視線の先にあったのは、三機の戦闘機だった。風を切り裂きながら飛んできて、三機は急降下しながらサソリやクモに向かってミサイルを撃ち込んだ。クモは目を光らせ、そのミサイルの迎撃にかかる。そこを地上の隊員達は見逃さなかった。

「今だ！ 撃て！」

一人が叫び、今度は全員がクモに向かってバズーカを撃ち込んだ。クモは戦闘機の放ったミサイルを撃墜し、上空で爆破する。それと同時に、十数発のバズーカをその背中に受けてしまった。いくら守るためだけに生まれた存在とはいえ、一発で戦車に致命傷を与えるような攻撃を一齐に受けて耐えられるわけは無かった。腹に当たる部分が一気に弾け飛び、後には弱々しく光るクモの頭だけが残されていた。サソリはガラクタになってしまったクモを見つめ、その目を明滅させた。まるで、同僚の死に驚いているようにも見える。その隙に、戦車が尾のないサソリに一撃を見舞った。頭が潰れ、そのサソリはそのまま崩れ落ちて動かなくなった。それも確認した最後のサソリが、目を赤く光らせて自衛隊の人々を睨みつけた。

「Annihilate！」

サソリが甲高い声で叫び、その尖った尾から再びレーザーを放とうとする。しかし、盾を失ったサソリにはもう反撃の機会などなかった。レーザーが放たれるより先に、戦車砲がサソリの胴体を捉えていた。サソリが動かなくなったのを確かめると、隊員達は、すぐにカマキリやクモと対峙している仲間たちの援護に向かった。

その頃、大希達は救急病院の周辺を哨戒していた。歩兵たちが散開したという情報が入り、大希達のいる地区も緊急体制に入っているのだ。久方振りに完全武装して、大希や剣人達は緊急病院をの端に捉えられる位置に立ち、その周囲に気を立てていた。

「ついに相手が本気出してきた、ってことか？ …… 相手がどんな

奴なのかもわからないけど」

大希は盾の握りの具合を確かめながら呟く。剣人はにこりとませずに頷いた。

「ああ。本当にわけがわからない。他の国もこんな風に襲われてるんだろ？ …… 案外、宇宙人が攻め寄せてるっていう話は本当なのかもしれないな」

「そんな事があつてたまるか」

大希は剣人の言葉に首を振って答えた。なまじ冗談とは言い切れない。だが、そんな話を信じてしまえば、自分の生きてきた世界の価値観全てが壊れてしまうような気がして、とても認めようという気にはなれなかった。健も強く頷く。

「そつだ。宇宙人なんて…… 日本を襲うんだつたら東京を攻めるだろ？ 何で久宇慈なんか襲つてくるんだ」

「理由など知る必要はない。死ぬ運命にある者が」

健の言葉を遮り、その背後からいきなり声がする。慌てて振り向くと、盾を並べて警戒している同僚たちの前に、三人の兵士が立っていた。じつとこちらを見て、あの奇妙な銃をこちらに向けている。「何を言っている！ 大人しく投降しろ！」

機動隊員達は、素早く銃を引き抜いて兵士達の方に向けた。しかし、彼らは自分たちに向けられた十余の銃口に全く動じることなく一歩前に踏み出した。

「我々の任務は、この土地より人を、街を消し去り、この世界に『干渉』すること…… だから、お前たちも死ね！」

兵士達は引き金を引いた。光線が前線の隊員の盾に命中する。途端に盾が白熱し、隊員達は叫んで盾を落とした。そこに、すかさず兵士達は光線を打ち込む。眩い光が胸に突き刺さり、肉が焦げる臭いが鼻を突く。そして、光線に貫かれた胸から鮮血が飛んだ。彼らには、断末魔を叫ぶ暇も与えられなかった。

「うわあ！」

呆気無く人の命が失われていく光景に恐怖し惑い、数人が腰を抜

かして倒れてしまう。だが、そんな彼らをも兵士は容赦しない。盾が外れて隙だらけになった胸をめがけてレーザーを撃ちこんだ。何も音はしない。吹き飛ばされもしない。ただ隊員達は心臓を焼き尽くされ、静かに絶命するのみだった。にわかにはこの事態を信じられぬという顔で、残された大希達三人は一瞬で命を奪われた仲間たちの亡骸を見て、それから兵士達の暗い目を見つめる。大希は歯の根が合わないほどに震えだしてしまった。自分もまさに死ぬかもしれないという恐怖は、身も心も凍りつかせるのだ。しかし、大希はそれでも盾を構え直して一步を踏み出し、震える声で叫んだ。

「どうして、どうしてこんな事を簡単にできるんだよ！」

「どうしてと言われたところで。言っているだろう。どのみちお前たちは死ぬんだ。誰が殺したところで同じ事」

びくりと体を震わせ、健は何度も舌を噛みそうになりながら叫んだ。

「狂ってる。そんな、そんな考え方、おかしいとおもわないのか！」

兵士は鼻を鳴らし、意にも介しない様子で首を振った。

「これが戦場だ。戦いだ。迷ったやつから死ぬ。それだけのことだ」

剣人は舌打ちをし、素早く銃を引き抜き、真ん中の兵士に向かって撃つ。だが、その銃弾は銀のプロテクターに阻まれ、兵士に傷一つつけられなかった。剣人は顔を歪めた。

「くそ……」

「わかったか。お前たちもここで死ぬということが……そろそろ話はお終いだ」

兵士は大希達に銃を向け、一斉に引き金を引いた。三人は思わず身を固め、目を固く閉じてしまった。

しかし、胸はいつまでたっても撃ち抜かれない。耳に引き金を引く音が何度も何度も聞こえてくる。大希達はうつすらと目を開き、目の前を見た。そこにいたのは、戸惑った様子で自分の銃を見つめ、引き金を引いたり、振ったりしている兵士達の姿だった。

「何故だ？ どうして撃てない！」

兵士達の声が上がらず、ほんの僅かな怯えも見えた。今まで存分にその脅威を振るっていた武器が、うんともすんとも言わなくなってしまうのだ。今や、彼らは丸腰同然だった。突然の状況に戸惑いつつも、大希達は頷きあつた。

「確保だ！」

大希は一足先に飛び出し、腰から引き抜いた警棒で兵士を打つた。堪えかねた兵士が身を庇おうと腕を持ち上げたところを、大希は鋭くその喉元を突いた。息を詰まらせ、兵士はその場に倒れ込む。そこを、大希は素早くその腕に手錠をかけた。

「何故だ……何故……」

「何故、はこつちだ。どうして……どうして俺の仲間たちは死なないといけないんだよ！」

兵士を引きずり寄せて叫ぶと、そのまま地面に突き倒した。拳を固く握りしめ、大希は静かに涙を浮かべる。健も、剣人も同じだった。血の海に倒れこんだ同僚、友人の亡骸を見つめる。一緒に汗を流して訓練し、時には馬鹿な話をして笑いあつた彼らはもうない。理不尽な現実を目の前に焼き付けられ、大希は吼えた。

「明人！ 涼！ 幸太郎！ どうして……どうして！」

健は亡骸の前で泣き崩れ、剣人は物も言えずにうつむいていた。真っ白な雪景色が、鮮紅に染め抜かれていく有様を、三人はただ見つめていることしかできなかった。

雪がうつすらと降り始めた冬の日暮れ。沈痛な面持ちで、大希達は友人の遺体がトラックに積まれ、市民体育館へと向かっていく光景を見つめていた。三人は恐怖や怒りで散々に心が痛み、表情が失われ、涙すらも忘れていた。そんな三人の後ろに、さくらが足音を控えてやってきたものの、三人が見つめる現実の重さを突きつけられ、さくらは結局三人に掛ける言葉を見失ってしまった。

「……ひどい」

喉から搾り出されるようにして出てきたのは、これだけだった。

飛び上がらんばかりに驚き、剣人は背後に振り返った。荒い息をして、見開かれた目をしていた。何とか声の主がさくらであることを飲み込み、剣人は表情に乏しいやつれた顔のため息をついた。

「さくらか。頼むから、変に驚かすような事するなよ」

さくらは目を細めた。一瞬見えた彼の顔は、ひどく怯えているようだった。普段からは遠くかけ離れた恋人の姿に、さくらからも自然とため息が洩れてしまった。

「別に何もしてないじゃない。私ごときでそんなに怯えないですよ」

「怯える？ 俺がか？ こんな場で冗談はよしてくれよ」

剣人は顔を引きつらせた。どうやら笑顔をつくろうとしているらしいが、さくらはその表情を笑顔として受け取る事はできなかった。さくらはウィンドブレーカーのポケットから手鏡を取り出し、剣人にそれを突きつけた。

「自分の顔を見てみなよ。それが怯えていない人の顔なの？」

剣人はさくらから手鏡を受け取り、まじまじと自分の顔を見つめた。瞳孔は開き、頬が引きつり、口元が震えている。紛れもなく、さくらの言う通りだった。剣人はさくらに手鏡を突き返し、苦悶に顔を歪ませる。

「死ぬんだぞ？ あっという間に友達が、目の前で。 しかも、テレビでも漫画でも、まして夢ですらない。人を殺めた銃口が、自分の胸に突きつけられるんだ。これ以上に怖いことってあるか？」

さくらは伏し目がちに頷く。剣人の気持ちは痛いほどわかった。

彼の目が、息遣いが全てを物語っている。さくらは息が詰まり、目頭が急に熱くなった。しかし、だが、さくらは毅然と剣人を睨む。

「わかるよ。私だって、ナイフを突きつけられた時は全身から血が抜けちゃうような気がしたもの。死ぬ、って思うことがどんな気分か、私だってよくわかる。けど、ビビって縮こまっていたら、それこそみんなが浮かばれないんじゃないの？」

剣人、大希や健もさくらを見つめた。さくらは唇を噛みしめ、今にも泣き出しそうな顔をしていた。肩を震わせ、浮かぶ涙を拭いながらさくらは剣人の肩に触れる。

「私だって剣人の気持ちは痛いほどわかってるつもり。そんな顔なんか見たことないし。それに、剣人が死んじゃうなんて考えたくないし、剣人と一緒に安全な所に逃げたいって、今も思ってる。けど……それ以上に、剣人には、私の知っている剣人でいて欲しいの。」

“あの” 試合の時みたいに、どんなことがあっても全く怯まない剣人でいて欲しい……」

涙が一筋、さくらの頬を伝って落ちた。ひどく苦しそうに顔をしかめて、さくらは剣人に縋った。

「わがままだよ。私って、本当にわがまま……実際に動くのは私じゃないくせに、勝手なことべらべら……」

剣人はあまりにも悔しくなった。自分が不甲斐ないと思った。さくらは彼女の気持ちを整理できずにいるのに、必死に自分の事を思いやってくれている。それに比べて、自分は何もさくらのことを思いやろうとしていなかった。自分の事で頭がいっぱいで、それが当然だとは思っていなかった。剣人はうっすら涙を浮かべ、さくらを包み込むように抱きしめた。

「ごめん。さくら……目が覚めた。俺は守るよ。ここでふんばらな



きや、俺達はただの穀潰しだ。なあ、二人とも」

大希と健は見つめあった。腹を決めるより他にないとわかると、二人はため息をつき、静かに頷いた。

「ああ、そうだな。自衛隊に任せっぱなしはできねえし」

健の言葉に大希も頷いた。遺体を静かに見つめ、大希はそつと敬礼する。

「お前たちの分も俺達頑張るから、心配しないでくれよ」

剣人も健も大希に倣い、三人は遺体の列と再び向かい合って決意を新たにす。さくらもこぼれ落ちて止まない涙を必死に拭い、じつと剣人の隣に寄り添っていた。その時、背後から理加がせわしい様子で走ってきた。

「さくら！」

「理加！」

さくらと健が振り向き、一斉に声を上げた。ずいぶん動き回った様子で、理加は軽く息を弾ませていた。

「さくら、私達に仕事よ。局長が呼んでたわ。『私達もできることをしよう』って」

「できること……？ う、うん。わかった。一緒に行くわ」

さくらは大希達の方に振り向き、その真剣さを目で表しながら頷いた。

「私行くね。……みんなの無事、信じてるから」

さくらは理加と頷きあい、理加に付き従って姿を消した。その華奢な背中に一体どれだけの心労がのしかかっているかを思うと、剣人は自然にため息を洩らしてしまった。

「俺、さくらを支えてやれてんのか……いや、まだまだだな」

大希は横目で剣人の表情を窺った。

「おい、しっかりしろよ。そろそろさくらと結婚するんだろ？ そんなんでどうすんだよ」

剣人は目を閉じた。最近ほとんど見られていないが、やはり彼女にはちよつとばかり子供じみた、弾けるくらい笑顔がよく似合う。

剣人は表情をゆっくりと和らげ、頷いた。

「ああ。これからはしっかりと和らげ、頷いた。俺は全部投げ出すよ」

いつもの落ち着き払った笑顔を見て、大希は満足そうに頷いた。

「ああ。それでこそ玉竜旗の道を繋いだ大将だ」

大希と剣人が控えめに笑いあう様子を見ながら、健はとある事を思い出した。自分たちの間をすり抜け、勢い良く飛び出していった未成の姿だ。健は大希の肩を叩く。

「大希、未成は？」

それを聞いた途端、大希は目を丸くして気まずそうな表情をする。頭を掻きながら、顔をわずかにしかめた。

「あつ！ あいつには悪いけど、今思い出した……未成、絶対南広場の方行つたよな。俺、急いで探してくる。用心深いし、きつと無事にいるとは思っただけどさ……」

「ああ。そうしてやれ。一番の友達はお前なんだからさ」

剣人は頷き、大希の背を押した。大希は片手を挙げて応えようと、足早に広場へ向けて走り出した。

その頃、一人の兵士が右肩を押さえ、ビルの壁を伝って歩いていた。今も絶え間なく血が溢れており、手で押さえたくらいではどうしようもない。血の気が抜けてきて、ヘルメットが異様に重たく感じられる。口元をしかめ、兵士はヘルメットを片手で脱いだ。その中からあらわになつたのは、つり上がった涼しげな目元をした女性の面立ちだった。そう、その兵士は真正正銘の女性だったのだ。

「くう……こんな所で……」

兵士 北星<sup>ほくせい</sup>栄花<sup>えいか</sup>は肩を押さえながら呻く。彼女は多数のサイバ―と共に現れ、クモに指示を送つたあの兵士だった。歩兵達が散開した後は、物陰に隠れてサイバ―達の動静を見守り、いつでもマニュアルの指示を出せるようにしていたのだ。だが、それが仇となり、クモが爆発した時にその破片が深く彼女の肩を抉つたのだ。傷は相

当に深く、それでも涙一滴こぼさないことが彼女の胆力の強さを何よりも示していた。しかし、彼女の体を力強く支え続けた精神力も、もう限界だった。よもやここまでの反撃に遭うなど予想しておらず、応急処置をするための道具が不足していた。肩の深い傷を癒せる手段もなく、彼女はどんどん血の気を失い、その場にふらつき、倒れこんでしまった。

「こんな所で……死ねるか」

彼女は目を見開き、その目の奥に命の炎を燃え上がらせ、らららんと光らせていた。痛みをこらえ、何とか立ち上がるうとするものの、力の抜けきった体ではもうそんな事すらもできなかつた。栄花は顔をくしゃくしゃに歪め、必死に泣くのをこらえながらうつむいた。

「ちくしょう。ちくしょう……こんな、こんな所で。一人でなんて死にたくない……」

歯を食いしばり、必死に意識を失うまいとするものの、目の前は霞み、体は中身をそっくり鉛に詰め替えられたかのように重く、動かなくなっていた。

「私、何のために生きてたのさ……」

最後に弱々しい口調で呟き、彼女は意識を失ってしまう。その頬を、一筋の涙が伝っていった。

そこを通りかかる一人の影があつた。大希だ。真つ直ぐに南広場を目指して走っていた彼であつたが、かすかに血の臭いを感じて立ち止まる。鼻先に感覚を集中すると、それはビルの影から流れてきているようだった。左を振り向くと、路地の真ん中に倒れ伏している一人の兵士が見つかった。その右肩を押さえる手には、どす黒くなった血の塊がこびりついていた。敵、という思考が一瞬頭を過ぎたが、それ以上に肩の怪我が気になった。どうやら意識もないらしい。大希は足音を忍ばせて近づくと、そつと膝まずき、兵士を仰向けにした。

「え、あ？ ……女？」

大希は目を丸くした。血の気を失い、真っ青な顔で気を失っていた兵士は、女性だったのだ。しかも、筋の通った鼻や、引き締まった唇など、そのやや気の強そうな顔立ちは、どれだけ敵しめに見ても『美人』の範疇から外れない。一瞬大希は心臓が大きく跳ねるのを感じてしまった。

だが、彼女の右肩を触れてすぐに現実へと帰った。今も血が少しずつ滲み出しており、大希の右手は鮮血で真っ赤になっていた。一刻の猶予も許さない。そうとしか大希には見えなかった。大希は目を閉じる。先ほどの兵士は、『運命』だなどと抜かして仲間をことごとく殺した。その恨みがなくなるはずはない。しかし、彼にはけが人を見捨てるということなどできやしなかった。

「助けてやらないと。何とかして……」

大希が彼女を再び寝かせ、辺りを見渡していると、外の通りの方から聞きなれた声が飛んできた。

「大希！ そんな所で何してるんだい！」

大希ははっと顔を上げる。そこにいたのは、紛れも無く未成だった。不思議そうな顔をして、こちらのことをじっと窺っている。

「何してたんだはこつちだ……と言いたいところだけど、今はそんな場合じゃない。この人が怪我してるんだ！ ……一応敵だけど、俺は助けるべきだと思うし。だから未成、もし出来るなら手伝ってくれないか？」

「あ、ああ」

未成はとりあえず返事だけを返し、一足飛びでこちらにやってきた。途端に兵士の危険な様子に息を呑む。

「確かにこれはマズイね……でも、助けたとしてもどこに彼女を入れておくつもり？ ロビーに置いておいたら、そこで頑張っている人の邪魔になるんじゃないかな？」

大希はうつむいた。確かにその通りだ。しかも、自分たちを襲った敵が同じ空間に寝ていることが許せないという人々が出てくるか

も知れない。それを加味すると、結論はすぐ一つに落ち着いた。

「何とか頼んで、普通のベッドに寝かせてもらおう。なんとかするさ」

「そうだね。……じゃあ僕も手伝うよ。まずは彼女を病院まで運ばないとね」

二人は改めて周囲を見渡し、鉄の棒や捨て置かれた板を駆使して即席の担架を作る。そつとその上に女性兵士を載せ、二人は急ぎ足で病院に向かった。

栄花は、複雑に組まれたやぐらの上に立ち、カマキリ型のサイバー兵器 破砕サイバーの整備をしていた。頭を開き、カマキリのメインコンピュータと手元のモニターを繋いで、栄花はじつとモニターが映し出すカマキリのデータを見つめていた。その顔に表情は無く、彼女は淡々とモニターを見つめていた。

「北星！ そっちの整備は済んだか！」

下から上司の声がした。栄花はモニターから目を逸らし、下から自分を見上げている眼鏡をかけた上司と目を合わせる。

「はい。もうすぐ済みそうです」

「そうか……北星、頼むぞ。このサイバー兵器の働きで全てが決まる。俺たちが生き残れるかどうかが」

上司の必死な表情を見て、栄花はわずかに顔色を曇らせた。モニターを横目で見て、カマキリの持つ刃のデータを見つめた。その高周波振動ブレードは、一般の建物なら容易く破壊してしまうだろう。栄花はこっそりとため息をつき、望む答えは帰ってこないと知りつつも、立ち去りかけた上司に話しかけた。

「待ってください。……どうしても、この方法しか無いんですか」

上司は振り返った。その冷たい視線に、一瞬栄花は身を縮めてしまっ

「今さら何を言っているんだ。このままでいれば、消えるのは俺達の方なんだぞ」

栄花の目が泳ぐ。度重なる天災の原因も特定され、『マザー』は既に結論を下した。栄花も生き残りたいと願い、ここでサイバー兵器の整備を行っている。だが、自分が作った武器が、幾千幾万、否、とても数には挙げられぬほどの命を消し去る端緒になることに堪えられるほど、若干二十歳の栄花は強くなかった。

「でも！ 向こうには何十億もの人々が暮らしているんですよ。そ

れを全部犠牲にしてまで、私達が生きる意味はあるんですか！」

上司は目を剥いた。そばに落ちていたナットを拾い上げ、栄花に向かつて投げつけた。それは僅かに狙いが逸れ、鉄骨に当たってひどく甲高い音を立てた。二人の他に動くものもない倉庫に、その音が染み渡っていく。

「……なら、お前はできるのか？ 自分の命を犠牲にすることが！」

「そ……それは」

栄花は再び目を泳がせ、口ごもった。

「できないだろ！ そういう事だ！ 誰だって死ぬのは怖いんだ。ただそれだけだ。お前、最近そればかりらしいな。いい加減に自分の立場を自覚しろ！」

もう一個落ちていたナットを、再び上司は栄花にめがけて投げつけた。栄花はとっさに腕で顔をかばい、その手の平にナットを受けた。ナットの角が栄花の手を傷つけ、そこからうつすらと血が滲む傷口を押さえながらやぐらの下を窺うと、肩を怒らせながら立ち去る上司の背中が見えた。栄花はため息をつく気力すらも失い、肩を落としてサイバー兵器と向き合った。

工学に対して天賦の才があつた栄花は、そのため軍に目をつけられ、兵器開発の一助をすることになったのだ。始めこそは彼女も乗り気だった。自分が世界を救えるという喜びもあり、普段から同じ工学部、とくに男子にやつかまれていた反発もあった。しかし、時を重ねるうちに、彼女はだんだんと罪の意識を強めるようになっていた。目の前の兵器を自分も作ったのだと思つと、栄花は心を掻きむしられるような苦しみに襲われるのだ。

彼女は傷口を強く押さえる。血が流れ、鉄骨に赤い染みを作った。「私は、もうこんなもの作りたくない……」

栄花ははつと目を覚ました。とっさに起き上がるうとしたが、まるで心身を別々に分けられてしまったかのようで、全く体が言うことを聞かなかつた。栄花は起き上がるのを諦め、脱力して再び仰向

けに倒れ込んだ。何度か瞬きし、そこでようやく彼女は自分が涙をこぼしていたことに気が付いた。

「またか……」

呟き、栄花は涙を無造作に拭う。ここ最近は毎日だった。いくら表向きには強がっても、既に彼女の心は悲鳴を上げていた。感情のこもらない瞳で、栄花はぼんやりと周囲を窺う。辺り一面真っ白いものばかりだ。寝ているベッドも、壁も、カーテンも、全部白だ。栄花はこの場が病室だと気付き、ようやく違和感を覚えて訝しさに顔をしかめた。

「え？ 何で私、病院なんかで寝てるの？」

栄花は自分の体に目を走らせ、そして右肩に巻かれた包帯に気が付いた。それを見た途端、今までの記憶が奔流のように溢れてきた。肩に受けた激痛、朦朧とした意識。そのまま死ぬのだろうとさえ思っていた。それが、何故自分はここにいるのか。布団の端を握りしめ、栄花は自分が置かれた世界が現実であることを確かめた。そして、消し去りようのない疑問が口をついて出てきた。

「ここは、この世界の病院でしょ？ 何で私が寝てるの？」

置かれた状況に戸惑い、栄花は掴んだ布団を引き寄せ縮こまった男にも果敢に突っかかっていく女のはずだった栄花の瞳は、再び潤み始めていた。その時、いきなり病室の戸が開いた。びくりと身を震わせ、栄花は反射的に戸の方角を見つめる。そこには、短髪で、澄んだ瞳が誠実さを思わせる青年が立っていた。その顔に驚きの色を浮かべ、青年はゆっくりと近づいてくる。

「もう起きたのか。医者が見立てじゃまだしばらく起きないって言うってたんだけど……」

栄花は思いきり眉根にしわを寄せた。追い詰められた猫のように、彼女は必死に息を荒らげて青年の事を睨み付ける。

「近づくな！ 一体何なんだよお前は！」

青年は口を尖らせ、小さく両手を挙げた。

「何だよその態度。せつかく助けてやったのにその言い種は無いだ



る」

「助けた？」

栄花は警戒心を剥き出しにして、力の入らない体にムチを打ち、何とか半身を起こした。それから、不満そうな顔をしている青年を改めて睨み付けた。

「別に助けたつてつもりは無いんだろ。私を適当に生かしておいて、情報でも何でも搾り取るつもりなんだろ！」

栄花は早口でまくし立てる。その言葉に合わせ、青年は困ったように目を瞬かせていた。栄花は一瞬自分の体に目を下ろし、それから口ごもりつつ続けた。

「それに、私は女だしな。色々使い出があるとか、思ってるんだろ。どうなんだよ」

今まで困り顔をしていた青年は、苦し紛れの栄花が最後に付け足した言葉を聞き、何と吹きだしてしまった。そのまま笑い続ける様子に戦慄し、栄花は布団で自分の身を守るようにしながら睨み付けた。

「どうして笑うんだよ。凶星か？」

青年は必死に笑いを噛み殺し、再びこちらに歩み寄り始めた。

「そんなわけないだろ。そういう考えになるって事は、自分のスタイルに結構自信あるんだな」

思わず栄花は赤面した。唇を噛みしめ、今にも泣き出しそうな顔で青年を睨む。そのあまりに弱々しい表情に、青年は慌ててその場を取りなそうとした。

「う、ごめん。セクハラだったかな。今のは……」

栄花は自分の姿を布団で覆い隠したまま、眉一本動かさない。ひどく困って、青年は目を泳がせた。

「ねえ、本当に他意は無いんだ。肩をかつさばかれて倒れてる人を放っておけるかい？ そんなわけないだろ」

青年は両手を広げ、必死に自分に敵意がないことをアピールしている。しかし、栄花にはそれが不審に見え、余計に表情を強ばらせ、

布団をきつく握りしめた。青年はため息をつきながら肩を落とし、苦笑した。

「頑固だね、君も……じゃあ、名前を教えようか。名前も知らない奴に話しかけられたって、怖いだけだよな。俺の名前は今村大希<sup>いまむら たいき</sup>。神奈川方面機動隊勤務だ。怪我している君に詰問するような真似はしないから、信じてくれ」

栄花はうつむいた。大希と名乗った青年の視線はとても温かくて目を合わせていると自分が置かれている状況を忘れてしまいそうだった。栄花は歯を食いしばり、きつと大希を睨みつけた。

「独り善がりだ。それで私のことを考えてるつもりかよ。見え見えなんだよ。私を油断させて、やつぱり情報を取ろうつていう魂胆だろう！ 私は……私は騙されないからな！」

大希は肩を落とした。その目は至極残念そうだった。悲しげに微笑をたたえ、大希は一步一步と後へ下がっていく。

「そうか。まあ、すぐに理解してもらえとは思ってない。でも、君が思っているようなひどい事は絶対にしない。また明日も来るよ。君の誤解が解けるまでね」

そう言い残すと、大希は扉を後ろ手で開き、廊下に姿を消してしまった。その途端、栄花は胸の中の空白に気がついてしまった。彼に怒りの刃を向けて、必死に彼を突っぱねた。しかし、そんな事をしたところで、栄花の心は休まるどころか、ますます虚しくなった。いつの間にかやら、栄花は涙を溢れさせていた。拭っても拭っても、ぽっかり空いた心の隙間から次々溢れ出してくる。栄花はしゃくりあげ、鼻をすすった。

「私は……私はどうしたらいいのさあ……」

栄花は布団に顔を埋め、その晩顔を上げることは無かった。

「来んなよ！ 私に構うな！」

病室に栄花の言葉が響く。大希は宣言していた通り、翌朝栄花の病室を再び訪れたのだ。だがと言うべきか、当然と言うべきか、彼女の態度は相変わらずだった。

「君、そうやって医者も追い払ったらしいな。ここは俺達の病院なんだけど、わかってるか？」

栄花は口をつぐんだ。返す言葉が見つからなかったらしく、ただただ彼女は大希の事を睨んだ。大希は仕方なしに微笑み、そっと彼女に歩み寄る。食事を載せたトレーを、そっと彼女のベッドの横の台に置いた。

「まあ、俺は別にいいんだけどさ。ただ、そうやって治療も拒んでたら、治るものも治らないし。言っとくけど、俺は心配してるんだぜ？ 君の言葉を借りるんなら、一応女だし」

大希は小さく微笑みながら、両手を小さく広げてみせた。栄花は固く結んだ口元をひくつかせ、またしても大希を睨み付けた。

「何だよ。私をバカにしたいのか？」

大希の態度に舌打ちし、栄花は顔をしかめて吐き捨てる。大希は一瞬肩を縮めたが、それでも辛抱強く続けた。

「そんなつもりはないさ。ただ、君は何かにかなり怯えているような気がするから、もっと気を楽にしてもいいんじゃないか、って俺は個人的に思っただけだ」

栄花は顔を引きつらせた。投げやりな雰囲気のまま、口元を歪め、喉を震わせるような笑い声を上げた。肩をかばいながら彼女は上体を全てを大希に向けるような姿勢を取り、並びのいい歯を剥き出しにした。

「私が何か怯えてる？ 冗談キツイな。私はこれでも軍人だぞ？ 何かに怯えてやっていけるわけねえだろ。敵のくせに、ただのサ

ツのくせに、あんたに何がわかるんだよ」

大希は目を丸くした。肩を小さくし、両手を胸の高さまで持ち上げ、控えめに栄花の表情を窺う。投げやりな笑みの仮面で覆っていても、大希にはやはり、その眼の奥に潜む苦しみが透けて見えるような気がしていた。

「そうか……俺は人の気持ちを見抜くのが得意な方だと思っただけだ、大してあてにならなかつたな」

大希は頭の後ろで手を組んで、何の気なしに呟く。栄花は目をらんなんと光らせ、鼻を鳴らした。

「ああ、そうだな。お前の勝手な考えなんかあてにならないって事さ。もうあっち行ってくれよ。私に構うな」

栄花は目を見開き、再び歯を剥き出しにして威嚇する。大希は肩を竦めると、時計を確かめたり、活動服の襟元を正したりしながら一歩一歩離れ始めた。

「わかつたよ。俺は君にメシを運びに来ただけだし。ちゃんと食っておけよ。力つけなきゃ、治る怪我も治らないからな」

「余計なお世話だ！ 敵のお前にそんな事言われたくねえよ！」

大希はやれやれと首を振り、これ以上は何も言わずにそそくさと立ち去ってしまった。その背中を白い目で見送った後、栄花はため息をつき、トレーの真ん中にあつた粥に手を伸ばす。栄花は口を尖らせ、ぶつぶつ呟く。

「何なんだろ。敵のくせに……変なやつ」

右肩が痛むせいであまり腕は動かせない。自分の口を粥の椀に近づけるようにして、必死に掻き込んだ。丁寧に噛みながら、栄花はぼそりと呟いた。

「……でも、おいしい」

大希は扉を閉じたため息をついた。彼女の言う通り、本来はテロ犯罪者として捕らえているわけだから、ドライに適当な扱いをしたって他の誰も、彼女すらも文句を言っまい。大希も重々承知してい

だが、どうにも彼女を放っておけなかったのだ。一昔前の不良のように喚くのが、彼女の本当の姿ではないだろう。大希はそう思っていた。

「また怒鳴られてたね」

少しからかいが交じった口調で話しかけられ、大希は顔を上げた。未成が、いつものように多少の弱々しさも伴う笑顔でこちらを見つめていた。

「ああ。参ったよ。ちょっとくらい大人しくしてくれてもいいのに」「どうしてそこまで彼女を気にかけるんだい？」

腕組みをして、ぶつぶつ文句をたれる大希に、未成は不思議そうな表情を見せた。大希は瞬きすると、小さく唸りながら宙を見つめた。

「ん？ ええと……」

唸ったり頭を掻いたり、大希がすぐに答えられないでいると、未成はにやりと笑って、大希の鼻先を指差した。

「そうか。彼女が結構美人だからかな？」

大希は目を細くして未成の表情を見つめる。確かに、一目見た時はかなりの美人だと思った。だが、その後の目をつり上がらせて怒鳴り続けるあの様子を見ては、彼女を美人と思うことはできなくなってしまう。大希は首を振って顔をしかめる。

「いや。あんな美人がいてたまるか。でも、人として、何だか放って置けない気がするんだ。何だかひどく無理してるように見えて仕方ないんだよ」

「ふうん。なるほどねえ……」

未成は病室の扉を見つめる。その目は、奥にいらるであろう女性兵士の姿を見透かしているかのようだ。ぼんやりとした目は、感傷に浸っているかのようにも見える。大希は鼻で笑い、未成の肩をつついた。

「何だ。お前も結構気になってるんじゃないか？」

未成は大希の方をちらりと見て、微かに頷いた。

「まあね……君が望んでいるような意味とは、違っただけだよ」

大希が未成の言葉に首を傾げた時、遠くから剣人の鋭い声が飛んできた。

「おい！ 食事出してくるだけなのにどんだけ時間食ってんだ！

さっさと戻ってこい！」

「おっと。今行く」

大希はもう一度病室を一瞥すると、ロビーに向かって走り出した。

大希と未成が降りてみると、ロビーの状況はまるで変わっていた。負傷者は脇に詰め、中央には井上と、それを前いにして、救助に当たっていた警官が集まっていた。剣人に引きずられ、大希と未成はその集まりの隅まで行く。その様子を見つめる井上の目は、鬼のように鋭かった。

「すいません。ただいま連れてきました」

剣人は素早く井上に頭を下げる。顔をしかめつつも、井上は小さく頷いた。

「ああ。少し遅かったが、許容範囲にしてやる……さあ、我々に重要な使命が下った。他の隊は既に当たっているはずだ」

重要という言葉に、元々引き締まっていた空気がさらに張り詰める。井上はそんな部下の顔を見渡すと、一気に話した。

「本日閣議決定により、久宇慈市は緊急避難区域及び防衛ラインに決まった。自衛隊は後者、防衛任務に当たり、我々機動隊は、市内より避難する市民達の警護に当たることになった。全員の尽力で、無事に人々をこの街の外へ逃がせ。いいか！」

「はい！」

井上の朗々と響き渡る声を聞き、機動隊の人々は力強く応えた。

井上は頷くと、素早く隊員を指で差し始めた。

「お前からお前らまでは南へ行け。湾岸部の住民は海路で脱出する。船に乗り込む人々に混乱が起きないようにしろ！」

「はい！」

「お前らは俺と中央に來い！ 既に脱出は始まっている。滞りなく済むよう交通整備に当たる！」

「はい！」

そして、井上は大希達を含む十人を指差した。

「お前らはこの病院の人々を市街の病院へ搬送しろ。既に受け入れ体制はできているはずだ。いいな」

はい、と応えかけた大希だが、ふとある姿が脳裏に浮かんだ。

端正な顔を必死に歪め、自分を撥ね付けようとするあの姿だ。大希は顔を上げる。

「隊長！ ここに拘束している捕虜はどうするんです？」

「ここに置いておく。そのうちここは我々や自衛隊の拠点にするから、捕虜を置いておく方が何かと都合がいいんだ。これで大丈夫か？」

「はい。了解です」

井上は小さく頷くと、再び大声で叫んだ。

「よし！ 行け！」

大希達は素早く負傷者を集め、外に用意していた輸送車に載せていった。起き上がることをそのままならないような者はいなかったから、さほど時間はかからない。

「道はどうするんです？」

負傷者を席まで誘導しながら、大希は輸送車にエンジンをかけている先輩に話しかけた。先輩は顔を上げると、目の前の通りを指差す。

「小田原市の病院が受け入れてくれるそうだ。お前も早くパトカー乗れ。さっさと出るに越したことはないからな」

返事もそこそこに、大希は頭を下げて輸送車を降り、既にエンジンをかけて待ち構えている健のパトカーに乗り込んだ。

「よし。さっさと出るぞ。人払いだ」

そう意気込んでみるものの、既に街の中心部は閑散として、出

歩いている人、道行く車両、どちらをとっても見当たらない。剣人は顔をしかめ、ぼそりと呟いた。

「俺達がこうしてる意味はあんのか？ 単に自衛隊の足下をチョロチョロしてるみたいだ。それに……この事態が収まったとして、この街は元に戻るのかもわかんなくなるな」

大希は神妙な顔でビル街を見上げる。ビルの中は暗く、人気ひとけがない。まさにゴーストタウンだ。だがそれでも、大希は希望を失いたくなかった。幾つになっても、「ヒーロー」の精神はこの男に染み付き続けているのだ。

「わからなくない。俺達が元に戻すんだ。むしろ、俺達の仕事はそこからだろ。久宇慈復興の下支えだ」

真剣な眼差しで街並みを見つめている大希。その瞳には、全く揺らぎがなかった。ハンドルを小田原市方面に切りながら、健は力強く頷いた。

「そうだよな。俺達もできることやらないとな」  
三人はしんみりとしてしまい、思わず黙りこくってしまった。

そんな時、いきなり無線から激しい声の通信が入ってきた。

「大希、いるんだろ！ 聞こえるか！」

井上の声だ。大希は椅子から飛び上がりそうになり、慌てて無線を取り上げた。

「井上さん！ いきなりどうしたんですか！」

「さっきまた襲撃があった！ また別の型の奴も出てきて、そいつがそつちに飛んだ！ 何とか輸送車を守れ！」

「そんな。一体何が来るんだ……」

剣人は血相を変え、思わず後ろを振り返る。そこにはもう『それがいた。それは、二対の羽根を広げてこちらに飛んでくる。丸い頭、細い体。トンボだった。』



健はサイドミラーに目を向けた。そこには巨大なトンボ型のサイバー兵器と、それに追われる輸送車の姿が映っていた。サイバーの外見からは、いかなる装備が詰め込まれているのか全く想像がつかない。健はその不可知を恐ろしく感じた。そもそも、彼の本質には少々臆病な部分も含まれているのだから、無理もない。

浅く息をして、健はちらりと横を窺う。大希は口を固く結び、サイドミラーに映るサイバーを凝視していた。健は考えた。今、大希は何を考えているだろう。彼は一体、どうしたいのだろうか。答えに辿り着いた時、健の左手は無線に伸びていた。

「加嶋先輩！ 聞こえますか！」

輸送車のハンドルを握っている健達の先輩は、すぐに応じてきた。

「健か！ あのでっけえトンボ、どうすんだ！」

健は一瞬言い淀んだ。舌の根が乾き、冷や汗が浮き出てくる。だが、健は勇気を振り絞った。

「俺達が引き付けます！ 先輩は俺達を追い抜かして下さい！」

「あ、ああ。頼むぞ！」

輸送車はクラクションを鳴らし、一気にスピードを増して大希達を追い越していった。健は無線を戻すと、パトランプのスイッチを入れ、サイレンを鳴らした。ハンドルをしっかりと握りしめ、バックミラーに映るトンボの姿を捉えた。顔の大半を覆う眼が、薄赤い光を伴いパトカーを見据えた。

「大希、剣人！ トンボを見張れ！ 今から俺は運転に集中する！」  
言うやいなや、健は一気にアクセルを踏み込んだ。車は一気に速度を増していく。トンボははつきり大希達に狙いを定め、急降下を始めた。剣人は後ろを見つめて叫ぶ。

「トンボが真後ろに来た！ 何かしてくるぞ！」

「そうはいかせるか！」

健はハンドルを大きく切り、タイヤを鳴かせながら東にハンドルを切った。それと同時に、トンボはその尾を強く地面に突き刺した。「危なかったな。もうちょっとで刺さったぞ」

大希は頬に冷や汗を流した。サイドミラーを覗けば、そこには地面から尾を引き抜き、再びこちらに向かって飛んでくるトンボの姿があった。大希は健の方に振り返る。

「健！ まだ追って来るぞ！」

「じゃなきゃ困るさ！ 何のために鬼ごっこしてるんだ」

健はそう言うと同時に反対車線にずれた。もといた位置には再びトンボの一撃が突き刺さる。その隙に、健は北にハンドルを切った。あまりのスピードに、シートベルトをしていなかった剣人はしたたかに肩をドアに打ちつける。

「イテっ！」

「シートベルトしろよ！ サツにしょっ引かれんだろ！」

「冗談かましてる場合か！」

剣人がシートベルトに手を伸ばしながら訴えると、健は間髪置かずに叫んだ。

「かまさなきややってられねえよ！ こんな事！」

「来るぞ！」

大希が叫ぶと、再び健は車線を変えた。逆走になってしまっていたが、健にそれを気にしている暇などなかった。どうせこちらに走ってくる車などないのだ。十字路でハンドルを強く切り、再び東を目指して走りだす。冬道をもともしない鮮やかな健のハンドル捌きに、大希は眼を見張るしかなかった。

「さすがは健だな。新人のくせにカーチェイスやって、それを成功させたっていう武勇伝を持っているだけはあるぜ」

「始末書書かされたけどな」

今や健の目は爛々として、パトカーをまるで手足のように動かしていた。雪道の滑りすらも計算に入れた方向転換は、カースタントさながらで、事ある毎に振り回されている剣人の顔は少し青くなっ

ていた。トンボがボロボロの尻尾をぶら下げながら追い縋ってくるのを何度も窺いながら、剣人は前に身を乗り出した。

「いつまでこんな事続けるんだ！ おい！」

「知るか！ あいつがくたばるまでだ！」

健は急ブレーキをかけながらハンドルを切り、いきなり狭い路地に飛び込んだ。車の底から軋んだような音がして、大希は思わず息を呑む。

「おいおい。向こうより先にこっちがくたばりそうぞ」

「変なこと言うな！ ホントになっいたらどうすんだ！」

健はアクセルを踏み込みながらハンドルを切る。路地の出口でいきなりスピードが増し、大希と剣人はいよいよ顔を青くする。が、後輪が滑ったお陰で、むしろすんなりと広い道に復帰した。目を見開いたまま、剣人は頬を引きつらせて呟く。

「ドリフトだったっけか……ゲーションでしか見たことねえよ」

「エフワンもあるぞ」

大希も小刻みに息をしながら呟いた。二人とも、恐ろしいものとして健のハンドル捌きを見つめていた。その様子に気づき、健は首を振った。

「俺の手元を見るなよ！ 俺は前見てるだけでギリギリなんだ！」

ちゃんとトンボを見張ってくれ！」

鋭い剣幕に、大希は慌ててサイドミラーを見つめる。そこには、なおも追いかけてくるトンボの姿があった。燃料が切れる様子など毛ほどもなく、トンボはパトカーを中心に捉えて急降下を始めた。

「健！ まだだ！」

「了解！」

健は再び車線を変える。そして、例のごとくトンボはその尾を地面に突き刺してしまった。それでも、トンボは素早く尾を引き抜き迫ってくる。剣人はその様子を瞬き一つせずに見つめていたのだが、その時一つの事実に気付いた。

「おい。あのトンボのケツ、大分ボロボロになってきてるぞ」

剣人の視線の先には、外装がひしゃげて歪んだトンボの尾があった。剣人の言葉を聞き、健はぼんやりとした表情でアクセルを離した。エンジンブレーキがかかり、九十キロを越えていたスピードがどんどん緩んでいく。もちろん、トンボは一気に間を詰めてきた。大希は焦り、声を上ずらせた。

「どうした健！ ボーッとすんな！」

トンボは尾を動かし、じっくりこちらを狙っていた。その様子が映るサイドミラーを、健は一瞬見た。深呼吸すると、前を見つめた彼は一気にアクセルを踏み込んだ。トンボが尾を振り上げた瞬間、パトカーは一気に加速して間合いを引き離す。

「なら、これでどうだ！」

健が叫んだ瞬間、トンボは地面に深々と尾を突き刺した。いつものように尾を引き抜こうとするトンボだったが、どうにもそうはいかなかった。最大出力で突き刺したその尾が、簡単に抜けてくれるはずが無かったのだ。それでも、機械はそこまで頭が回らない。ピカピカ光り、ウーウー叫ぶなにかしかを消し去ろうと思考することしかできなかったのだ。

「Follow the given command！」

トンボはそう叫び、フルスロットルで上昇した。途端に亀裂が入っていた尾は甲高い音を立てながら装甲が割れ、配線がむき出しになった。それでも構わず上昇した結果、ついにトンボの尾は先端が千切れてしまった。バランスを崩したトンボはつんのめり、そのまま地面に不時着してしまう。

「やった！ これで俺達の勝ちだ！」

大希は後ろで情けなく跳ねるトンボを見つめて歓声を上げた。剣人は深々とため息をつき、ほっと胸を撫で下ろす。健はブレーキを踏み、ゆっくりと車を止めた。そして、ハンドルをそつと撫でてやる。

「よくもってくれたな。助かったぜ」

「お前もだ。ここまで運転上手いなんて知らなかったぜ」

大希や剣人が健を労い始め、健は満更でもない表情を浮かべて頭を掻く。

その時、なんと再びトンボが飛び上がった。だが、三人はそれに気がつくことができなかった。音を忍ばせ、トンボはそつとサイレンが止んだパトカーの上部に迫る。そして、そのまま着地した。

「うわっ！」

いきなり車体が沈み、大希は思わず天井を見上げる。窓が割れ、金属の脚が覗いた。健は身震いし、再びアクセルを踏み込んだ。

「何だよ！ しぶといやつだな！」

健はハンドルを最大限に切る。雪上で車は滑り、スピードの乗った車はスピンを起こした。しかし、六つの足でしっかりと車体を捉えていたトンボは振りほどかれずに耐えた。健はいよいよ青くなる。同時に車体全体を揺るがす衝撃が加えられ、パトカーは跳ねた。同時に何かが弾け飛ぶ激しい音がして、赤い色の破片がボンネットに幾つか載った。間違いなく、パトカーの象徴、サイレンの残骸だった。健は再びスピンを試みながら叫んだ。

「くそっ！ このままじゃまずい！」

「何か手はないのかよ！」

大希は天井を睨みつけた。同時に再び衝撃が加わり、天井が凹んだ。もう後はない。次また一撃が加われれば、きっと天井は壊される。しかし打つ手は見つからない。大希は目を閉じ、次に待つ光景を想像した。このまま自分たちがトンボに潰される光景を。剣人も、健も同じだった。

しかし、その光景はいつまで待っても訪れない。大希は薄く目を開いた。

「何も……起きない？」

「……どういっつもりだ？ トンボめ……」

健はアクセルを踏み直し、再び走りだす。その時、背後で工具箱の中身を床にぶちまけたようなひどい音がした。健は目を見開き、

慌ててブレーキを踏んでパトカーを止める。そして背後を三人で振り返ると、そこには道路の上でひっくり返っている巨大な尻切れトンボの姿があった。

「トンボが止まった？」

剣人は半信半疑な様子で呟き、二人の顔を窺った。大希も健も、狐につままれたような顔をしていた。頷き合うつと、慎重にパトカーを降り、ゆっくりとトンボのそばに近寄った。眼の光は失せ、脚の先一つ動かさない。まるで死んでしまったかのように、トンボは身震い一つしなくなっていた。健はその姿を見下ろし、ため息をついた。

「やっと終わったか……もう俺、トンボが嫌いになりそうだ」

大希も頷き、力なく微笑んだ。

「ああ、俺もだ」

「報告しよう。何はともあれ、決着は付いた」

剣人がそう言うのと、健はうなだれるように頷き、パトランプが吹き飛んだパトカーのもとに戻り、重苦しい動作で無線を取った。

「こちら空井です。加嶋先輩。そちらはどうですか？」

『空井か？ 無事だったんだな！ こつちも何とか小田原に着いたぞ。全員無事だ』

先輩の元気そうな声を聞き、健は小さく微笑む。途端に疲れが全身に覆い被さってくる。全く抗えなかった健は、そのまま運転席に上半身を預けて眠ってしまった。慌てて駆け寄った大希と剣人は、立派に戦った親友の姿を見つめた。無表情にどっぷりと眠り込んでいて、これを起こしてやるのは酷に見えた。小さく笑いあうと、二人はそれぞれそつと肩を叩いてやった。

栄花が曇りがちな外をぼんやり見つめていると、いきなり背後から戸の開く音がした。全く躊躇いのない、勢いの良いその音。栄花は虚ろで感情のこもらない目をしたまま、振り向きもせず尋ねた。「またお前か。今村」

大希は朝食のトレーを持ったまま、栄花の華奢な背中を見つめて眉を持ち上げた。彼女は大希を拒絶してばかりで、歩み寄ろうという姿勢はつゆほども見せていなかったから、大希は素直に驚いてしまったのだ。顔をほころばせながら、一歩一歩彼女に近づいていく。「なんだ。名前覚えててくれたんだ。それに、振り向かず俺が来たって当てるなんて、結構やるねえ」

億劫そうに首を動かし、栄花は大希に横顔だけを見せる。伏せがちでいるその目には、やはり寂しさがあつた。

「お前、私が寝てるかもしれないのに、全く気にしないで戸をガラガラ開けるだろ。……もう耳に染み付いた」

彼女の感情を機敏に感じ取った大希は、ベッドのそばのテーブルに朝食を置き、そのまま椅子を持ちだしてきて座り込んだ。

「君、何だか寂しそうな顔してるな」

「は？」

彼女は語調を強めたが、やはりその目にはこの前までの烈火が宿つていなかった。大希は栄花の鼻先を指差す。

「ほら。やっぱりそんな目してる。寂しくて仕方ない、って感じだぞ。仲間に会いたいのか？」

大きくした目を瞬かせ、栄花は一瞬戸惑ったような顔をした。次第に彼女は口を固く結んでしかめっ面になり、またしても顔を背けた。

「余計なお世話だ」

「あれ、違った？」

「だから、余計なお世話だつて」

栄花が睨みつけると、ようやく大希は黙り込んだ。彼女自身も沈んだ空気の中でうつむいてしまい、病室の中は一気に重苦しい空気になる。大希は頭を掻き、栄花の横顔をじつと窺う。伏し目がちのその表情は、やはりどこか寂しそうで、何かに苦悶しているようにも見えた。このまま放っておくのは彼女の精神衛生上良くない。大希はそう決めつけ、再び話を変えてみる事にした。

「どうしてトンボなんかを兵器のデザインにしたんだ？ サソリやクモはわかるけどさ、カブトムシやクワガタの方がトンボより強そうじゃないか」

栄花は顔を上げ、大希を尻目にかけて鼻を鳴らした。

「あれは虫が肉食かどうかで決めてるんだ。カブトムシやクワガタは、結局樹液を吸って生きてるからボツ。トンボはしっかり肉食だから……」

栄花は急に言葉を切り、大希の事をまじまじと見つめた。どんな形であれ、女性にじつと見つめられたのは久しぶりで、大希は思わず顔を赤くして鼻先を掻いた。そんな彼の事を、栄花は思いきり睨みつけた。

「危ない。色々喋るところだった。お前、やっぱり私から情報を引き出そうとしてたんだな？ ……何で顔赤くしてんだよ！」

頬を赤くして、半ば呆然としている大希に気付き、栄花はその頭を前触れも無く叩いた。その高らかな音と共に大希は我に返り、力無く笑いながら頭を掻いた。

「ごめんごめん。一年近く彼女いなくてさ、こんな近くで見つめられるの久しぶりで」

栄花は一瞬口をつぐみ、頬を染めた。その戸惑った表情は、怒鳴り睨むいつもの様子とは正反対だった。それから彼女は慚然とした顔で腕組みをすると、彼女はふいと顔を背けてしまう。

「バツカみたい」

返す言葉は無く、大希はただ愛想笑いするしかなかった。それを



横目で窺い、栄花は小さく鼻を鳴らした。

その時、戸が何度か叩かれた。同時に健の声が入り込んでくる。

「大希。敵さんが可愛いからって口説くのもいい加減にしろよお。」

井上さんに突き出すぞお」

「口説いてねえよ！ 勝手なこと言うな！」

大希は顔をしかめ、半ば足を踏み鳴らすようにして出口へ向かおうとする。その背中を目で追い、栄花は眉を持ち上げて鼻で笑った。

「結構すれただけだな」

「うるせえ！」

大希は振り返って栄花をしかめっ面を見せつけ、そのまま再び踵を返してさっさと病室を出ていこうとした。目を丸くしてその表情を受け取った栄花は、肩を竦めて再びその背中を見つめていた。言いたいことを口に含んでいるようで、唇を噛んだり、中途半端に口を動かしたりしていたが、中々彼女は言い出せない。だが、大希が取っ手に手をかけた時、ついに栄花は静かに呼び止めた。

「なあ、ちよつと待ってくれ」

「ん？」

大希は取っ手を引く手を休め、栄花の方に振り返る。彼女はうつむいたまま、耳を澄まさなければ聞こえないほど小さな声で尋ねた。

「なあ大希。……また、来るのか？」

大希は目を瞬かせた。わかりきっている事を尋ねてきた栄花の顔は捨て猫のようで、そしてそこには全く繕いが無いように彼には見えた。こんな表情を見てしまうと、彼女のことを放って置けなく思っていることを大希は改めて実感した。小さく微笑むと、大希はしっかりと頷いた。

「ああ。君がそうして欲しいんなら、毎食届けに来てやるよ」

栄花はほんの一瞬目を輝かせた。だが、結局は風船がしほむように彼女の表情は暗いものに戻ってしまった。

「……余計なお世話だ」

「やっぱり頑固だね。君って」

大希は呟くと、そつと戸を開けて立ち去った。一人取り残された栄花は大きいため息をつき、再び膝を抱えて外をぼんやりと見つめ始めた。その目はやはり捨てられた猫のようだったが、虚ろでは無くなっていた。

健にからかわれつつロビーに戻った大希は、昨日と同じく、井上からの指示にじつと耳を傾けていた。

「今日もまた三つに分かれる。中央部の避難は大方完了したから、今度は外縁部の人々の避難の警護を行う。今日は西と東に向かうぞ」  
そこまで一気に言い切ると、井上はまた適当なところで隊員達を区切る。

「お前達は東へ行け」

「はい！」

井上はすぐに二組目を区切る。大希と健が組み込まれ、剣人とは分かれてしまった。

「お前達は西だ」

「はい！」

大希達の威勢がいい返事を聞きながら、剣人は井上の事をじつと見つめた。西も東も担当が決まった。なら彼や残った仲間がすべき仕事は一体何か。剣人はあれこれ考えながら次の言葉を待った。井上は息を継いで、剣人達の顔一人一人を改めて見渡しながら静かに口を開いた。

「残りは港の倉庫に行け。久宇慈デジタルセキュリティエージェンシーの方々がサイバーの解析をある程度終えたらしい。社長がここに帰りたいたいということだったから、迎えに行つて彼らの身の回りを警護しろ。わかったか？」

「はい！」

剣人は目を輝かせた。さくらや理加の働いている会社の名前だ。ここ数日さくらの事が心配で、満足に休めなかった彼にとって、それは願ってもない仕事だった。剣人は誰にも気づかれないうつ、小

さく小さくガッツポーズを決め、軽快な足取りで仲間達の後を追いかけていった。

その頃、港に面した倉庫では、さくらや理加が収納されたサイバ―兵器の様子をもう一度だけ確認していた。

「ねえさくら。こんなこと、あるのかな」

サソリ型サイバーの全身を見上げながら、理加は小さな声で呟く。さくらは唇を噛みしめて、理加の質問には答えなのままパソコンの画面を注視した。そこには、サソリの全身像をシルエット化した画像が左半分にあり、そして左鉄に内蔵された武器のステータスが右半分に文章化されていた。

「衝撃波を攻撃に転用する兵器、レーザービーム。これが今に有り得る武器じゃないことは、分かりきってたことなんだけどね……社長は何て説明するつもりなんだろ」

さくらはぼそぼそ喋ってため息をつくと、ふと周囲に広がる景色を見渡した。理加や同僚には打ち明けていなかったが、ここにいるだけでさくらは具合が悪くなっていった。そんなところで、ろくに眠りもしないでパソコンの画面を見つめ続けていたものだから、さくらはもう頭が痛くて仕方がなかった。

「よりによって、どうしてこの倉庫を選んだんだろ……」

頭を押さえながら、さくらは入り口近くにある、小さな一室を見つめた。彼女は今にも泣き出しそうなほど苦しそうな目をして、か細い声で呟いた。

「何だか、嫌な予感がする……」

理加は慌てた。理加は、そんな言葉はさくらにとって最も縁の遠い言葉だと思っていた。だからこそ余計に慌ててしまい、うらぶれた表情のさくらを何とか励まそうと肩を叩いた。

「い、嫌な予感って！ そんな不吉なこと言わないでよ！ 私が言うならともかく、さくららしくないよ……」

さくらは応えず、じっと黙って倉庫の中空を見つめていた。その

目は、そこに立っている誰かを見つめているようだった。

暗雲立ち込める空の下、さくらの嫌な予感は的中してしまった。

その頃、剣人はパトカーの中で、一つの知らせを蒼白な顔で聞いていたのだ。

「高屋（こむら）！ 聞こえてるか！ サイバーが来た。スズメバチ型が八体だ！ 戦闘機が間に合っていないうちに、奴らは色々な所に飛んだ。

一体は間違いない南に向かっている。サイバーより早くたどり着いて、人々を守ってくれ！」

彼らしくない、井上のひどく慌てた声の通信が途絶えた。途端に剣人は唇を震わせ、我を失った様子で必死に目の前の運転席を叩いた。

「高屋先輩！ 早くしてください！ お願いです！」

背後で喚かれ、高屋はイライラと声を荒げながらアクセルを踏み込んだ。

「うるせえ！ わかっているっつもの！ あそこにお前の彼女がいるんだろ。もうすぐ着くんだから心配すんな！」

高屋の言う通り、すでに道の側には海が広がっていた。遠くにさくらたちがいるという倉庫も見える。剣人は最早待ち切れず、手を握ったり開いたり、貧乏揺すりを始めたり、身悶えしながら倉庫を見つめ続けた。早くさくらに会いたい。さくらを抱きしめて、その存在を確かめたい。剣人にはそれしかなかった。

「ほら！ 着いたぞ！」

倉庫の前に辿り着き、パトカーはようやくその車体を止めた。途端に剣人はドアを開け放って飛び出し、彼女たちのいる倉庫に向かう。そこでは警察の助けを待つさくらたちが倉庫の入口の前で固まっていた。剣人は誰よりも先に駆けつけ、人々に向かって叫んだ。

「皆さん！ 輸送車が来ます！ 早くそちらに乗り込んでください

！」

剣人が振り返ると、遅ればせながら輸送車がやってくるところだった。顔を安堵にほころばせ、社長達はゆっくりと剣人に歩み寄り、「ありがとうございます。助かりました。」

その時だ。剣人は、倉庫の背後にスズメバチの姿を見た。剣人は目を見開き、慌てて人々を手招きした。

「皆さん早く！ サイバーが来てます！」

その声に、人々は一斉に後ろを振り返る。そこにいたのは、まさにスズメバチだった。羽根にミサイルのようなものを携えたそれは、蒼く光る目で冷たく倉庫を見下ろしていた。人々は震え上がり、悲鳴を上げながら慌てて走りだした。足をもつれさせたりしながら、我先にと輸送車へ急ぐ。剣人はそんな人々を避けつつ、見開かれたその目は真っ直ぐさくらを捉えていた。彼の目の前で、彼女は剣人に向かって必死に走りだそうとしたが、鋭い頭痛に堪えかねて、一歩も踏み出さないうちにへたり込んでしまったのだ。

「さくら！」

頭を押さえてうづくまるさくらの元に、剣人は素早く駆けつけた。苦痛に歪むさくらの顔を覗き込み、必死に肩を叩いて呼び掛ける。

「さくら！ 大丈夫か！」

「……ごめん。肩貸して」

さくらの絞り出すような声を聞いて、剣人は思わず涙ぐんだ。さくらの腕を首に回し、彼女をゆっくり支えてやる。

「おい！ 大丈夫か！」

輸送車の方から高屋の声が飛んでくる。剣人は一瞬つつむき目を泳がせたが、すぐに顔を上げて声を張った。

「高屋さんは先に行ってください！ パトカーで追いかけます！」

「そ、そうか！ 無事でいろよ！」

それだけ言い残し、輸送車は動き出した。それを青い顔で見送りながら、さくらは弱々しく呟く。

「ごめんね。私のせいで……」

「いい。お前は気にするな」

連れだつて歩き、必死に生きようとする二人。その仲を、はたして邪魔できる者がいるだろうか。しかし、今この場にいるのは『者』ではない。『物』なのだ。今までも、人々が逃げ出すのを慈悲で待っているわけではなかった。冷酷な青い目を倉庫に走らせ、任務遂行のための計算をしていただけなのだ。

「Follow the given command!」

スズメバチはそう叫んだ瞬間、四つの羽に取り付けられたミサイルを全て撃ち出す。ミサイルは倉庫に突き刺さり、全てを吹き飛ばした。サイバーや倉庫のコンクリートの瓦礫が一緒くたになって、剣人達にも襲いかかる。

「まずい!」

剣人は一瞬振り返り、さくらの事を半ば引つ張るようにして走ろうとした。しかし、人間の脚力で吹っ飛んでくる瓦礫から逃げおおせられるはずもない。咄嗟に気付いた剣人は、歯を食いしばりながら覚悟を決めた。さくらを自分の前に引き出し、全身の力を込めて彼女の事を突き飛ばした。

「うわっ」

抗う力も無く、さくらは地面に投げ出される。同時にさくらの背後で地面を揺るがす轟音が響いた。さくらはハツとなり、金切り声を上げた。

「剣人!」

目の前に降り注ぐ瓦礫。さくらは絶望に心臓を鷲掴みされ、絶叫した。その声は港中を震わす。だが、さくらの悲痛はやはり、かの機械には届かなかった。

「Given command completed」

瓦礫の山と化した倉庫を見下ろし、一言呟いてスズメバチは行ってしまった。取り残されたさくらは再び崩れ落ち、顔を歪め、止めどなく溢れ出す涙で地面を濡らした。

「剣人。どうして? どうして……」

さくらは自分を責めていた。頭痛などで自分がへたり込んだせいで、剣人は自分を守ろうとして、飛んできた瓦礫に巻き込まれてしまったのだ。その事実を確かめれば確かめるほど、さくらの心は抉られていった。

「嫌だ……嫌だよ……こんな所で死んじゃうなんて嫌あ……」

さくらが嗚咽をもらした時、目の前で微かな物音が聞こえた。目を裂かんばかりに開き、さくらはゆっくりと顔を上げる。間違いない何かを聞こえた。さくらはそれを確かめると、慌てて瓦礫の方角に駆け寄った。

「剣人！ 剣人！」

「さくら……」

剣人は、瓦礫の側、正確に言うならば、瓦礫に膝から下を埋めてしまったような形で倒れていた。焦点の合っていない瞳で、必死にさくらのことを見つめようとしていた。さくらは半ば飛びつくようにして剣人のそばに膝をついた。

「剣人！ ……よかった。生きてた……」

「ああ。何とかな……悪い。くらくらしで動けないから、俺を引っ張り出してくれ」

さくらは頷くと、剣人の脇を横から抱え、何とか彼を瓦礫の山から引きずりだした。幸運にも瓦礫の隙間に足は入り込んでいて、簡単に出してあげられそうだった。さくらは一瞬そう思った。しかし、その感覚は半分当たりで、半分違っていた。さくらは剣人の足元を見つめ、そして三度崩れ落ちた。彼の左足は無事だった。何事も無く、無傷でそこにあった。しかし、右足は、膝より下が瓦礫に押しつぶされ、失われていた。流れ出る血の鮮やかさ、臭いがさくらに現実の二文字を、静かに突きつけていた。

「剣人！ 足が。足が……」

剣人の目が虚ろだったのは、痛みを忘れるために頭が呆けていたからだだったのだ。さくらは目を真っ赤に腫らしてしゃくりあげ、うつ伏せに倒れる剣人に向かって頭を垂れた。



「ごめんなさい。ごめんなさい。……私のせいだよ。私のせいで  
剣人は……」

「……泣くな」

剣人が蚊の鳴くような声で呟く。だが、我を見失って泣き続ける  
さくらにそんな声は届かなかった。顔を歪め、剣人は体を起こそう  
としながら叫んだ。

「泣くな！ 俺は」

言葉が切れた。呆けた頭を現実に引き戻したために、右足を失っ  
たことを告げる激痛が彼の全身を貫いたのだ。剣人は絶叫し、仰向  
けになって背中をぴんと反らせた。剣人の剣幕とその惨たらしい様  
子に、さくらは思わず大きく身震いして体を硬直させた。肩で息を  
しながら、剣人は腕を伸ばしてさくらを引き寄せる。

「俺はお前を守れたんだ。右足、それも膝から下くらい安いもんだ  
……俺はさくらの笑顔をずっと見ていたい。だからお前を守ったの  
に。泣くなよ……お前言ったよな？ 俺達に辛気臭い顔なんか似合  
わないって……笑えよ。お前が一番、そんな顔似合わないんだよ……」

さくらは大きくしゃくりあげた。鼻をすすり、目からは大粒の涙  
が今も溢れている。しかし、さくらは唇を震わせながら、何とか口  
角を持ち上げ、小さな微笑みを作り上げた。

「これで、いい？」

「ああ。さくらはやっぱり笑顔じゃないとな……」

剣人がわずかに微笑んだのを見て、さくらは指で涙を拭いた。ス  
ーツを脱ぐと、ワイシャツの右袖を掴んで一気に引っ張った。甲高  
い音と共に、袖は裂けた。冬日だったが、さくらは寒さだとか、そ  
んなものはもう感じていなかった。

「今から止血するね。痛いけど……ちょっとだけ我慢して」

剣人が頷くと、さくらは触れてしまわないよう気をつけながら、  
切り離れたワイシャツの袖を右足の傷口近くに回し、一気に縛り上  
げた。襲いかかった鋭い痛みにも、剣人は思わず顔をしかめる。

「うあつ！　いてエ！」

「我慢して。お願い！」

剣人の苦しそうな顔に、さくらは顔をしかめたが、何とかワイシヤツの袖で右足を絞め上げ、溢れ出す血を止めた。引き締まった彼の足を絞るには相当力が要ったようで、さくらは肩で息をしていた。何とか血を止めたことで、さくらの胸にはようやく安堵が立ち上ってきた。さくらはスーツを着直し、くすりと笑う。

「よく我慢できました」

「……冗談じゃねえよ」

剣人も苦笑いしながらさくらの腕を叩いた。静かにさくらは座り直し、改まった。思いつめた表情で、さくらは剣人に向かって小さくとも明瞭な声で切り出した。

「剣人。……私、今日から柳やなぎさくらだから」

「は？」

剣人は足を失った男とは思えないほど気の抜けた表情をして、さくらに問い返した。さくらは笑顔の中にも真剣な色を帯びた瞳で剣人を見据えた。

「だから。今日から私はあなたの奥さんになるってこと。ずっとそばで、片足を失くしちゃったあなたを支え続けるってことよ」

さくらの言葉には、一切の揺らぎがなかった。驚きの眼差しで剣人はさくらのことを見つめていたが、やがて諦めたように鼻を鳴らし、苦笑いした。

「……柳に桜か。変な名前になっちまったな」

さくらは肩を竦めた。その顔には、どこにも一切の後悔がなかった。

「別に。響きはいいいじゃない。……さあ、何とか立ってもらおうよ。あのパトカーは私が運転するけど、まずそこまでたどり着かなきゃね」

「ああ……辛いなあ」

ぼんやりと呟く剣人の肩を叩き、何とか引きずり起こそうとした。

その時、遠くから低い声が聞こえてきた。

「まあまあ。仲の良いご夫妻だな」

さくらは素早く振り向いた。そこに立っていたのは、いつだったか、テレビで見た顔の男だった。剣人は何とか顔を上げ、その男を見た。

「工藤……征尚。お前はどのようにここにいるんだ。拘置されていたんじゃないのか」

「俺にとって、牢屋などあってないようなものだ。今までは大人しく捕まってるだけでいいだけのこと」

工藤は、仮面を被ったように無表情のまま言い放った。剣人は顔をしかめ、舌打ちしながら声を振り絞った。

「ここに何しに来たんだよ！ 何のつもりだ！」

「さあな？」

さくらはようやく思い出した。こいつは大希に瓜二つの男を殺し続け、果てには大希自身に捕らわれた男だ。さくらは危機感が身を駆け抜けていくのを感じた。大人しい作りの顔を必死に歪め、工藤に向かって叫んだ。

「来るな！ 私達をどうするつもりよ！」

「……殺す、って言ったら？」

さくらは心臓が跳ねるのを感じた。冷や汗が全身に浮き出て、自然と体が震えてくる。しかし、さくらは恐怖を何とか振り払った。後ろには、守るべき人がいる。そう思えば、さくらは殺人鬼を怖がってなどいらなかった。剣人の腰に備えられた拳銃を引き抜き、ゆっくりと工藤に向かって狙いを定めた。目をかっと開き、自分の中にある恐怖を全て追い払うように叫んだ。

「それより先に、私がお前を撃つ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9326w/>

---

原子番号173

2011年12月22日23時49分発行